

山陰における前方後円墳の出現過程

2010年度～2012年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書

課題番号: 22520765

2013年3月

研究代表者 高田健一

(鳥取大学地域学部准教授)

鳥取大学地域学部

例言

1. 本書は、日本学術振興会科学研究費補助金を受けて実施した研究の報告書である。研究の課題、経費、成果等は以下のとおりである。

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010年度～2012年度

課題名：山陰における前方後円墳の出現過程（課題番号：22520765）

研究組織：研究代表者 高田健一（鳥取大学地域学部准教授）

研究経費：2010年度 直接経費：100万円、間接経費：30万円

2011年度 直接経費：90万円、間接経費：0円

2012年度 直接経費：90万円、間接経費：0円

研究成果：本書

2. 関連研究発表等

高田健一 2012(口頭発表)「鳥取県西伯郡南部町・普段寺1号墳の調査」、考古学研究会岡山例会(2012.1.7、岡山)

高田健一・岩本 崇(編) 2011『普段寺古墳群Ⅲ―第8次調査概要報告書―』普段寺古墳群調査団

高田健一・岩本 崇(編) 2012『普段寺古墳群Ⅳ―第9次調査概要報告書―』普段寺古墳群調査団

高田健一(編) 2013『古郡家1号墳・六部山3号墳の研究―出土品再整理報告書―』鳥取県

3. 本書は、研究課題の中で主要な部分を占める普段寺1号墳の発掘調査について、現段階までの情報を整理し、見解をまとめたものである。なお、この調査は、鳥取大学地域学部考古学研究室と島根大学法文学部考古学研究室が合同して組織した普段寺古墳群調査団が2006年度以来行なってきた。高田は、調査開始時から調査担当者として関わっているが、調査成果は調査団に帰属する。調査団の正式な見解をまとめた発掘調査報告書は、既存遺物の再整理作業も踏まえて改めて刊行する予定である。
4. 本研究を進めるにあたって、渡辺貞幸、大橋泰夫、山田康弘、岩本 崇の諸先生には、普段寺1号墳の調査段階からさまざまな点でご協力、ご指導いただいた。また、君嶋俊行、阪口英毅、濱田竜彦、東方仁史、古谷 毅の各氏には資料調査、文献探索等の点で大変お世話になった。あつく感謝申し上げる。

本文目次

1. 普段寺古墳群調査の目的と経過	4
1-1 古墳の発見とその後の調査歴	
1-2 発掘調査の目的と経過	
2. 調査対象地域の概観	8
2-1 古墳時代まで	
2-2 古墳時代	
3. 普段寺1号墳の発掘調査	16
3-1 調査課題と調査区の設定	
3-2 前方部調査の概要	
3-3 くびれ部調査の概要	
3-4 後方部調査の概要	
3-5 墳頂部埋葬施設調査の概要	
3-6 墳丘形態と構築過程の復元	
4. 出土遺物	40
4-1 既知の出土遺物	
4-2 発掘調査による出土遺物	
5. まとめと展望	53

註

参考文献

挿図・表目次

図1 普段寺古墳群位置図	4
図2 普段寺古墳群（1～5号墳）地形測量図	7
図3 周辺のおもな遺跡	9
図4 田住桶川遺跡木棺墓群と朝金小チャ墳丘墓	10
図5 日原6号墳の墳丘と出土武器	11
図6 浅井11号墳	11
図7 浅井11号墳出土面文帯神獸鏡	12
図8 三崎殿山古墳	13
図9 大亀塚古墳と表採円筒埴輪	15
図10 トレンチ配置図	16

図 11 第 1、2 トレンチ平面図・断面図	17
図 12 第 3、9 トレンチ平面図・断面図	18
図 13 第 10 トレンチ平面図・断面図	20
図 14 第 12、14 トレンチ平面図・断面図	21
図 15 第 6 トレンチ平面図・断面図	22
図 16 第 4 トレンチ平面図・断面図	23
図 17 第 6 トレンチ拡張区・第 11 トレンチ平面図・断面図	25
図 18 第 7 トレンチ平面図・断面図	26
図 19 第 8 トレンチ平面図・断面図	27
図 20 第 13 トレンチ平面図・断面図	29
図 21 墳頂トレンチ平面図・南北サブトレンチ東壁断面図	32
図 22 墳頂トレンチ・サブトレンチ北壁断面図	33
図 23 SX02 平面図・断面図	34
図 24 大型土器棺墓の墓壇	35
図 25 1 号墳の墳丘形態復元図	37
図 26 1 号墳出土三角縁神獣鏡	41
図 27 1 号墳出土鉄器・管玉	42
図 28 1 号墳出土大型広口壺	44
図 29 1 号墳出土楕円形合子形土器	45
図 30 1 号墳墳丘出土土器（1）	47
図 31 1 号墳墳丘出土土器（2）	48
図 32 西側くびれ部土器棺に使用された土器	51
表 1 墳丘盛土と埋葬施設構築方法の関係	53

図出典

- 図 4：北浦他 1997 第 45 図、岡田他 1995b 挿図 19 を一部改変して再トレース
 図 5：墳丘図は小原 1978 図 3、図 4 を合成、遺物図は報文図より再トレース
 図 6：久保 2010 図 3 を一部改変して再トレース
 図 7：筆者実測、製図
 図 8：鳥取県立公文書館県史編さん室提供図を一部改変
 図 9：墳丘図は米子市史編さん協議会 1999 より一部改変して再トレース、円筒埴輪は既報告図（概報Ⅱ）
 図 26：筆者実測、製図
 図 27：立谷聡明・岩本崇実測、筆者製図
 図 28：既報告図（概報Ⅱ）
 図 29：筆者実測、製図
 図 30：岩本崇・高橋里沙・中原計実測、筆者製図
 図 31：岩本崇・筆者実測、製図
 図 32：既報告図（概報Ⅲ）

1. 普段寺古墳群調査の目的と経過

1-1 古墳の発見とその後の調査歴

普段寺古墳群¹⁾は、鳥取県西伯郡南部町（旧会見町）天万字下普段寺山に所在する古墳時代前期を中心に築造されたと考えられる古墳群である（図1）。その考古学的な認識は1921（大正10）年に農業用溜池の造成工事に伴って2号墳が破壊され、三角縁珠文帯四神四獣鏡が出土したことに始まる。当時古墳群は、直径約9間（16m）、高さ2間（3.6m）の2号墳が円墳として、前後の長径約12間半（22.5m）、後円部径6間半（11.7m）、高さ8尺（2.4m）の1号墳が前方後円墳として認識されたが、2号墳が大きく破壊されて鏡等の遺物が出土したのであった。このことは、当時鳥取県史蹟名勝天然記念物調査委員に委嘱されていた梅原末治氏に伝えられ、六朝以前の中国鏡の一例として報告された（梅原1924）。

出土状況の聞き取りによって埋葬施設は木棺直葬と推定されたが、それ以上の詳しいことは分からない。また、鏡と近接して「陶質容器片」が得られたり、「弥生式土器片」が採集されたりしたが、それがどのようなものか説明はなく、現物も十分に伝わっていないため、確認できない。なお、同じ造成工事の際に削平された1号墳西側くびれ部からも土器棺が出土したとの伝聞がある。ある時期までは地元で保管されていたようであるが、これも現物の確認が取れないため、どのような土器であったのか分からない²⁾。

その後、1952年に地元の中学生2名によって1号墳の埋葬施設が発掘され、三角縁唐草文帯二神二獣鏡、管玉、鉄剣片等が掘り出された。当時、鳥取県に委嘱された文化財専門委員であり、佐々木古代文化研究室代表でもあった佐々木謙氏が出土の経緯を聞き取ったところによると、中学生は「昭和27年6月頃」に「後円部を発掘して三角縁神獣鏡を発見した。2尺位の深さで鉄剣の破片もでてきた」ということであった³⁾。

この証言を受けて、佐々木古代文化研究室が古墳の性格解明と残存遺物の回収を目的として、4年後の1956年8月に墳頂部を発掘したようである。調査内容についての詳細は不明であるが、当時のメモや写真等から推測すると、後方部墳頂部の北東隅で大型壺等を使用した土器棺墓を新たな埋葬施設として検出するとともに、盗掘坑が再調査されて既出の鉄剣と同一個体と考えられる切先片が出土したようだ。墳頂部の土器棺墓は地表下5cmほどの浅い部分にあり、先の中学生からの聞き取りの際にその存在が判明したため、調査対象にしたらしい。副葬品等は存在しなかったというが、現場図面は残されておらず、出土状態等の詳細も不明な点が多い。また、盗掘坑の再調査がどの程度の規模と内容をもっていたのか分からないが、後述する墳頂トレンチの調査成果から推測すると、盗掘坑の範囲内を横断するようにトレンチ状の調査区を設け、掘り下げた可能性が考えられる。

出土した遺物の内、2面の三角縁神獣鏡と土器棺に使用された大型広口壺については、その後の考古学的研究の中でしばしば取り上げられる存在となった。とりわけ、三角縁神獣鏡はその同型（範）鏡群が鋳型の



図1 普段寺古墳群位置図

改変、補刻等を伴うことから、製作技法を考究するうえで示唆に富む資料群であり、中国鏡との文様の互換性によって年代的定点を有する例でもあること等から、遺物研究の上でも重要な位置を占めてきた（樋口 1952、中原 1988、福永 1996、藤丸 2000、下垣 2005、岩本 2009）。なお、これまでに判明している 1 号墳の同型鏡には、島根県安来市大成古墳、伝大阪府東大阪市石切神社古墳、推定大阪府茨木市將軍山古墳出土鏡の 3 面があり、2 号墳の同型鏡には熊本県宇土市城ノ越古墳出土鏡がある。

また、大型広口壺に関しては、古墳における土器棺墓の位置付けや性格を探究した論考の中で、しばしば取り上げられてきた（東森 1967、松本 1986）。また、普段寺 1 号墳の編年の位置を探る際の判断材料としても重視され、島根県三刀屋町松本 1 号墳（山本他 1963）等に対比できる資料として捉えられる中で、方墳から前方後方墳への展開を論じる基盤を提供してきたと言えよう。

一方、三角縁神獣鏡の研究が進展し、あるいは前期古墳の編年が各地で整備される 1980 年代後半～90 年代前半になると、山陰における代表的な前期古墳として、普段寺古墳群についても改めて基礎的な情報整理が求められたと考えられる。これまでに墳丘測量を試みた例としては、山陰考古学研究所、岡田龍平氏、東森市良氏・松本哲氏らによる成果がある。残念ながら、それらの成果が公刊される機会は少なく、調査対象が古墳群全体に及ぶこともなかったため、遺物に比べて、古墳そのものに対する理解は深まっていかなかったようだ。1970 年代末頃までには 1 号墳は前方後円墳ではなく、前方後方墳であるとの認識に改まったが、墳丘規模や内部構造等については詳細が不明なままであった⁴⁾。

ただし、1999 年には、『新修米子市史』第 7 巻資料編考古・原始・古代・中世（以下、米子市史資料編と略記）が出版され、かつて山陰考古学研究所が作成した墳丘測量図とともに、それまでよく知られていなかった三角縁神獣鏡以外の出土遺物についても実測図等が公表された。詳しい記述はないものの、1956 年に調査された土器棺、合子形土器についても新しく作図された実測図が掲載された。遺物の出土から半世紀近くを経て、ようやく古墳の再評価を行なうための材料や環境が整ってきたと言える。

1-2 発掘調査の目的と経過

1 号墳を前方後方墳とする認識は定着したものの、遺構に関する情報は不足しているし、2 号墳以下については不明な点が多すぎる。山陰における古墳の出現やその地域的展開を論ずる際、常に言及の対象となる古墳群であるが、その全体像は第三者に明らかな形で提示されたことがないのが現状と言えよう。三角縁神獣鏡以外の遺物に関しては、出土して以来基礎的な整理が行なわれていないものも存在するし、出土状態や出土地点といった基礎的な事実も、整理されているものが実は少ない。また、墳丘等の遺構に関する知見は、測量図や現地観察から窺い知る以上の知見はない、というのが実態である。既知の副葬品群とともに、墳丘や埋葬施設、その他の古墳構成諸要素を総合的に理解することができれば、山陰地方における古墳の出現・展開過程を探るうえで重要な知見を提供するものと考えられた。

このような課題意識にもとづき、2006 年度から継続的に墳丘規模・形態等の解明を目指した測量調査（第 1、2 次）、発掘調査（第 3～9 次）を実施してきた。調査の内容については、すでにその概要を報告してきたところであるが（大橋他 2008、高田他 2010～2012）、以下のような経過をたどった。

まず、第 1 次調査（2006 年 8 月 18 日～9 月 1 日）と第 2 次調査（2007 年 3 月 27 日～4 月 2 日）で古墳群の測量調査を行なった。従来は 1 号墳と 2 号墳しか対象とされてこなかったが、周辺地形も含んだ上で 5 号墳までの範囲を縮尺 100 分の 1 で図化した（図 2）。

これによって古墳群の立地の特性や構成が明らかになった。とくに 3 号墳より南に位置する低墳丘墳の存在は、本古墳群のみならず、地域の古墳時代史を復元する上でその展開過程を追究する必要性が感じられた。しかし、それらは長期的課題として対処することとし、当面は遺構の情報に乏しい 1 号墳、2 号墳について、基礎的な事実を明らかにする発掘調査を順次実施していくことが必要と考えられた。

第 3 次調査（2007 年 8 月 17 日～9 月 3 日）を皮切りに墳丘形態、規模の確認を目的とした発掘調査を行

なった。墳丘規模や形状把握のため、第4次調査(2008年3月28日～4月6日)、第5次調査(2008年8月18日～9月5日)、第7次調査(2009年8月17日～9月15日)を実施した。第7次調査からは後方部墳頂に調査区を設け、埋葬施設の確認調査にも着手している。埋葬施設の構築場所や構築順を考慮し、大型土器棺墓の墓壇把握に注力した。なお、第6次調査(2009年3月19日～3月26日)とするのは発掘調査ではなく、古墳周辺の分布調査や過去の出土遺物の追跡調査等を行なったものである。

上記までは前方部～くびれ部における墳形の把握に重点を置いたが、第8次調査(2010年8月17日～9月14日)では、後方部のコーナー部にも調査区を設けて後方部の形状と規模の確認を行なった他、中心埋葬施設の確認調査に力を注いだ。墳丘形態を確定する重要な情報を得る一方で、古墳築造の基盤になった風化花こう岩盤(地山)の理解を一部改める必要が生じた。そのような認識の変更に伴い、墳丘裾の位置や平面規模について再検討が必要になった。第9次調査(2011年8月22日～9月20日)では、この課題解決のために、すでに調査したトレンチを改めて再検討することを試みた。その結果、墳丘形態と規模、構造についておおむね確定的な見解を提示することができるようになった。

また、墳丘調査と並行して、後方部墳頂において埋葬施設の検出を継続してきた。後述するように、かつて三角縁神獣鏡が出土したとされる地点を中心に、何度も攪乱をこうむっており、大部分は破壊されていた。しかし、断片的ながら、中心埋葬施設の規模や構造についても情報を得ることができた。

5年間の現地調査の蓄積によって、1号墳の墳丘や埋葬施設の構造、それらの築造時期等について、基礎的な情報は得られたと考える。2号墳を含めた古墳群全体の性格を解明する作業は今後の課題として残るが、現地調査が一定の蓄積をみた段階のなるべく早い時期に調査成果をまとめる必要があると考えられた。2012年度からは既存遺物の再整理にも本格的に着手し、佐々木謙コレクションとして米子市に寄贈された遺物の実測作業等を開始した(2012年8月20日～9月2日)。

当初の目標である既存出土遺物と現地調査の成果を合わせた、トータルな評価を行なうためには、さらなる整理期間が必要である。本書では、これまで個別の概要報告書で報告してきた内容を整理、修正した上で再提示するとともに、出土遺物についても現時点までの知見を報告する。

なお、調査は、鳥取大学と島根大学の考古学研究室が合同で組織した普段寺古墳群調査団が主体となって行なってきた。調査にご理解とご支援をくださった、土地所有者をはじめとするさまざまな方々に深く感謝申し上げる。また、本書に収録した内容は、ともに調査を行なってきた下記の方々との共同の成果である。地域の古墳研究に資するところがあれば、それを生み出したのは調査団に参加して一つ一つの事実の積み上げに力を注いだ参加者の成果である。不足するところは、その成果を十分にまとめ切れなかった筆者の責任である。今後さらに努力していきたい。

調査参加者：渡辺貞幸、大橋泰夫、山田康弘、岩本 崇、鈴木 圭、岡崎由希、志賀明日香、瀧川裕子、原 浩平、三井 修、大橋賢太郎、田中 大、林田好子、幸村康子、宇積杏奈、坪倉宇杏、森藤徳子、岡本新平、沖田知也、矢頭 翔、橋本友美子、古橋 渉、柴田康磨、立谷聡明、森本のぞみ、佐々木友紀、横山聡子、佐野桃乃、中島 強、高橋里沙、東野純子、磯貝龍志(以上、島根大学)、中原 計、濱田真由美、北浦実、有田武司、尾上英孝、川崎 格、西村直子、樋口剣四郎、藤田 学、福代圭佑、正木伸男、井田 智、上村優揮、足立翔平、大西真帆、河本真志、北脇禎恵、小谷静子、柿坂明宏、株本修司、清水瑞穂、田本将大、宮原孝仁、佐藤 譲、徳田早苗、中川裕斗、上山 梓、奥田祐介、幸山拓嗣、下垣友佳里、二岡 瞳、瀧田隆成、古田恵理、山岡 歩、山根 敦、山本裕太、松阪 聡(以上、鳥取大学)、奥山 貴(大手前大学)、志賀武史(熊本大学)

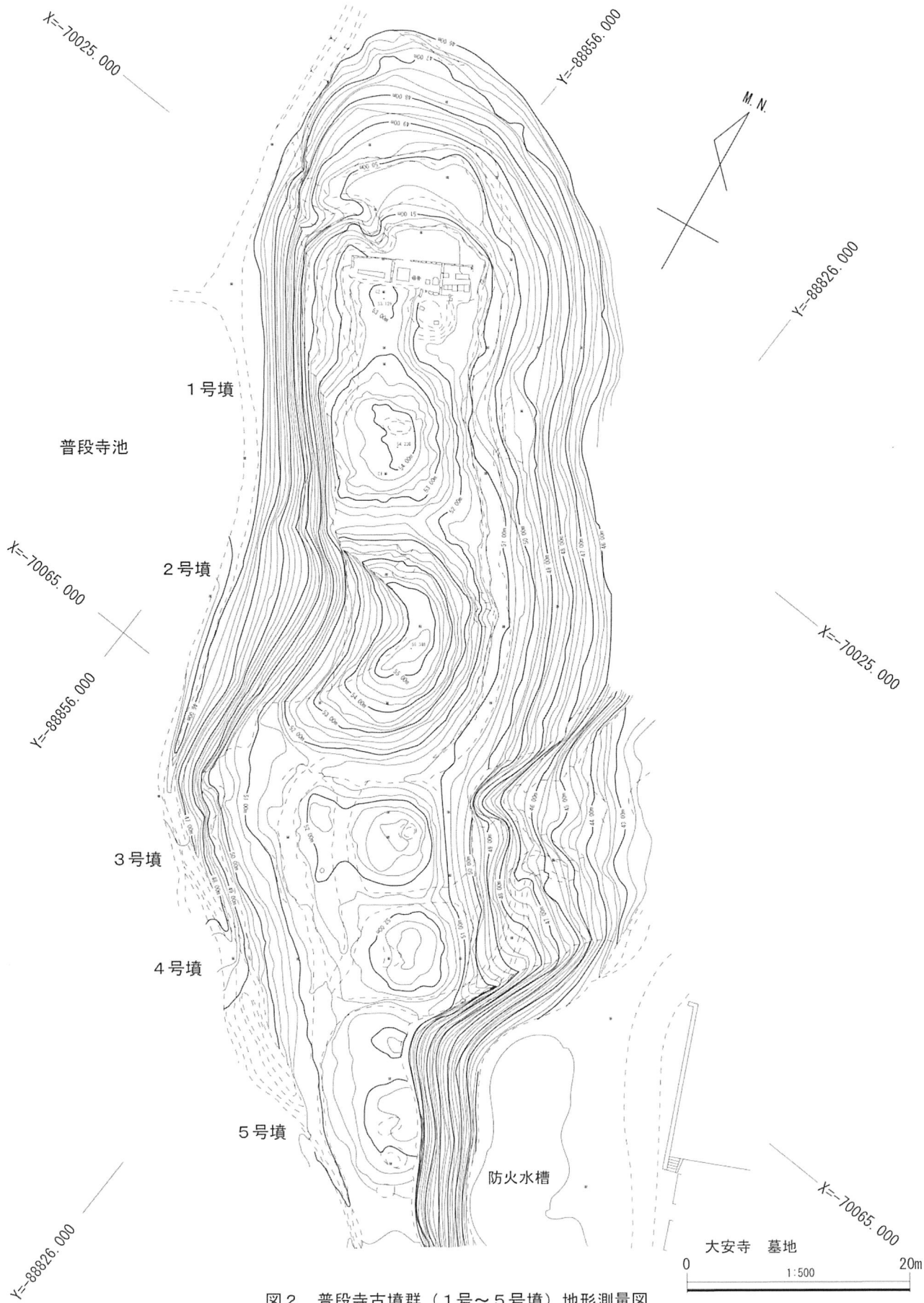


图2 普段寺古墳群（1号～5号墳）地形測量図

2. 調査対象地域の概観

普段寺古墳群（図3-1）が位置する西伯郡南部町（旧会見町域）は、米子市の南郊外にあって豊かな自然環境や田園風景を残しつつも、近年では道路や住宅団地開発等によって急速にベッドタウン化が進みつつある。この地域は、戦後の比較的早い時期から考古学的な関心が寄せられてきた。地域最大クラスを含む前方後円（方）墳の集中地帯でもあって、山陰における原始・古代史研究には欠かせない地域の一つである。発掘調査等によって判明する考古学的事実を元に、古墳時代前後の時期を中心に地域像を概観しよう。

2-1 古墳時代まで

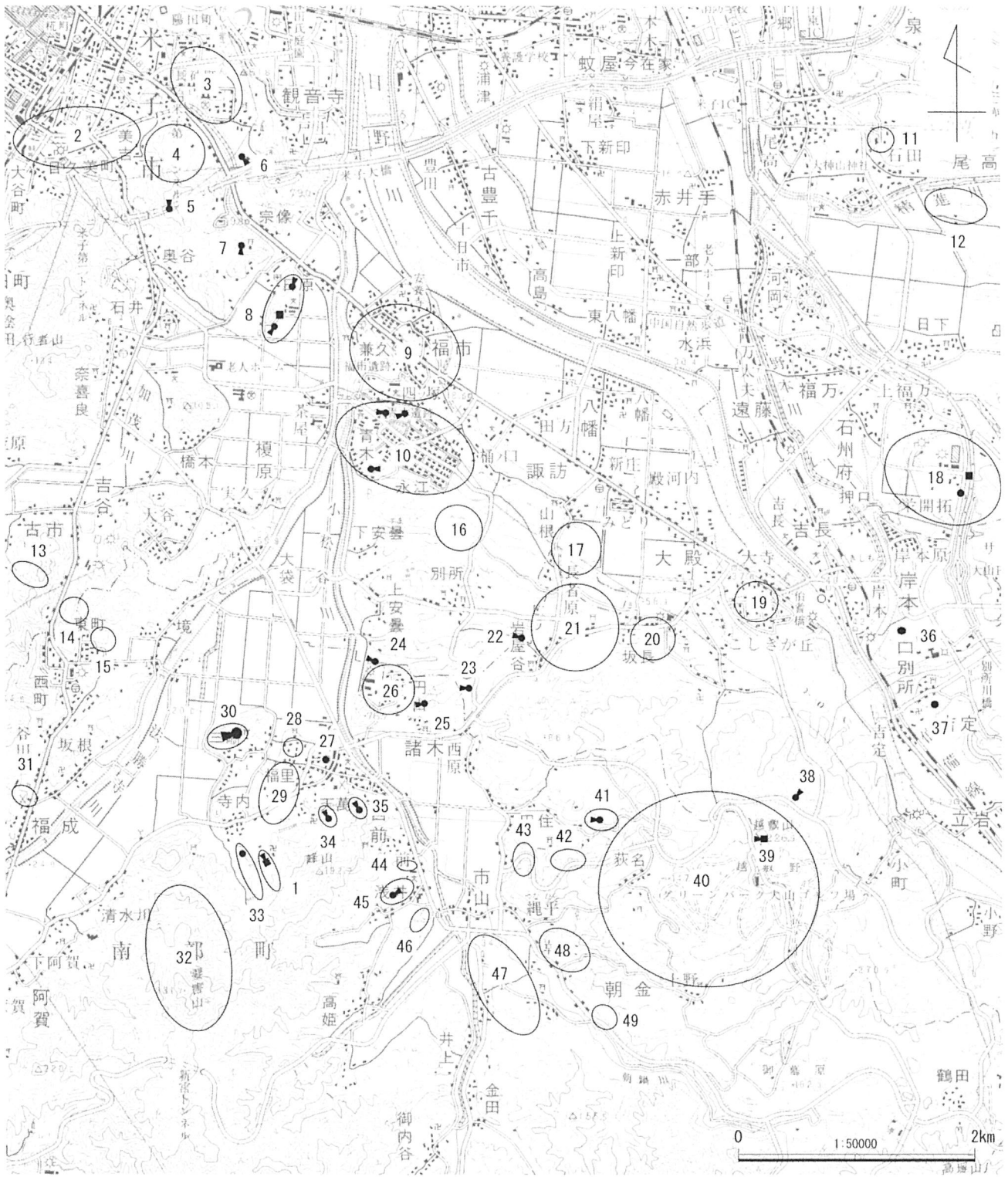
この地域で遺跡の確認数が増加し始めるのは、縄文時代晩期からである。おもに低地に面した丘陵裾や低位段丘を中心に晩期の遺構・遺物が見つまっている。未調査の遺跡も多いが、米子市大袋丸山遺跡（下高 1991）、同古市河原田遺跡（濱田 1999）、同諏訪南山崎遺跡（17：高橋 2006）等の調査成果によると、晩期後半の突帯文期に画期がある。古市河原田遺跡、諏訪南山崎遺跡の深鉢形土器にイネ圧痕が見られることから知られるように、農耕への傾斜を示しつつある段階の遺跡で、弥生時代前期にも継続する場合が多い。

弥生時代になると、遺跡数が大幅に増加する。この地域では前期の環濠が多く、南部町諸木遺跡（26：赤井 1975）、同宮尾遺跡（28：岡田他 1982）、同清水谷遺跡（31：松本他 1992）、同天王原遺跡（47：新井 1993）が1～2 kmほどの距離を置いて点在する。一部は中期中葉まで存続するものの、掘削時期は前期後半に集中するようだ。これらの環濠のほとんどは径40～50 mほどの小規模なもので、内部に同時期の居住遺構を含まない事例もあることから、単純に環濠集落とは呼べない。このような環濠は、山陰地方では、遺物に縄文時代的な要素がなくなり、水稻農耕文化が定着する段階で短期的に出現する事例が多いことから、集団関係の再編期に何らかの地域的紐帯を表現したものであるという理解が示されている（濱田他 2005）。

前期における居住域のようすは判然としないが、米子市別所新田遺跡（16：船越他 1982）で木棺墓群が調査されている他、近年調査された法勝寺川左岸の丘陵裾に位置する南部町境矢石遺跡（15）では、前期を中心に営まれた多数の木棺墓群が見つまっている（2011年度調査）。いずれも頭位を一方にそろえず、集塊状の配置（沖丈類型：山田 2000）をとるものが多い。この地域における初期農耕文化の担い手となった人びとの系譜を語る上でも重要な事例と言えよう。

中期には竪穴式住居や貯蔵穴等の生活関連遺構が明確になるため、安定的に営まれた集落遺跡が増加すると考えられる。比較的起伏が緩やかな越敷山丘陵や長者原台地周辺は大規模な開発工事等によって発掘調査が行なわれた遺跡が多く、弥生時代集落に関する知見がよく蓄積されている。米子市福市・青木遺跡（9、10：大村他 1969、船越他 1976～1978）、南部町・伯耆町越敷山遺跡群（40：中原 1992, 1994）、天王原遺跡は比較的まとまりをもった居住域が検出されている好例である。同時併存住居が2～3棟前後の居住単位が1～数単位存在するような規模が通例である。平地の居住域では比較的存続期間が長く、複数様式期にわたって遺物が出土する場合があるが、例えば、伯耆町鶴田合清水遺跡（西川 1995）等のように、丘陵上では遺物の時期も散発的で遺構の切り合いも少ないこと等から、短期的な居住域と考える遺跡も存在する。また、中期によくみられる集落構造として、竪穴式住居を中心とした居住空間と大型の掘立柱建物を中心とした祭祀空間の二者がセットになる事例が多い（濱田 2003）。南部町浅井土居敷遺跡（46：会見町教育委員会 1981）は、祭祀的な土器が一括廃棄された特殊な土坑が伴う大型掘立柱建物が検出されており、弥生時代集落の実態を探る上でも興味深い事例である。

また、南部町宮前遺跡（44：岡田他 1979）で中期中葉～後葉に営まれた木棺墓群が見つまっている。前期に比べて伸展葬化が進んだと考えられるサイズの木棺が多いが、集塊状の配置は変わらず、区画がほとんど発達しない点は、同じ山陰でも出雲と異なる点である（池淵 2007、高田 2010）。また、成人墓と小児墓が混



- 1 普段寺古墳群 2 目久美・池ノ内遺跡群 3 長砂遺跡群 4 美吉遺跡群 5 高山古墳 6 東宗像2号墳 7 宗像1号墳 8 日原6号墳
 9 福市遺跡 10 青木遺跡 11 尾高城跡 12 尾高浅山遺跡 13 古市古墳群 14 吉谷中馬場山遺跡 15 境矢石遺跡 16 別所新田遺跡
 17 諏訪南山崎遺跡 18 石州府古墳群 19 大寺庵寺跡 20 坂中庵寺跡 21 長者原遺跡 22 別所1号墳 23 二子塚古墳
 24 大亀塚古墳 25 後裕山古墳 26 諸木遺跡 27 日ノ岡古墳 28 宮尾遺跡 29 天萬土井前遺跡 30 三崎殿山古墳 31 清水谷遺跡
 32 手間要害跡 33 寺内古墳群 34 延久山3号墳 35 宮前3号墳 36 岸本7号墳 37 吉定1号墳 38 越敷山19号墳
 39 越敷山13号墳 40 越敷山遺跡群 41 田住古墳群 42 田住松尾平遺跡 43 田住桶川遺跡 44 宮前遺跡 45 浅井11号墳
 46 浅井土居敷遺跡 47 天王原遺跡 48 朝金古墳群 49 朝金小チャ墳丘墓

図3 周辺のおもな遺跡

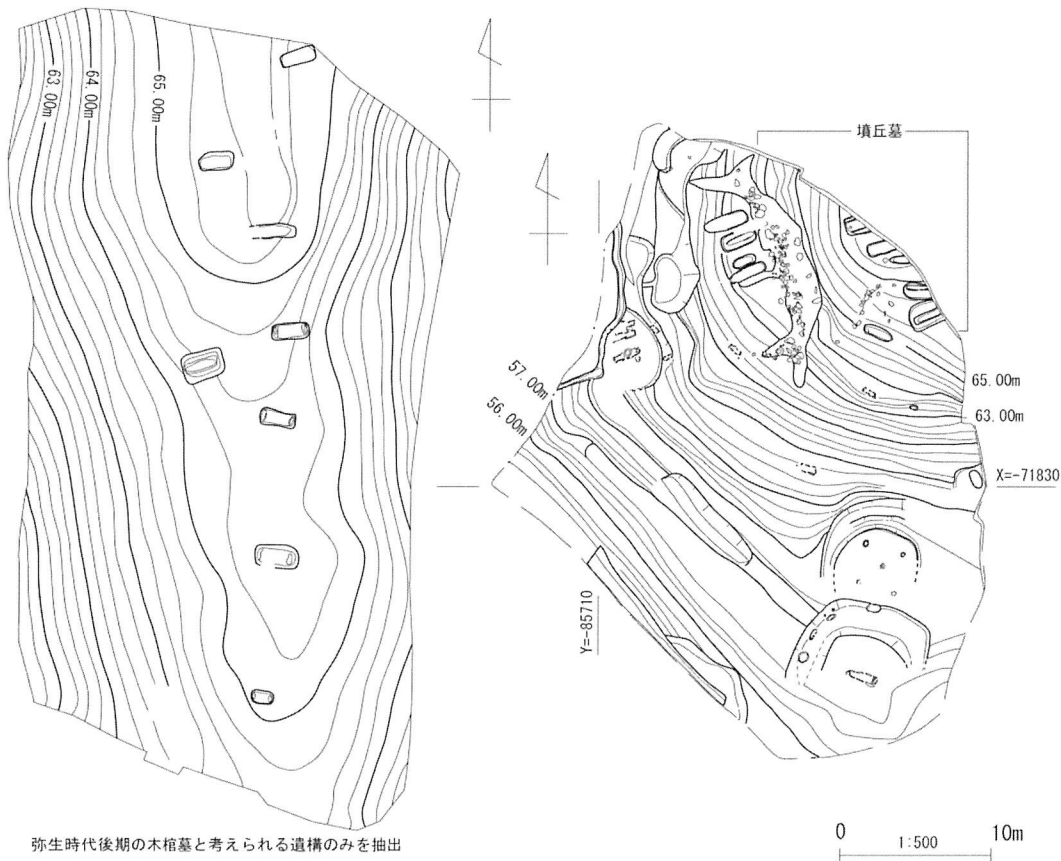


図4 田住桶川遺跡木棺墓群と朝金小チャ墳丘墓

集落が形成される。とくに越敷山遺跡群は、米子市・大山町妻木晩田遺跡（松本他 2000、岩田他 2000 等）とほぼ同様な展開を遂げる典型例である。南部町田住松尾平遺跡（42：岡田他 1995a）等周辺で調査されている同時期の集落遺跡をも含めて一体的に理解すると、径 2 km 以上に及ぶような広範囲にわたる規模となる。また、同様な規模と構造をもつ集落遺跡が 4、5 km の距離をおいて大山山麓～米子平野一円に成立する（高田 2005、2006）。

このような大規模集落の出現と併行して、集団墓の様相が変化し、選別された成人のみを葬る墳墓が出現する。そのような墳墓は、その初期には妻木晩田遺跡や尾高浅山遺跡（12：米子市教育委員会 1998）等で見られるように四隅突出型墳丘墓として出現するが、出雲地域とは異なって、伯耆～因幡にかけての地域では必ずしも四隅突出型墳丘墓に限定されず、多様な展開があったと考えうる（高田 2013a）。越敷山西麓では後期前葉～後葉段階に南部町田住桶川遺跡（43：北浦他 1997）で散在する木棺墓群が見ついている（図 4 左）。重複する近世墓等によって不明確な部分もあるが、木棺痕跡等によって弥生時代のものであることが確認できるものを中心に検討すると、小児用と考えうる墓が少なく、成人墓が卓越する様子が窺える。また、墓壙の切り合いや近接した配置が少ない点も中期以前の集団墓と異なる点であり、被葬者があらかじめ限定されていた可能性を窺わせる。

また、後期後葉～終末期前半段階には南部町朝金小チャ遺跡（48：岡田他 1995b）で墳丘墓が築造されている（図 4 右）。調査者は四隅突出型墳丘墓とするが、明確な貼石や裾石等は伴わないようであり、墳丘の半分以上が調査区外であることもあって、不明確である。いずれにせよ、重要な点は多量の供献土器の中に特殊な土器が含まれており、吉備あるいは、一部北陸も含む北近畿地方に文様や器形の系譜をたどりうると想定される点である（松井 1997）。田住桶川遺跡の木棺墓群にも吉備系の特殊壺が出土している。これらの墳墓群の被葬者らは、多様なネットワークや系譜をもった人びとであり、地域を越えた交流関係を取り結ぶ役

在しつつ小児墓の比率が 40% 前後を占める。このことは、集団墓に葬られる人びとが自然な社会集団を反映していると考えられ、特定の年齢層や階層に限定されないということの意味しているであろう。一方、後期になると、福市・青木遺跡や越敷山遺跡群にみるように、台地や丘陵上で多数の居住単位が集合して居住域が拡大し、大規模な

割や地位を担ったと考えられよう。古墳群周辺は、大山北麓域を東西に結ぶ交通路と、中国山地を越えて山陽と山陰を結ぶ南北の交通路の結節点にあたる。このような地勢的要因が当地に三角縁神獣鏡をもつような前期古墳を出現させ、その後も継続的に前方後円墳が築造される素地となったと考えられる。

なお、普段寺古墳群の築造母体となった集落遺跡として想定しうるのは、普段寺古墳群の北方に派生する低位段丘上の南部町天萬土井前遺跡(29:湯村他 1997)である。部分的な調査区のために遺跡の全体像はよくわからないが、庄内期併行と考えられる、外面にタタキをもつ甕が少数出土している。これらの起源地は、よく分からないのが実態であるが、慣例的に畿内系と考えられている。この他に吉備型甕も存在する。

2-2 古墳時代

出現期古墳の事例として重要なのは、米子市日原6号墳(8:小原 1978)である。一辺21mの規模を有する方墳で、長辺5.0m、短辺4.2mの大型で2段墓壇をもつ中心埋葬施設の他、数基の副次的埋葬施設が検出されている(図5)。中心埋葬施設の木棺墓上の供献土器の型式学的特徴から、古墳時代前期初頭の小谷1式(松山 2000)に属すると考えられる。また、副葬武器に鉄ヤリが存在し、いわゆる呑口式の柄が良く残存していた。柄縁の形状が山形をなし、糸巻が柄縁の先端まで施される点はヤリの中でも古相に位置付けられ(豊島 2008、菊地 2010)、供献土器が示す時期とも調和的である。

同様な方墳の類例は、鳥取県東部の因幡で比較的調査例が蓄積されており、鳥取市桂見1・2号墳(船井他 1984)、同面影山74号墳(船井他 1987)、同美和32号墳(山田他 1994)がある。また、中部の東伯耆では倉吉市三度舞大將塚(梅原

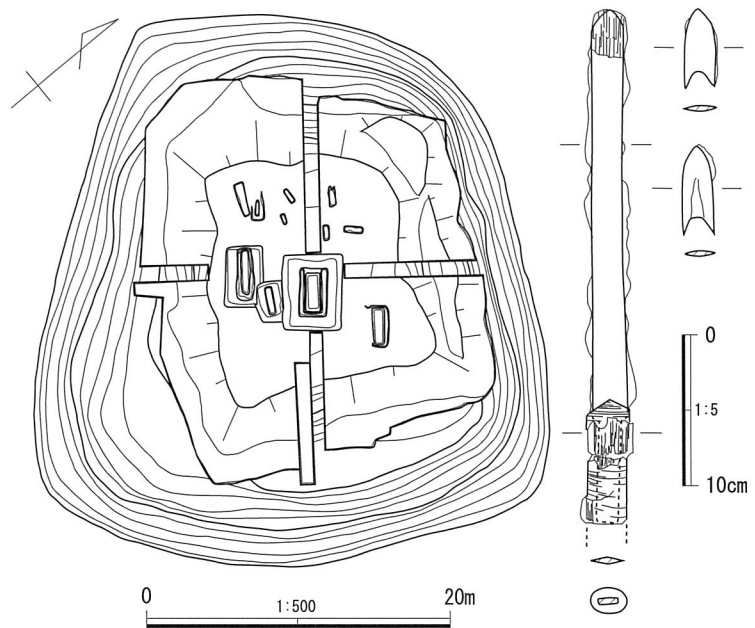


図5 日原6号墳の墳丘と出土武器

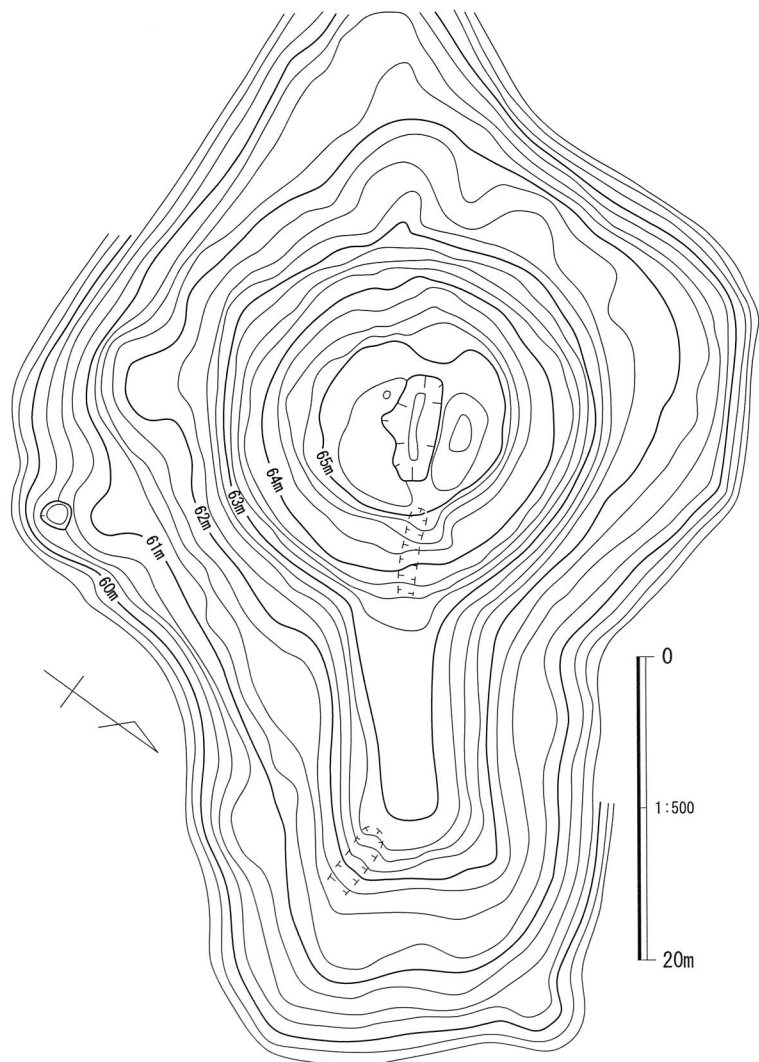


図6 浅井11号墳



図7 浅井11号墳出土画文帯神獸鏡

これらの事例は細部で異なる点はあるものの、供献土器の内容や副葬品に共通性がある点が注意される。さらに、弥生時代にはほとんどなかった小児用の土器棺墓が登場してくることも、被葬者のメンバーシップの変容という点で見逃せない変化である（池淵 2006）。前方後円墳が出現するまでの間には、土器枕の使用や同棺複数埋葬の成立、石棺墓の導入等さらに埋葬方法の変革が続くのであるが、このような方墳を起点にして古墳群が継続する場合があるから、その出現は画期と考えるにふさわしい。

他に、副葬品の知られた前期古墳としては、米子市石州府古墳群（18）中の 29 号墳や 119 号墳がある。29 号墳からは、「上方作」系浮彫式獣帯鏡や鉄剣が出土しており（長岡他 1985）、119 号墳は鉄剣・ヤリを副葬する（米子市史編さん協議会 1999）。いずれも径 10m ほどの円墳や方墳である。出土した土器や鉄器から見ると、これらを最古相の古墳に位置付けることは難しい。どの時点で円形原理の墳丘をもつ古墳が出現するのか、今後の課題であろう。

前方後円墳の例としては、南部町浅井 11 号墳（44）が前期古墳の可能性のあるものとして指摘できる。これまでに画文帯神獸鏡の存在が知られていたが、近年、測量調査が行なわれ、墳丘形態が明らかにされた（久保 2010）。それによると、全長 45m、後円部径 26.6m、前方部長 19.0m の規模をもち、後円部が 2 段築成に復元できるという。また、前方部は直線的に伸びて前端部が広がらない特徴をもつことから、前期でも古い段階に位置付けられるとの理解が示された（図 6）。

南部町内では、岡田善治氏をはじめとする地域の愛好家らの手で遺跡の顕在化のために伐木や清掃活動が進められているが、その恩恵に浴する形で、筆者らも現地観察を行ってきた。墳丘形態が古相を示すとの久保氏の見解は傾聴すべきであるが、後円部を 2 段築成とみることについては、前方部上面よりも高い位置に後円部テラス面を想定する点で疑問がある。通常の後円部 2 段、前方部 1 段の前方後円墳であれば、前方部上面と後円部のテラス面は連続してほぼ同じレベルに位置するであろう。また、墳丘規模に比してテラス面とする幅が広すぎると思われる。現地観察によれば、テラス面と理解するよりも、植林等に伴う削平面と理解する方が妥当であるように思われる。現状では葺石はなく、円筒埴輪片等も観察できないが、2012 年に

1924, 名越 1996) が、西部の西伯耆では大山町徳楽方墳（花谷他 1992）等が近い時期に築造された事例と考えられる。これらの方墳は、一見すると、弥生時代終末期の墳丘墓と截然とした区別がつけにくい。また、葺石や埴輪等の外表施設をもたない点や、弥生時代例よりも大型化するものの、中心埋葬施設に組合式箱形木棺が用いられる点等からすると、近畿地方の出現期の前方後円墳で観察されるような質的な飛躍が感じられない。そのような外見上の特徴から、これらを弥生時代墳丘墓の延長線上に位置付け、古墳とは評価しない意見もある（藤田 2006）。

しかし、弥生時代の一般的な墳丘墓を凌駕する規模をもち、中心埋葬が明確に卓越するものが多い。また、弥生時代後期～終末期にかけての墳丘墓は、県内の各地域でそれぞれ独自の墳丘形態や埋葬儀礼をもつ墳墓がみられるのに対し、こ

行なった分布調査の際に後円部南側斜面において器種不明の土器片を表採した。器表面は風化のため、調整も定かでないので、埴輪片かどうか不明である。

後円部墳頂が大規模に掘削されており、長さ約6m、幅約2m、深さ約1mの規模で墳丘主軸に併行した方向の窪みが観察できる。埋葬施設は大きく破壊されていると考えられる。埋葬施設の種類について、久保氏は盗掘坑内に石材がみられないことをもって木棺直葬ないし粘土槨を推定するが、筆者らの踏査では板状角礫が散乱することを確認している。実態解明は今後の調査に委ねるべきであろうが、盗掘坑の規模からみても堅穴式石槨であった可能性を考慮すべきであろう。

出土した遺物としては、画文帯環状乳四神四獣鏡が知られている(樋口 1979)。1912(明治45)年に掘り出されたと伝えられるもので、大きく3片に割れるが、ほぼ完形に復元することができる(図7)。銘文や文様構成については、久保氏が詳しく報告しているので、ここでは詳述しない。既に指摘されているように、後漢代に位置付けられる(岡村 2005、久保 2010)。なお、鏡背には鉄さびとともに布の痕跡が付着しており、布が伴う鉄製品が近接して存在したことを示している。

一方、西伯耆最大規模を誇る三崎殿山古墳(30)が法勝寺平野を一望に見渡せる

独立丘陵上に築かれている(図8)。後世の改変によって墳丘形態や規模は正確に読み取れない部分があるが、近年の新鳥取県史編さん事業による再測量の結果、全長約96mの前方後円墳と考えられる。後円部斜面には段築成らしい平坦面が観察されるが、明らかに墳丘外の丘陵斜面にも同様な平坦面が観察されることからすると、本来の墳丘形態を反映したものかどうか分からない。これまでの観察によっても葺石はないとされており、改めて現地踏査を行なっても確認できないから、葺石をもたない可能性が高い。また、円筒埴輪片と考えられる土器片が採集されているが、量は多くないようだ。この規模の古墳にしては、突帯やハケメが明確な埴輪片が知られていないため、墳丘を全周するような埴輪列の存在を現状では考えにくい。

集成編年5期あたりに位置付けうる中期古墳と理解されてきたが、そのように見るだけの積極的な根拠はない。東伯耆最大の前方後円墳である湯梨浜町(旧羽合町)北山古墳と同時期と見ながら形成されてきた年代観と推測される。直線的な前方部の形状や立地からみて、前期に遡るとの見方もある(東方 2008)。確かに墳丘の諸要素が類似する事例として鳥取市六部山3号墳(高田 2013b)や本高14号墳(大川他 2010)等があり、前期に遡る可能性は否定できないが、古墳の時期を検討しうるだけの正確な情報はないというのが実



図8 三崎殿山古墳

態であろう。編年上の位置を議論するよりも、まずはそのための手がかりとなる基礎的な情報整理が必要な段階である。

中期前葉～中葉における首長墳の状況はよく分からないが、中期末には東宗像古墳群で竪穴系横口式石室を埋葬施設とする円墳が築造されている（中原他 1985）。日野川左岸地域は、この後にも継続的に北部九州系の横穴式石室の分布圏になることが知られているが（角田 2009）、そのような地域間交流をベースに、続く後期初頭に位置付けうる東宗像 2 号墳（6）、高山古墳（5）といった宗像地域の前方後円墳が出現するのであろう。東宗像 2 号墳は前方部の一部を調査されたのみで埋葬施設の全容はよく分からないが、全長 37m の前方後円墳である。墳丘裾から出土した須恵器によって陶邑編年の MT15 型式期前後の築造と考えられている。また、墳丘には円筒埴輪列をめぐらせる可能性がある（中原他 1985）。高山古墳は、全長 32m の前方後円墳である。岩盤を削り貫いて整形された石室をもつとされる。盗掘を受けて副葬品の全容は失われているものの、小札の存在によって挂甲があったことが知られる他、武器類も豊富にあった可能性がある。また、獣面文をもつ金銅装の帯金具をもつことが知られている。これらの直後に位置する古墳は明らかではないが、後期後葉以降に位置付けうる宗像 1 号墳は、全長 37m の前方後円墳である。羽子板状の平面形を呈する北部九州系の横穴式石室がよく知られている。内容不明な古墳が多い中で、豊富な副葬品や須恵器、円筒埴輪等は古墳の築造時期や性格を追究するための定点となる重要な資料群を提供している（東方 2005）。

一方、後期中葉～末にかけての時期になると、会見盆地周辺では前方後円墳の築造が相次ぐようである。長者原台地西側に全長 53m の大亀塚古墳（24）が築造される他、全長 55m の後塚山古墳（25）といった前方後円墳が築造される。この時期の前方後円墳としては大型であり、地域を代表する首長墓とみてよいであろう。大亀塚古墳は、後円部の中心埋葬施設として箱形石棺が存在する。かつての乱掘によって須恵器と馬具が出土したことが知られている（米子市史編さん協議会 1999）。また、第 6 次調査とした 2009 年の分布調査の際、前方部北側において円筒埴輪片を表採した。円形の透孔をもち、高く突出する突帯がめぐる。外面に 1 次調整のタテハケを、内面にユビナデを観察できる。ただし、破片の下半には外面にナナメハケ、内面は丁寧な斜め方向のユビナデが施される。同様の特徴をもつ他例を参考にすれば、破片の下半にあるナナメハケとユビナデは底部調整後に倒立して施されたものと考えられる。古墳時代後期の埴輪とみてよい（図 9）。

後塚山古墳は、これまでに冠帽らしきものを被り、「みずら」を表現した人物埴輪頭部片の出土が知られているが、詳しい時期は不明であった。墳丘上で表採した須恵器坏身口縁部片は、小片のため口径を明確にし難いが、口縁部の立ち上がり角度や端部の仕上げからすると、TK43 型式に比定しうる。これが築造時期を示すとは限らないが、古墳時代後期後半という時間的位置付けを与えることができる。後円部中央は南北方向に凹んだ部分があり、1920 年代には深さ 3 尺の溝状の掘り込みとして観察されている（梅原 1924）。盗掘によって中心埋葬施設は破壊されている可能性もあるが、内容は不明である。横穴式石室の導入期とも考えうるので、埋葬施設の種類や築造時期の把握等、基礎的な情報収集が必要な古墳の一つであろう。

二子塚古墳（23）は 1920 年代には存在したものの、その後、昭和初期頃に未調査のまま破壊された前方後円墳である。全長は 33m ほどあったらしい。埋葬施設は横穴式石室であったらしく、鏝付鉄刀、馬具、三輪玉等が出土したというが、散逸して現在は確認できない。梅原末治の観察によれば、埴輪は存在しないというが、後塚山古墳とは異なる人物埴輪があったとの伝承もある。

また、別所 1 号墳（22：小原他 1983）は全長 27m の前方後円墳で、後円部と前方部にそれぞれ横穴式石室が構築されていた。後円部の第 1 石室は、上述の宗像 1 号墳と同じ系譜に属する平面形が羽子板形を呈するもので、玄門立柱で板石閉塞する。前方部の第 2 石室は残りが悪いのでその構造はよく分からないが、羽子板状の平面形や玄門立柱が見られない可能性がある。いずれの石室も TK209 型式段階の須恵器が出土しており、6 世紀の末葉に位置付けることができる。この地域最後の前方後円墳である可能性がある。なお、1 号石室の羨道部に人物埴輪と円筒埴輪が集積されていた。前者は、シルクハット風の帽子を被った男性頭部をもつ。後者は最下段に円柱状タタキ具によるタタキ痕をとどめるもので、出雲地域の製作技法と密接に関連

する資料である。

なお、上述してきた長者原台地の南側に位置する前方後円墳は、大亀塚古墳、後塚山古墳、二子塚古墳、別所1号墳という連続的な築造順を想定することができる。一連の首長墓系列をなしていると理解できよう。本地域は、前期古墳だけでなく、後期古墳の展開過程を追究する上でも、きわめて良好な資料を提供してくれる可能性がある。

ところで、普段寺古墳群同様に峰山から派生する支丘陵上には、延久山3号墳(23)、宮前3号墳(24)の2基の前方後円墳の存在が知られているものの、ほとんど情報が無い。2009年3月に分布調査を実施し、現地確認を行なった。それぞれ、簡易測量の結果、

全長32.5m、46.3mの規模を有する。いずれも丘陵先端の北側に前方部を向ける。このうち、延久山3号墳では東くびれ部付近より須恵器の甕片を表採した。内面には同心円状の当具痕が明瞭に残り、外面には平行叩き目がみとめられる。古墳時代後期以降に比定しうる破片と考えるが、表採遺物であるため、古墳に伴っているかどうかは明らかでない。なお、墳丘上には近世の六十六部廻国塔等が存在している。

越敷山山頂に位置する越敷山13号墳(39)は、遺跡台帳上では前方後円墳として扱われているが、全長約38m前方後方墳と考えられるものである。後方部北側で土器片ないし埴輪片と思われる遺物を表採した。小片であるため、時期はおろか器種も不明である。

また、普段寺池西側の寺内古墳群(33)中には横穴式石室をもつ円墳の8号墳が知られているが(富長他1986)、横穴墓も存在するらしい。かつてその内の1基から須恵器や耳環、玉類等の出土が知られている。ただし、現地の分布調査では横穴墓の存在は確認できない。

会見地域では、古墳時代前期以来、連綿と有力な前方後円墳が築造され続けており、このことが後世に会見郡衙である可能性が高い長者原遺跡群(9)や大寺廃寺(7)、坂中廃寺(8)といった初期仏教寺院が形成される歴史的背景をなしていると言えよう。近年、長者原遺跡群の一部が調査され、7世紀末～8世紀前半にかけての大規模な掘立柱建物群の他、多量の製鉄関連遺物が出土しており、郡衙に付随する鍛冶工房と考えられている(坂本他2009)。

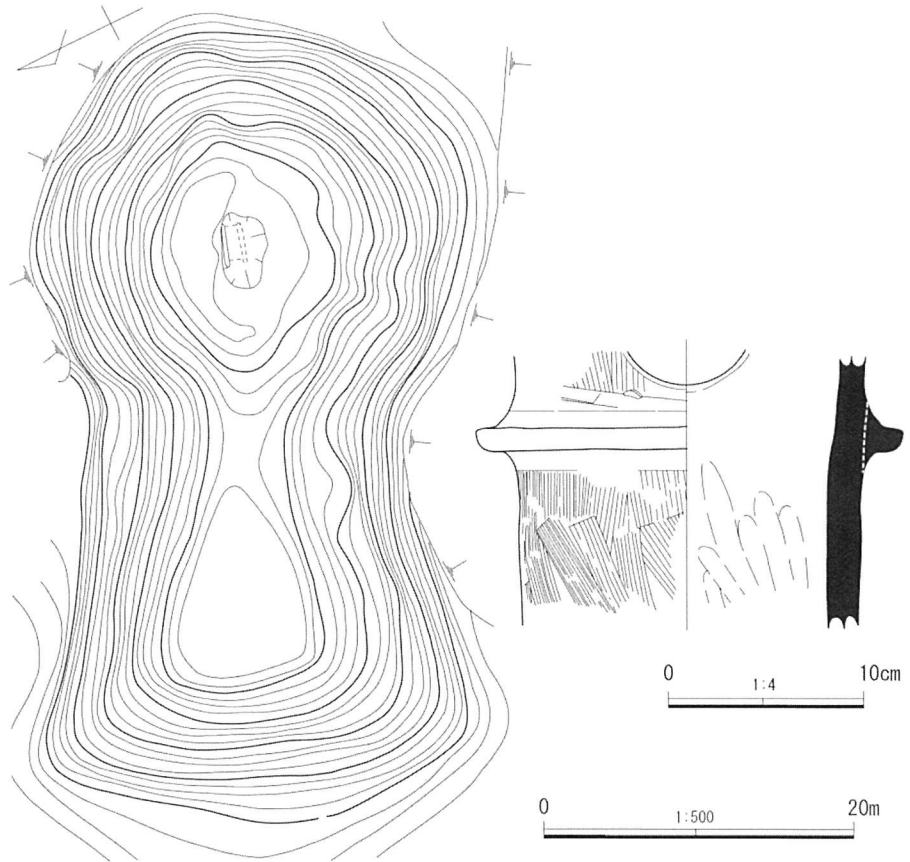


図9 大亀塚古墳の墳丘および表採円筒埴輪

3. 普段寺 1号墳の発掘調査

3-1 調査課題と調査区の設定

古墳群は、標高はおおむね 51m～52m で、尾根上平坦部の幅が約 20m と細長い丘陵上に立地している。1号墳は尾根上平坦部の先端に立地し、前方部を北西に向ける。後方部東側及び南側で等高線が直線的であり、標高 51.75m、52.00m の等高線に屈曲をなす部分が観察できる。現地地形から判断する限り、前方後方墳と考えられる。崖面となっている墳丘の西側は、墳端を知りうる状況にないが、後方部の東辺、南辺、南東コーナ一部等が把握できれば、後方部の墳丘形態や規模がより明確になるはずである。

墳頂部は西側に傾斜する斜面となっていたため、削平を受けていると予想された。三角縁神獸鏡が出土したとされる地点は、現状の墳頂平坦面の中心に近い位置と考えられたが、盗掘坑の痕跡等は現地表面から観察できなかつた。それに対して、1956年

に調査された土器棺出土位置と思われる場所は、明瞭に窪みとなって残っていた。埋葬施設の残存状況や構造、構築順等の基礎的な情報を把握する必要があると考えられた。

一方、前方部は、近世の墓地造成のために削平されており、現状で 10m ほどの長さしか残存していない。その北側一帯には墓地造成に伴うと考えられる段状地形が存在するが、その範囲内に前方部前端が埋没して存在する可能性が考えられた。古墳主軸上で段状地形を横断するようなトレンチを設定すれば、前方部前端を把握できるはずである。

2号墳は従来方墳と考えられてきたものだが、測量調査の結果、確実に方墳とすべき根拠は見られなかつた。むしろ、墳丘の保存状態が良い東側から南側にかけての部分は円墳と考えるにふさわしいあり方を示している。2号墳の墳丘形態の把握は今後の課題であるが、1号墳との関係では、墳丘の築造順を把握することが重要である。

以上のような調査課題に対して、墳丘形態、規模、構造等の解明を目的とするトレンチを墳丘各部および周辺に 14 か所設けた。また、後方部墳頂部平坦面の中心部を広く覆うようにトレンチを設けた(図 10)。原則的に設置順にトレンチ

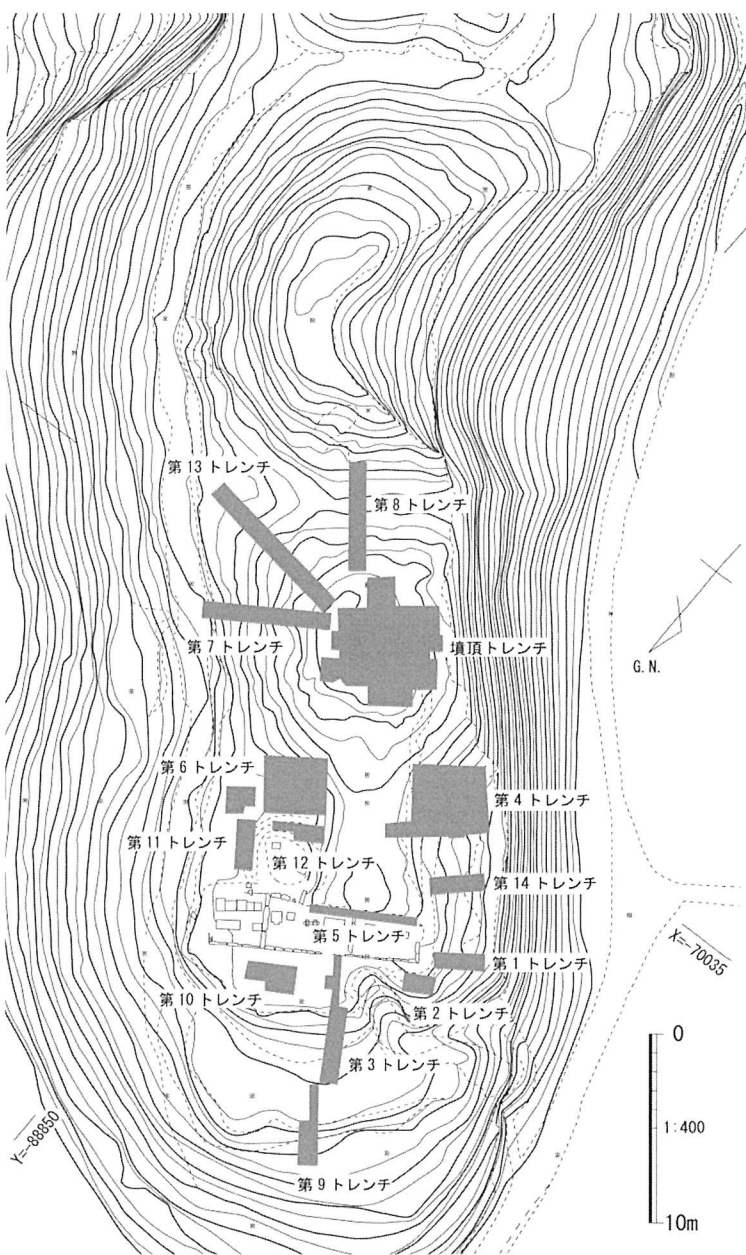


図 10 トレンチ配置図

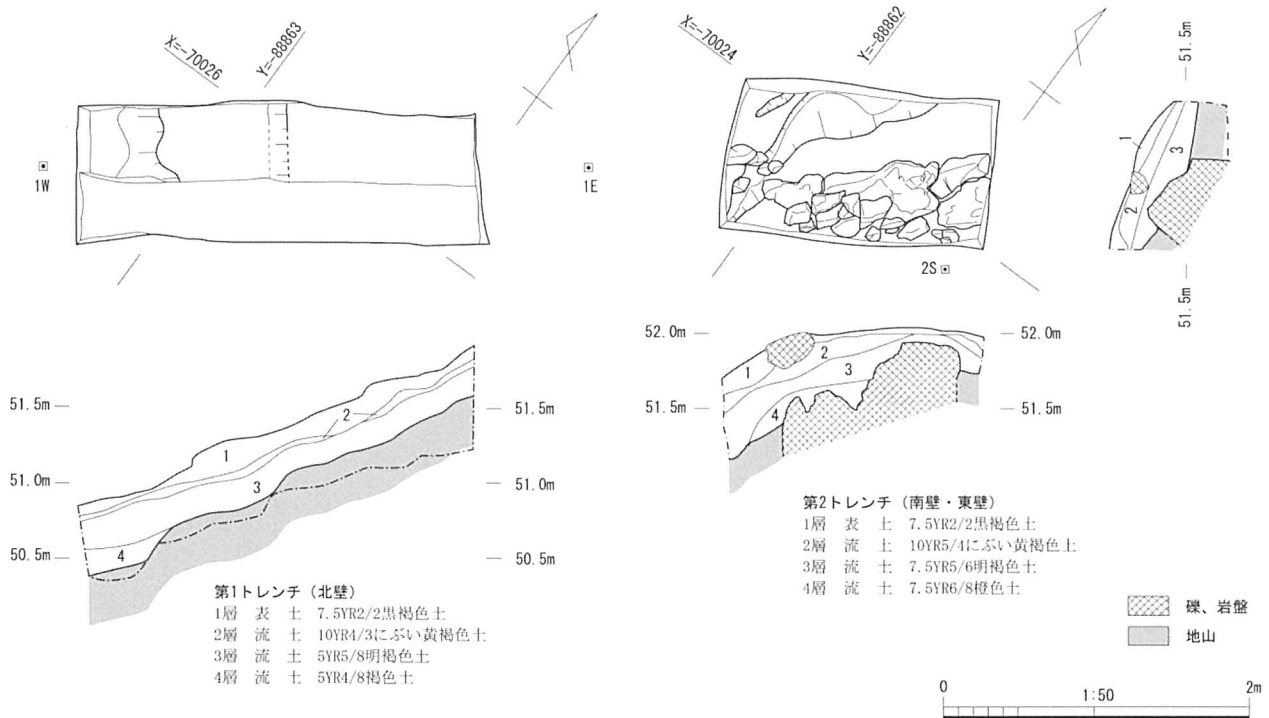


図11 第1、2トレンチ平面図・断面図

名を付しているが、墳頂部平坦面に設けたものは墳頂トレンチと名付けた。調査日程等の制約によって調査回数を変更したものや、調査課題に応じて拡張を重ねたものがあり、再調査を行なったトレンチもある。年次ごとの記述は煩瑣になるため、本書では古墳各部の調査成果として整理した形で述べる。

前方部の把握のために設けたトレンチは、第1～3、9～12、14トレンチの9か所あり、これらは、第3～5次、8次にかけて調査を行なった。また、くびれ部では第4、6トレンチの2か所を設定し、第3～7次にわたって面的に把握する調査を実施した。

後方部では、その規模と形状を把握するために第7、8トレンチ、13トレンチを設け、第3、8、9次調査で検討した。また、墳頂部の埋葬施設を把握するため、墳頂平坦面にトレンチを設け、第5、7～9次にかけて発掘調査を実施した。

3-2 前方部調査の概要

第1トレンチ

前方部西側の墳端を確認する目的で設定した、長さ3.2m、幅1.0mのトレンチである(図11左)。第3次調査で設定していたが、本格的な掘削作業は第5次調査で行なった。

表土下で検出した黄褐色土層は、角礫や土師器片が含まれ、トレンチ上部から下部にかけて一連の斜面堆積の形状を示すことから、流土と判断した。流土の下層は風化花こう岩盤(以下、この基盤岩を地山と呼ぶ)であり、盛土と認識しうる土層は存在しなかった。

標高50.8mと50.4mの部分で地山が削平され、平坦面を呈する部分がある。前方部各所で墳端と考える場所の標高は、おおむね51.5m前後の値を示すが、これと一致しない。後述するように、墳丘形態を復元した場合、平面的には標高50.8mの方の地山平坦面が墳丘裾と解釈できる余地もあるが、削平を受けて古墳本来の形状を反映したものではない可能性も十分考えられる。

第2トレンチ

前方部前端を確認する目的で設定したトレンチである。第3次調査において地山に接して人頭大の角礫が存在することを確認していた。礫の平坦な面を北側に向けて2石以上存在することから、葺石基底石の可能

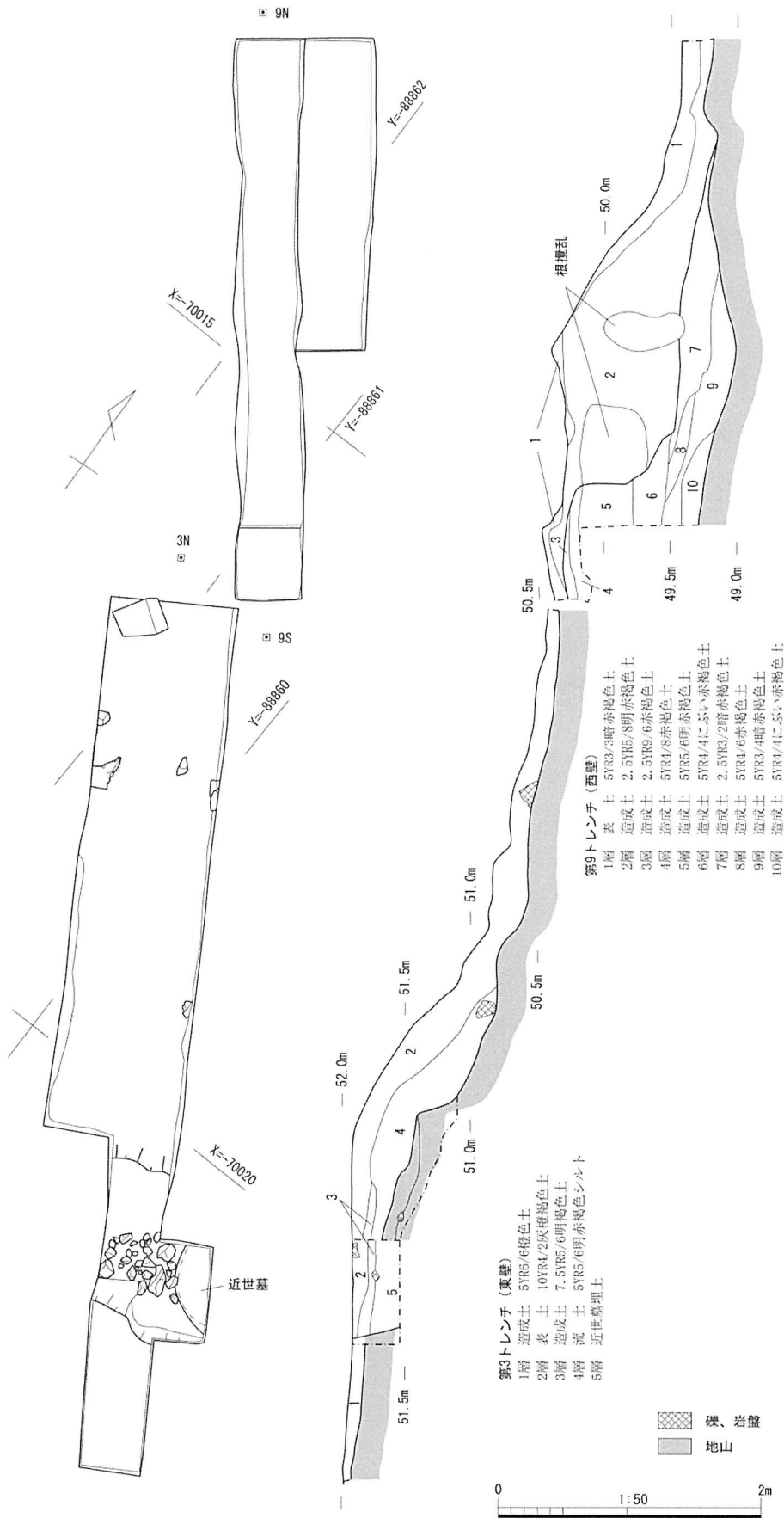


図12 第3、9トレンチ平面図・断面図

性があると考えたが、礫と接する地山面が水平ではない等、葺石としての性格を疑わせる要素もあった。そこで、調査範囲を東西に拡張し角礫の分布範囲を面的に検出した(図11右)。

その結果、角礫は全体として一つの岩盤を構成するもので、人為的に構築した葺石ではないことが明確になった。地山にはあまり風化作用を受けていない岩脈が帯状に貫入している部分があり、第3次調査ではその岩脈の北端部を検出していたことが判明した。岩脈はおおむね東西方向に延び、地山面からほぼ直立する角度で突出している。この岩脈は、南に隣接する第1トレンチで確認できなかったもので、ごく狭い範囲に存在するものと考えられる。岩盤が前方部前端として利用された可能性も考慮したが、これを削ったり、加工したりした痕跡は認められない。なお、岩脈の北側は、墓地に登るために掘削された道に面し、地山面まで削平が及んでいた。

第3トレンチ

前方部前端を確認するため、現状の墳丘の主軸に近い位置に設けたトレンチである。当初の設定範囲内では墳端を明らかにできなかったため、第4次調査において南側へ長さ2.6m、幅0.5mで拡張した(図12下)。

調査の結果、トレンチ南壁より約1.3mの地点において、加工された地山の段を検出し

た。また、この加工段の北側裾部では、地山上に拳大の角礫群が集中して存在した。これらは人為的に組み合わせられた状態ではないので、葺石とは考えられない。遺構の性格を追究するためにトレンチを東側に拡張したが、近世墓によって削平されており、東側に連続するかどうか確認できなかった。また、西側も墓地に登る道によって削平されているため、やはり遺構の延長部分について検討できなかった。この加工段は遺物も伴わず、古墳に伴うかどうかはわからないが、墓地の造成土の下層で検出していることから、墓地造成以前のものであることは確かである。

なお、加工段より北側にも地山面と考えられる固い削平面がトレンチ北端まで続く。この面では、近代のものと思われる灯明皿が出土しているほか、墓石の破片等が散乱しており、墓の構築面として造成されたものと考えられる。

第9トレンチ

前方部前端を確認する目的で第3トレンチの北側に設定した。現在墓地が営まれている平坦面の北側にも別の平坦面が存在するが、その部分まで前方部が伸びていた可能性を考慮して調査対象とした。

調査の結果、この平坦面は、地山上に高さ1m以上の盛土を行なって造成されたものであることが明らかになった(図12上)。近世墓の存在を考慮して調査範囲を限定したために、部分的な断ち割り範囲内しか確認できなかったが、地山は標高49.2m前後の位置にあって、おおむね平坦に削平されている。第3トレンチ北端部における地山面の標高は50.3mであるから、近接した距離で1m程度の落差が存在すると考えられる。その落差を埋めるように、地山上に大きく2段階にわたって造成土が盛られる。第1段階の造成土(3~10層)は水平堆積を基本とし、第3トレンチの地山面とほぼ同じ高さまで盛られる。地山を削平するとともに、その排出土を用いて平坦面幅を広げたものと考えられよう。造成土の中には、古墳時代後期以降のものと考えられる土師器片の他に、近世の土師器片も含まれていたため、近世以降の造成と考えられる。第2段階は、その後に追加された土層であるが、一気に盛ってさらに平坦面を拡張したようにみえる。灯明皿の破片等を含んでおり、より新しい時期の造成であろう。

第3トレンチで検出した地山面が近世における墓地造成によって形成されたものであり、第9トレンチで認められた造成土がそれと一体のものとする、その下層の地山削平面は、それより古いものと考えうる。地山上には旧表土と考えられる古土壌の発達も見られないため、古くさかのぼるとは言い切れないが、これが前方部の成形に関わる削平面と考える余地は残されている。ただし、後述するように、この高さに前方部前端を想定した場合、現状の墳丘規模に比べて不釣り合いなほど大きく、かつ膨大な盛土による前方部を想定することになるため、不合理である。ここでの地山削平面は古墳の構築とは関わらない時期を想定すべきだろう。普段寺池周辺では、丘陵斜面部に横穴墓の存在が知られている他、時期不明ながら竪穴式住居跡も存在するらしい。古墳時代後期以降の土師器片は、前期古墳以後の遺構が調査地周辺に存在することを示しているであろう。

第10トレンチ

前方部東側の墳端を確認する目的で設けたトレンチである。調査の結果、トレンチ内のほぼ全域で近世墓が複雑に重複して存在したため、古墳に関する手がかりはほとんど得られなかった。ただし、土層断面の観察によって、近世墓構築以前の地形を窺い知る情報が得られた(図13)。

まず、トレンチ西壁の観察からすると、トレンチ北側での地山の検出レベルは標高51.1m前後にあり、その上層には厚さ40cm程の旧表土と考えられる黒色土層(4層)が形成されていることが判明した。トレンチ内で確認できた最古段階の近世墓は、その黒色土層上に整地を施した面から掘り込まれている。このことからすると、黒色土上面が近世墓造成以前にあったかつての旧地表であった可能性が高い。これに対して、トレンチの南側では、標高51.7mで地山を検出しており、旧表土とみられる土層は削平されて確認できない。したがって、このトレンチのわずか1mほどの範囲内で、南北方向に60cm以上の段差が存在していたことが判明する。

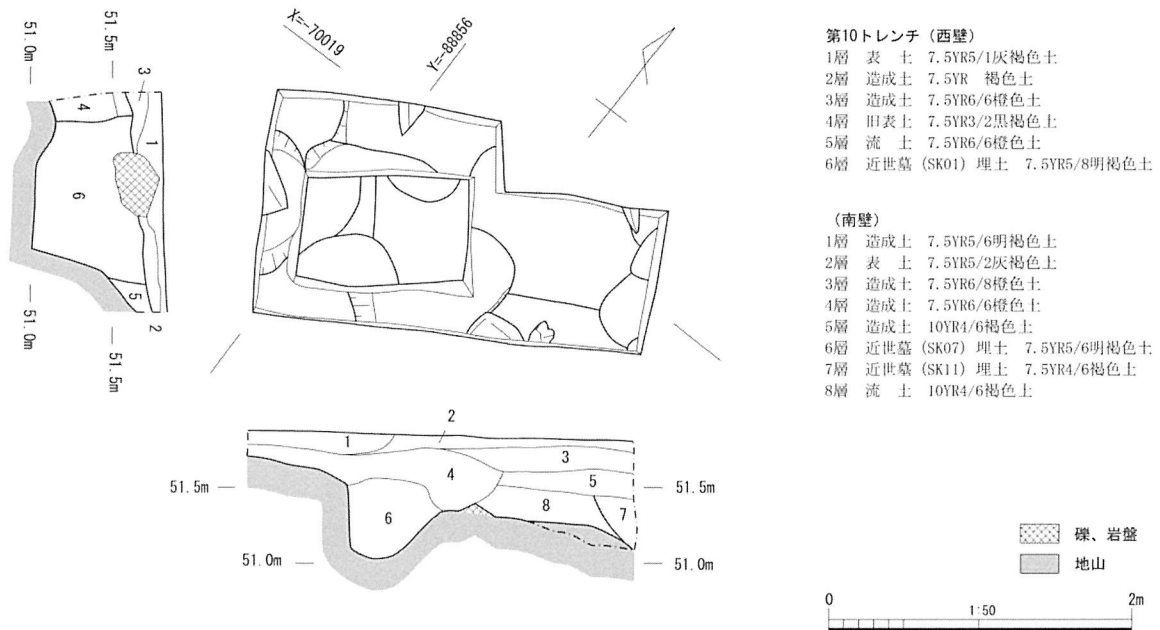


図13 第10トレンチ平面図・断面図

また、トレンチ南壁の観察結果でも、近世墓構築以前に東西の地山のレベル差が 40cm 以上あったことが窺われる。トレンチの設定場所は、現状の前方部の東側墳端部を延長した部分であるから、東西のレベル差は前方部東側斜面の高低差を反映していると思われる。

このように整理すると、東西、南北両方向ともに、第 10 トレンチの範囲内で顕著な地山の高低差が存在することになる。このような地形は、この部分が前方部東側コーナーに近い場所であったと考えると理解しやすい。そうすると、南北の段差が存在した部分は、前方部前端であった可能性を考えうる。段差や旧表土の形成時期が特定できないため、不確定と言わざるを得ないが、この段差の位置は、第 3 トレンチ拡張部で検出した加工段、第 2 トレンチ岩脈の北端部とおおむね直線的に結ぶことができる点に注目したい。前方部墳端に関する情報がほとんどないため、これを一つの可能性と考えておきたい。

第 12 トレンチ

前方部の東側墳端を明らかにする目的で、墳丘主軸に直交して長さ 2.7m、幅 1.0m のトレンチを設けた (図 14 左)。また、トレンチ南側に幅 20cm のサブトレンチを設定し、断ち割って墳丘の確認を行なった。表土下には黄褐色土層が堆積し、さらにその直下で地山を確認した。黄褐色土は 3 層に分かれるが、いずれも斜面堆積の特徴を示すため流土と判断する。

ところで、地山の固い岩盤部分は、落差が 50cm 程度の階段状を呈する。その上層の土層 (5～7 層) は、流土とよく似た土質を示すが、土層の形状が流土とは異なっている。第 5 次調査の時点ではこれを盛土と考えたが、後方部等で観察できる確実な盛土と比較すると、地山ブロックを含む等の不均質な構造がみられない。また、これに連続する第 6 トレンチ北側の状況を見ると、同様に地山が階段状に削平されており、その直上に流土が堆積する。したがって、5～7 層も流土に認識を改める方が妥当と思われる。墳端も削平されていると考えられるが、地山の傾斜が変化する 51.4m 付近がその候補となろう。

なお、トレンチ東端で地山に掘り込まれた遺構を検出した。これは、第 6 トレンチの北東部で検出された方形土坑の一部と考えられる。同様の掘り込みは、後述する第 11 トレンチ、第 6 トレンチ拡張部でもほぼ同じ標高で検出しており、同一の遺構の一部と考える。

第 14 トレンチ

前方部西側墳丘裾を特定し、墳丘の平面形態を把握する材料を得るため、設定したトレンチである。規模は幅約 1.0m、長さ約 3.0m である (図 14 右)。

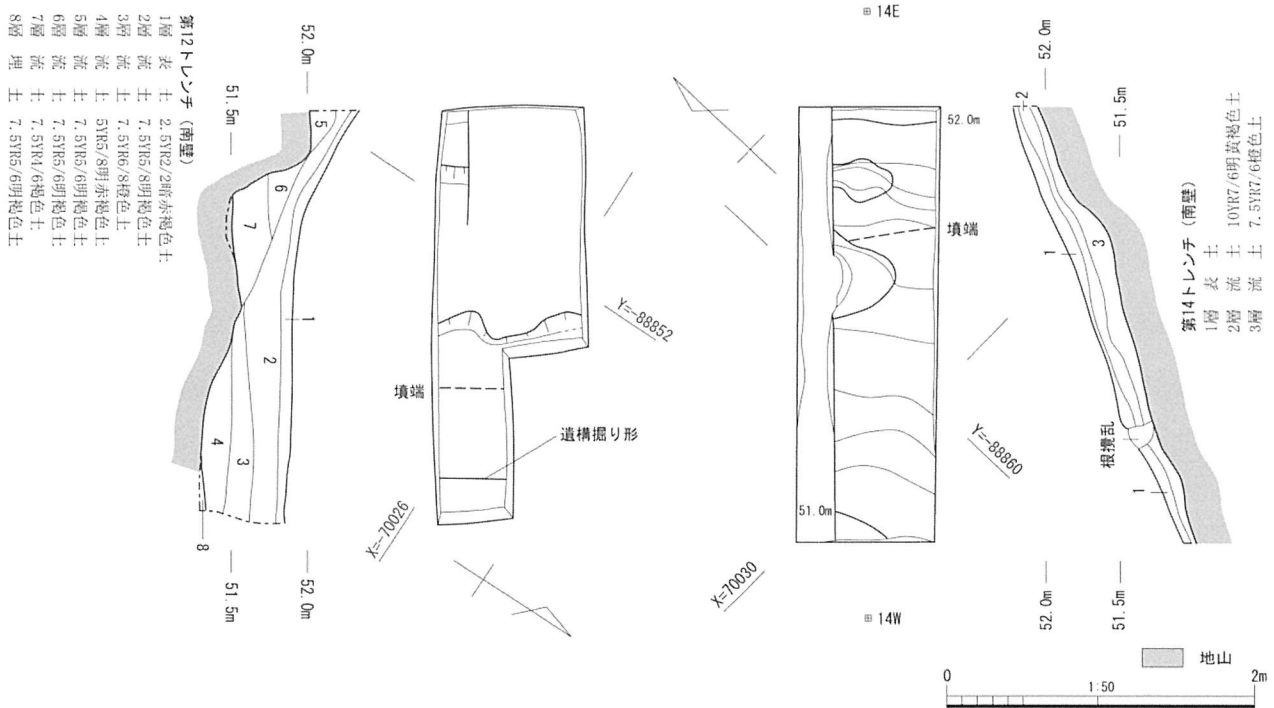


図14 第12、14トレンチ平面図・断面図

表土直下に流土が大別2層存在するが、いずれも斜面に沿ってトレンチ全体に堆積する。層中からは古墳に伴うと考える土器片も出土している。流土直下で風化の進んだ地山を確認した。しまりが弱く1～5mmの花こう岩粒を均質かつ多量に含む砂質土層であるが、一部で脈状の花こう岩盤と連続しており、地山の一部であると判断できる。盛土と思われるような堆積は確認できなかった。

トレンチ北半部は攪乱によって依存状態が良くないが、トレンチ南半部で、墳丘前方部斜面から裾の一部にかけての状況を把握することができた。平面および南壁において、トレンチ上方より約0.8m、標高約51.6mで地山の傾斜変換を確認できる。地山はトレンチ上方では斜面をなし、傾斜変換を境にトレンチ下方へと平坦になる。墳丘裾は地山の削り出しによって整形していると考えられるから、この傾斜変換点が墳丘裾と考えられる。

3-3 くびれ部調査の概要

第6トレンチ

東側くびれ部を確認するため、東西3.3m×南北3.0mの規模で設けたトレンチである。第7次調査で全面を掘り下げてくびれ部の検出を目指した(図15)。

墳丘裾平坦面から、多数の土器片や角礫が出土した。これらを含む土層は斜面堆積の特徴を示すので、墳丘流土と考えられる。角礫は、後述する岩脈の一部が剥落したものであろう。出土した土器には、類例のない器形や特殊な文様をもつ加飾土器が多く含まれる。とくに後者の中には、墳頂部土器棺の大型広口壺とセットで用いられていたという楕円形の合子形土器に接合する破片も出土している。したがって、本来は墳頂部にあったり、置かれたりしたものが転落したと考える。流土の直下は地山であり、調査範囲内では盛土と判断できる土層は見られなかった。地山を削り出して墳丘を整形していたと考えられる。

検出した地山面には、凹凸や溝状の掘り込みが認められる。トレンチの北側には、近世墓が存在していることから、これらの凹凸や掘り込みは後世に攪乱を受けた影響と考えられる。なお、トレンチ中央部と北東部でピットを検出した。中央部のピットは径約25cm、深さ約35cmで、底部中央がやや深くなる形態をなす。一方、北東部のピットは径40cm、深さ約20cm、底面は北側に傾斜し、平らではない。いずれも埋土に柱の

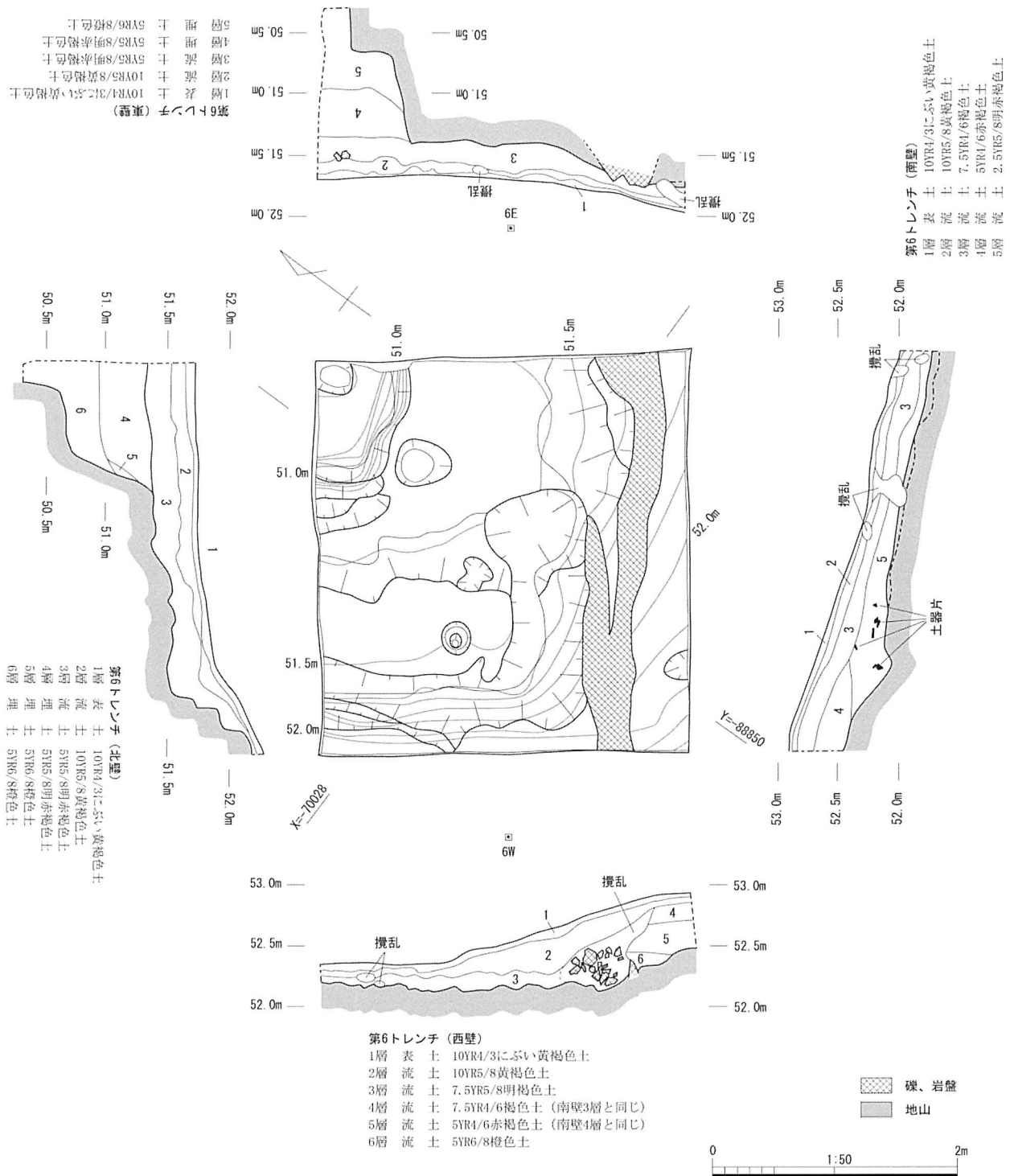


図15 第6トレンチ平面図・断面図

痕跡はない。出土遺物はなく、古墳との関係も不明である。

トレンチの南寄りの部分で、東西方向に 30~50cm 程度の幅で帯状に伸びる角礫群が検出された。後方部 墳裾部付近で検出されたため、当初は葺石の可能性もあるものとみていたが、地山層と一体化していること、礫の部分から粘土化した部分まで、帯状に風化の程度が異なるようすがみられることから、第2トレンチをはじめとして墳丘の各所で観察できる岩脈と判断した。一部は礫が剥落しやすくなっており、流土内に含まれるものは、この岩脈から転落したものであろう。

攪乱や岩脈等のため、墳端を正確に把握することは難しいが、トレンチ東壁の所見から、後方部側は標高

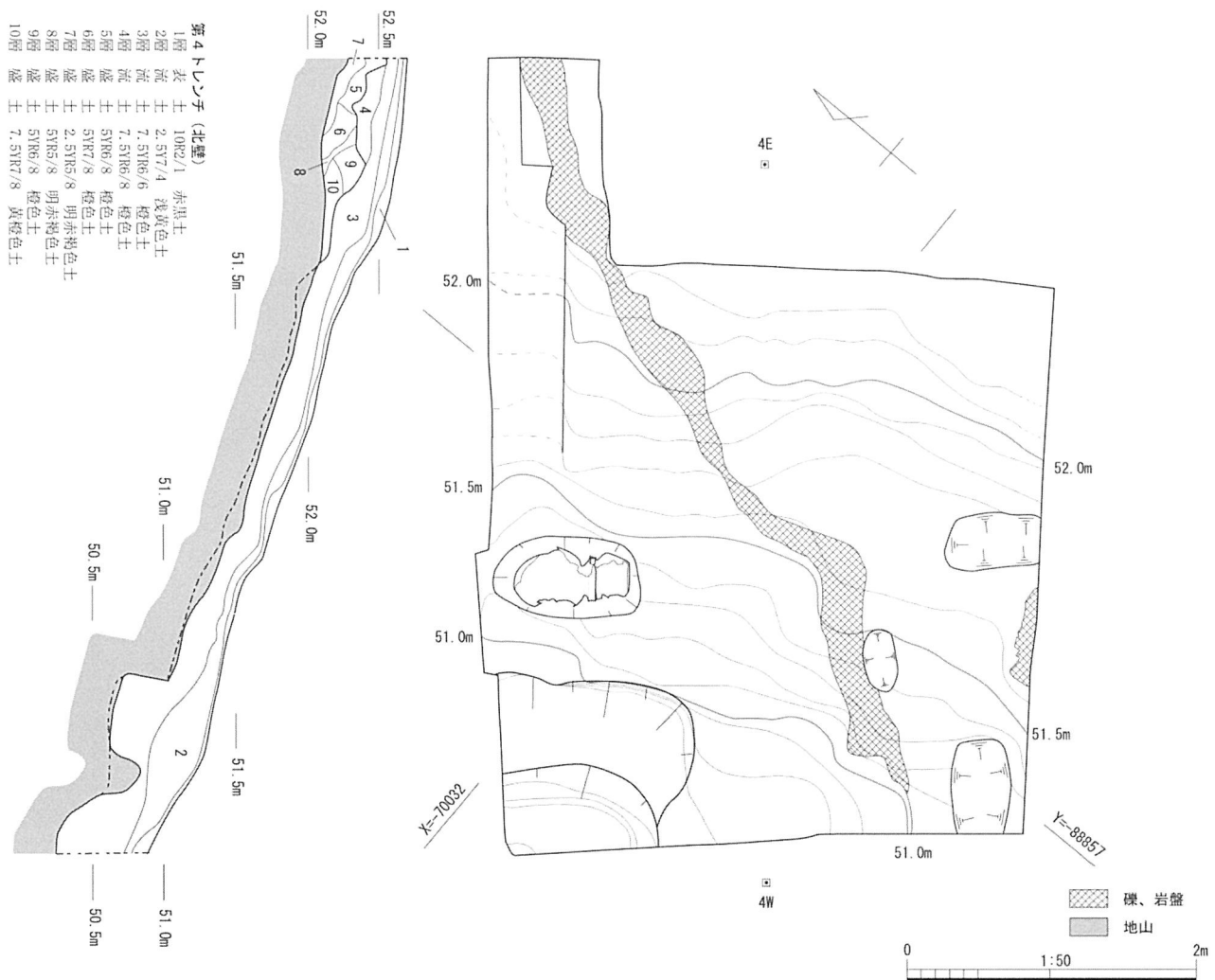


図16 第4トレンチ平面図・断面図

51.4m 付近で地山斜面が水平に変化する傾斜変換点を認めうる。一方、トレンチ北壁の観察によると、前方部側は、地山が階段状に加工されて本来の墳丘斜面を反映していると考えにくい。同様な地山の段は、第12トレンチでも観察できたが、これは、墓地造成に伴って前方部斜面が西側に大きく削り込まれたものと考えられよう。したがって、前方部側墳端は、後方部墳端と同様に標高 51.4m 付近の傾斜変換点に求めておくことが妥当と思われる。すると、溝状の掘り込みによって削平を受けているものの、トレンチ南壁から 1.1m、西壁から 1.2m の付近にくびれ部があったと考えられる。

なお、このトレンチの北東部では、上面で東西 1.4m×南北 0.8m の規模となる方形の掘り込みを確認している。第6トレンチ拡張部、第11、12トレンチでこれと同一と考えられる遺構を検出しており、その南西隅部と考えられる。観察できる範囲内で埋土は水平堆積しており、均質で流土と大きく異なる。

第4トレンチ

前方部の西側墳端を確認するために設定した。長さ 4.7m×幅 1.0m のトレンチを設け、第4次調査でその範囲の掘り下げを行なったところ、トレンチ中央からやや西側で土器棺墓を1基検出した。この土器棺墓の墳丘に対する位置関係を追究するため、第5次調査では、土器棺墓の南側を 3.0×2.5m の範囲で拡張した。しかし、この調査によってくびれ部の位置がより東に存在すると考えられたため、第7次調査でさらに東側に 1.5m 拡張した部分も調査対象として全体を掘り下げた (図16)。

第4トレンチにおいても、北東から南西にかけて、約 30cm の幅で長く伸びる角礫群が検出された。その性格は、第2、第6トレンチと同様に地山に存在する岩脈である。トレンチを二分するように伸びる岩脈の

北側では、風化が進んだ軟質の地山が存在するが、南側では、突出する岩盤が存在して岩質の違いを見せる。

調査の結果、トレンチの南側では、不整形な掘り込みや根による攪乱が多数存在し、後方部と考える部分は確認できなかった。後方部～くびれ部の墳丘裾部の大部分は、すでに削平されている可能性が高いと考えられた。一方、前方部側も明確とは言えないものの、標高 51.5m 付近において地山の傾斜が緩く変化する場所があり、その点を墳丘裾部と解釈しうる。また、前方部墳頂付近では風化花こう岩がブロック状に混じる土層（北壁第 5～10 層）が認められたが、これは地山を掘削して二次的に移動した土層とみなせる。それらが自然堆積とは考えにくい傾斜や単位で堆積しているものを盛土と考えると、前方部の一部には盛土が行なわれていたと考えられた。ただし、それは、地山削り出しによって整形した墳丘を補う程度であった可能性があり、観察できる範囲は部分的である。また、前方部では第 4 トレンチ以外に認められなかった。

くびれ部の位置を正確に示すことはできないが、推測する手がかりはわずかながらある。調査区中央部の標高 51.6m 付近において、南北約 3.0m、東西約 0.6m の範囲で地山が平坦な面をなす場所がある。これは、第 6 トレンチで推測するくびれ部の高さとも近い。また、平坦部は岩脈を越えて北に伸びるが、上述の盛土と認められる土層が観察されるのは、その平坦部までである。これらのことを勘案すると、この平坦面がくびれ部墳端の名残である可能性が高い。

なお、トレンチ中央の平坦部付近から多数の土器片が集中して出土した。これらの土器片に原位置をとどめるものはなく、いずれも流土中に含まれていた。大型広口壺の口縁部から肩部にかけての破片は、傾斜が緩くなった部分に集中して存在した。この大型広口壺は、墳頂部の土器棺墓に使用されたものと酷似する。暫定的な遺物整理段階での所見として、概報段階では別個体と報告したが、その後の検討の結果、確実に別個体とは言えなくなった。後述するように判断は留保付きであるものの、墳頂部土器棺と同一個体の破片とすれば、墳頂部の削平に伴って西側くびれ部に移動し、埋没したものと考えられる。また、出土した土器には本来供献土器であったと考えられる複合口縁の広口壺や甕、鼓形器台と考えられる破片がある。

西側くびれ部の土器棺墓

第 4 トレンチ北壁付近の墳丘外に相当する位置において、土器棺墓を 1 基検出した。その墳丘に対する位置関係は、現状における西側の墳端からさらに約 1.0m 西に離れた地点である。検出した土器棺墓は、その上部を失っており、後世に削平を受けたものと考えられる。

墓壇の平面プランは、流土を取り除き、地山面を平面的に検出した段階で確認した。墓壇の平面形は南半分が隅丸長方形であり、北半分が楕円形といういびつな形を呈する。規模は、長軸方向となる南北 1.2m、短軸方向の東西 0.6m である。深さは削平により正確な数値はわからないが、少なくとも 50cm 以上はあったと考える。断面形態は、縦断の底面は平坦だが、中央付近を不整形に掘り込む。横断の底面は平坦である。墓壇壁は垂直に近く立ち上がる。断ち割りの結果、棺底は墓壇底から浮いた位置にあり、その間には橙色シルト層が堆積する。これは、墓壇を掘削したのち、棺を設置するまでに堆積した層であり、置土と考える。なお、棺側にも棺を固定するためのおさえ土を入れた可能性も考慮したが、調査では認識できていない。ただし、埋葬施設の上部は削平されているために、棺のおさえ土を確認できなかった可能性もある。

墓壇内において、2 点の土器の口縁部を向かい合わせとした棺を検出した。直立する複合口縁をもつ広口壺と、平底をもつ複合口縁の甕を組み合わせて、横位で埋置する。なお、この土器棺そのものの上側半分程度も、削平により失われている。棺の主軸は南北に近く、古墳の主軸と平行する。長さ 80cm、最大幅 36cm、口縁部付近の幅 25cm である。副葬品等の遺物は出土しなかった。

第 6 トレンチ拡張区、第 11 トレンチ

第 6 トレンチの北東隅で検出した掘り込みについて、その性格を追究するため、第 6 トレンチの東側に第 6 トレンチ拡張部（第 4 次調査）を、その北側に第 11 トレンチ（第 5 次調査）を設定した（図 17）。

表土を除去した後、両トレンチで水平に堆積する流土 2 層とその下の地山を確認した。第 6 トレンチ拡張部では、北西隅の地山上で掘り込みを検出した。掘り込みの大きさは、トレンチ壁に接した部分で東西 32cm

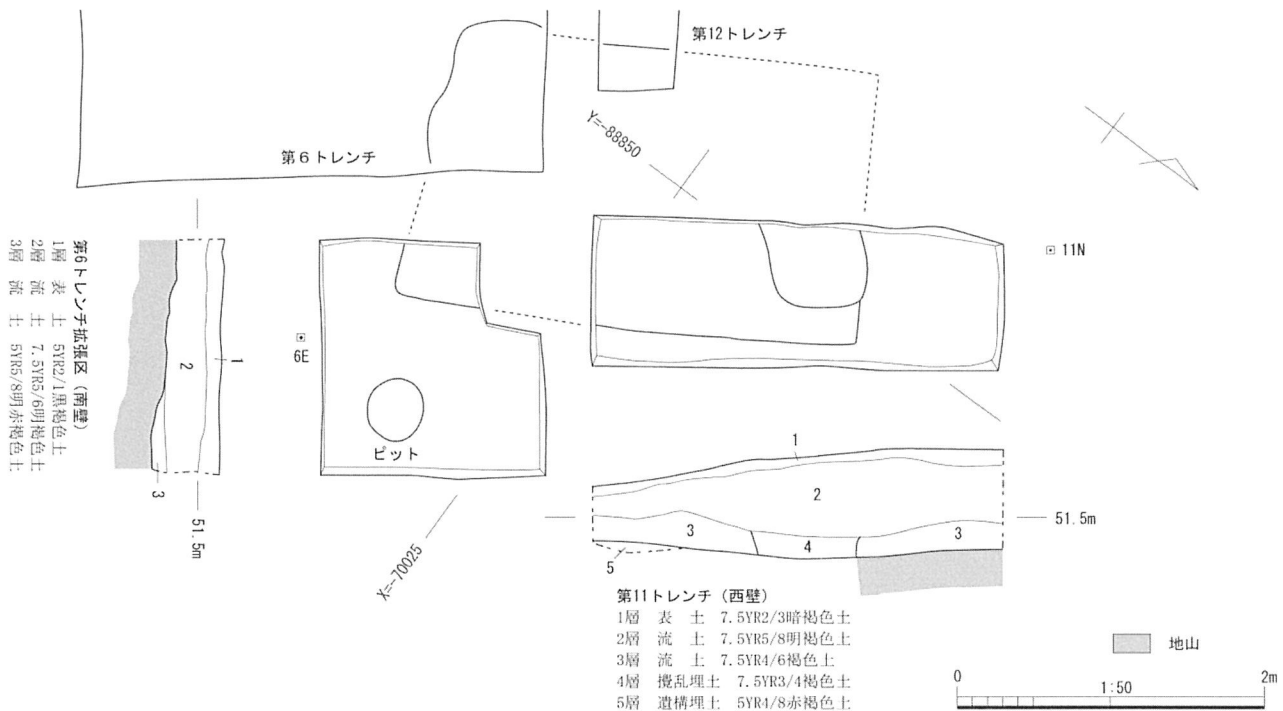


図17 第6トレンチ拡張区・第11トレンチ平面図・断面図

×南北 48cm になる。この掘り込みは、第6トレンチで検出した掘り込みの延長上に位置する。また、南壁から 50cm、東壁から 40cm の地点に径 40cm ほどのピットを確認した。

一方、第11トレンチでは、第6トレンチ拡張部で検出した掘り込みが北側に続くことを確認した。その北辺は、上層の流土から掘り込まれる別の遺構で切られているが、北東隅が残存することによって、その規模と形態を明らかにすることができる。すなわち、全体の大きさが南北 3.0m×東西 2.0m の方形土坑となる。南西隅部では二段掘りになることから、墓壇である可能性も考えうるが、その埋土は上層の流土と大きく異ならない。現時点では、その性格は不明と言わざるを得ない。

また、第6トレンチ拡張部で検出したピットも未調査であるが、ピットの埋土は方形土坑の埋土と同じである。したがって、ピットと方形土坑が関連する可能性を考慮できる。

3-4 後方部調査の概要

第7トレンチ

後方部の東側墳丘裾および規模を特定するために設定したトレンチである。トレンチの規模は幅約 1.0m、長さ約 6.8m である。第3次調査において設定して調査していたが、その後墳丘各部の調査が進むにつれて地山の理解に変更が生じたため、第9次調査で再度調査を行なった(図18)。

トレンチ内の基本層序は最上層から順に表土(1層)が全面に、流土(6~8層)が薄く広範囲に堆積する。墳丘上部には盛土(9~16層)があり、最下層が地山(17層)となる。地山はトレンチ内において一様ではなく、場所により風化の度合いに差がある。すなわち、土色と土質の違いから、五つの様相に大別できる。様相を異にするものの、6mm以下の白色花こう岩を均質かつ多量に含む土層であり、岩盤から脈状にのびる風化した部分が認められる点において共通する。第3次調査においてはこのような地山の層相の変化を盛土の単位と誤認しており、墳丘の構築方法や範囲が整合的に理解できていなかった。標高 53m 付近以下の部分を地山の削り出しとして理解することにより、墳丘各部の様相を統一的に理解できる。

墳丘は、地山と地山面の上に施された盛土からなる。地山はトレンチ上方ではほぼ水平であり、トレンチ西端から約 2.5m の地点より 25 度程度の傾斜をもちながら下る。下方の地山の傾斜変換は、平面的にはあま

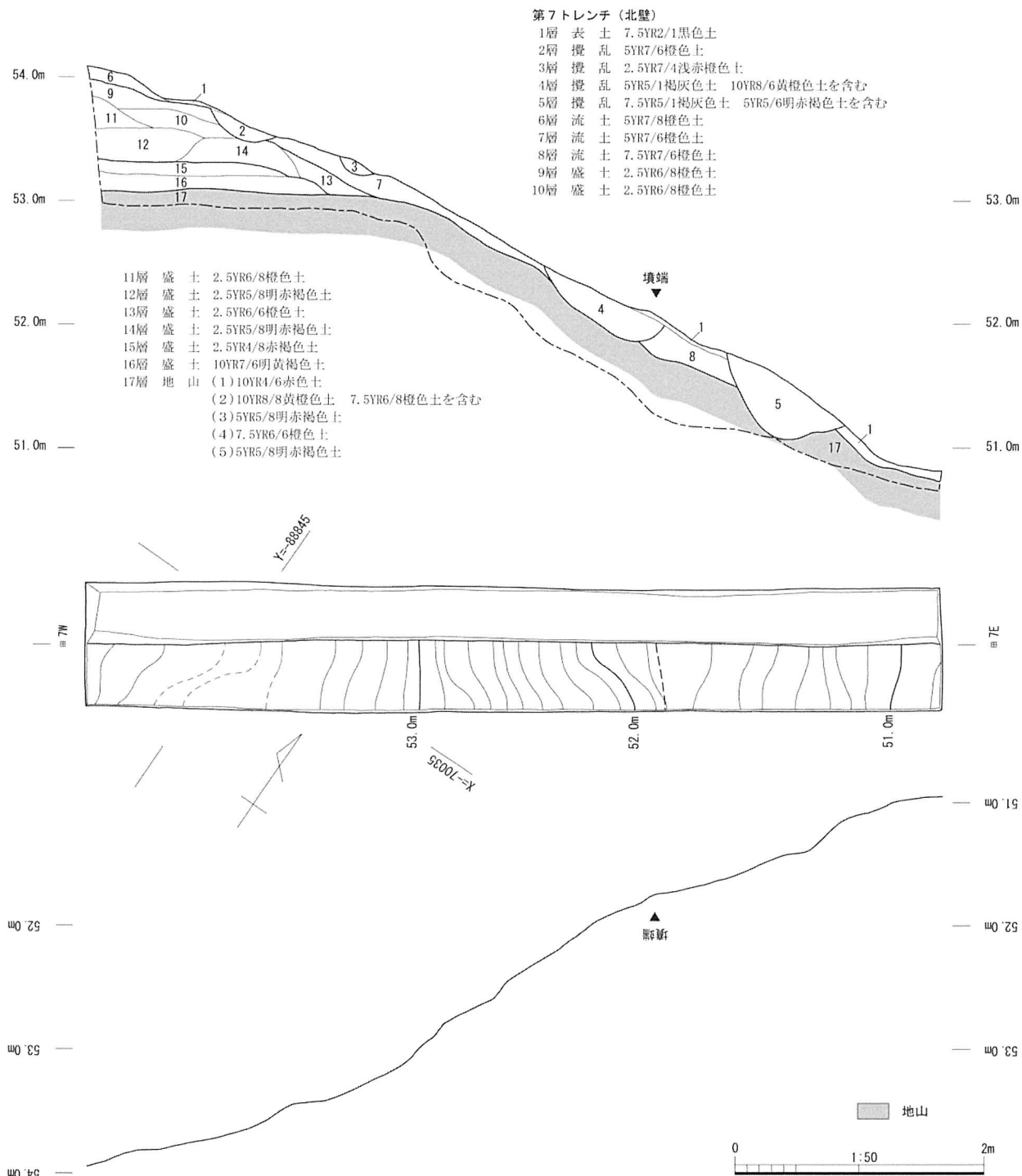


図18 第7トレンチ平面図・断面図

りはっきりしないが、南北壁面では明瞭に確認できる。その位置は、北壁においてはトレンチ東端から約 2.3m、標高約 51.7m 付近、南壁では東端から約 2.2m の地点となる標高約 51.8m 付近にある。傾斜変換より下方は、約 15度の斜面を形成しながらトレンチ外へと及ぶ。トレンチ内において、他に溝等は確認できない。

斜面の地山の上には流土が堆積する。確認できた範囲においては、旧表土と呼べる土層が存在しないことから、地山削り出しによる整形が広範囲に及んだ可能性を想定する。葦石等の外表施設が確認できないことから、トレンチ下方に位置する地山の傾斜変換を墳丘裾に相当するものとみてよいであろう。

また、トレンチ上方の地山平坦面上においても、旧表土と考える土層は確認されず、地山を水平に近く

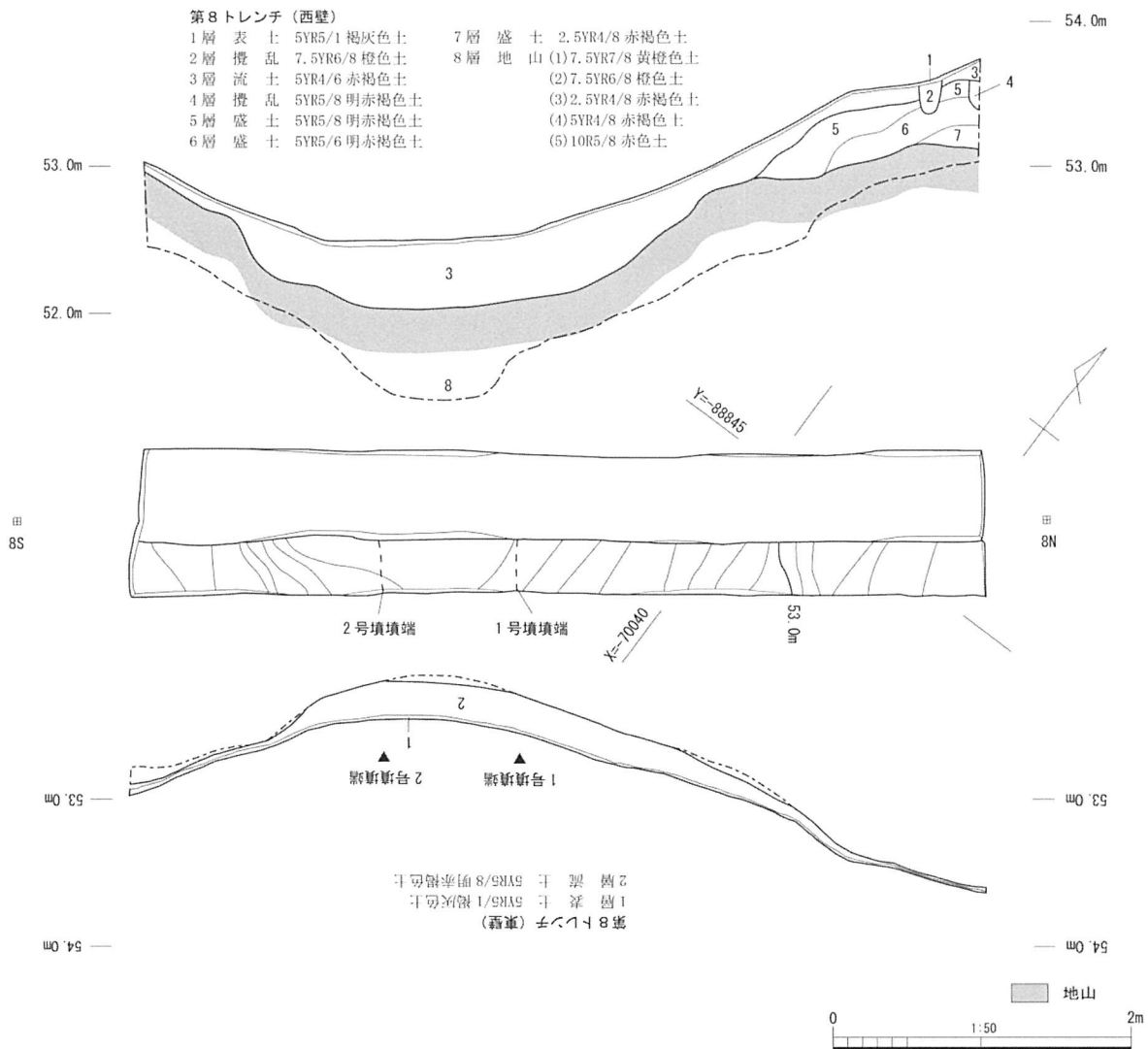


図19 第8トレンチ平面図・断面図

削り出したのちに直接盛土が施される。その盛土は、標高 53.3m 付近で土質と堆積の形状から上下に大別しうる。下層盛土（15・16層）は、5mm 以下の白色花こう岩を含むシルト質の土と細砂質の土からなる。地山に由来する赤色系や白色系の花こう岩粒を含む。水平方向に 1.5m 程度、厚さ約 10cm と薄く広範囲に堆積する。一方、上層盛土（9～14層）は、5mm 以下の白色花こう岩を含む細砂質の土で構成される。水平方向に約 0.5～1.0m、厚さ約 15～25cm と、上層盛土とは異なってやや厚みの大きい単位をなす。このような盛土の様相の違いは、墳頂トレンチや第 13 トレンチでもほぼ同じ標高で確認できる。盛土の過程に二つの段階があると想定され、墳丘築造過程における大きな作業単位を反映している可能性がある。

第8トレンチ

第8トレンチは、1号墳後方部の南側墳丘裾を確認し、後方部の規模を明らかにすること、1号墳の南側に隣接する2号墳の墳丘裾を明らかにすること、1号墳と2号墳の前後関係を明らかにすることの三つの課題解決を目的に設定したトレンチである。トレンチ規模は幅約 1m、長さ約 6m である。第7トレンチと同様に、第3次調査の際に設定していたが、改めて再調査を行なった（図19）。

トレンチ内の基本層序は、上から順に表土（1層）、流土（3層）が広範囲に堆積し、その下層に盛土（5～7層）が、最下層に地山（8層）がある。地山は、後方部に設定した他のトレンチでもそうであるように、トレンチ内の場所によって風化の度合いに差がある。トレンチ北端より 1.2m 付近までは黄褐色を呈し、やや

粗粒の砂礫からなるが、それより南側では赤褐色を呈してシルト質の部分もある。また、トレンチ中央付近では多量のマンガンが脈状に集中する部分も見られる。これらの差異は、漸移的に変化している部分もあり、分層しがたい。全体として古墳築造のベースとなった地山と判断した。

トレンチ内では旧表土と判断できる土層が存在しないため、地山削り出しによる整形が広範囲に及んだと考えられる。葺石や溝等の墳丘を画する施設は認められない。第3次調査において、後方部南側の区画溝と認識したものは、地山の部分的な層相の変化を誤認したものと考えられた。したがって、平面及び東壁で確認した地山の傾斜変換点の位置が墳丘裾に相当すると考える。その位置は、1号墳はトレンチ南端から約2.6m、標高約52.2m付近にあり、2号墳はトレンチ南端から約1.6m、標高は同じく52.2m付近にある。

また、トレンチの1号墳側上方の地山面では、旧表土を間に介さずに、直接盛土が施されている。したがって、第7トレンチにおける所見と同様、後方部南辺においても、墳丘裾部は地山削り出しによって、標高53m付近以上は地山を水平に削り出したのち、盛土を施すという墳丘構築手順が確認された。また、2号墳は、少なくとも墳丘裾においては、地山削り出しによって築造されていることが改めて確認された。

第8トレンチにおいては、第7トレンチや墳頂トレンチのように明瞭な水平堆積は認められなかったが、西壁7層は、色調や土質、標高から判断して、第7トレンチにおける北壁15層、墳頂トレンチにおける下層盛土に部分的に対応する土層と考えられる。また、5・6層は第7トレンチにおける北壁9～14層や墳頂トレンチの上層盛土に対応する、やや厚みのある盛土と考えられよう。検出範囲は部分的ながら、同一の墳丘構造を示していると考えられる。ただし、第7トレンチでは水平に整形された地山面の縁辺近くまで水平堆積が及ぶのに対して、第8トレンチではより内側に存在する点が異なる。このことは、墳頂部の下層盛土を施す段階において、削出された地山平坦面をすべて覆うのではなく、少なくとも南辺においては、やや幅広く盛り残す部分があったと推測できる。墳丘構築過程を検討する際に注意すべき点であろう。

1号墳と2号墳の新旧関係については、明らかにできなかった。両墳を覆う流土は一連の層であり、堆積時期を異にするような層界面も認めることはできないという結論に至った。1号墳と2号墳の墳丘裾は他の土層を介さない同一の地山面であることからすると、近い時期に築造された可能性が考えられる。

なお、地山は1号墳側から斜面を形成しながら下り、再びほぼ水平な面を形成した後、2号墳側へと上る。後述する第13トレンチでは、トレンチ南東端部において岩盤が深く落ち込むことを確認しているが、これらの状況は古墳築造以前に、両墳間に谷状地形があり、東側にその開口部があったと考えれば理解しやすい。したがって、墳丘は、丘陵のこぶ状の高まりを巧みに利用して連続的に築造されたと考えられよう。

第13トレンチ

墳丘南東側の裾の位置を特定し、1号墳の墳丘形態を確認するためのトレンチである。規模は、墳丘南東斜面に幅約1.0m、長さ約8.5mで設定した。

トレンチ内の基本層序は、最上層から順に表土（南壁1層、北壁1層）が全面に、流土（南壁4層、北壁2層）が広範囲にわたって堆積し、最下層が地山（南壁14層、北壁4、5層）である。標高約53.0m付近以下で確認できる地山は、トレンチ内においても一様ではなく、場所によって風化の度合いに差がみられる。大まかに土質と土色の違いによって、異なる四つの様相に大別することができるが、岩脈が岩盤と連続する状況を確認できる点は共通する（図20）。

墳丘は、地山と地山上に施された盛土によって構成される。地山は最も上面がほぼ水平であり、そこから20度前後となる斜面を形成しながら下ったのち、ふたたび平坦面となる。斜面の途中で平坦面は存在しない。斜面とその下方に位置する平坦面との傾斜の変換は平面的にはあまりはっきりしないが、壁面では比較的明瞭に見出すことができる。その位置は、南壁においては下方にあたるトレンチ東端から約1.2mの地点となる標高51.5m付近、北壁では約2.0mの地点となる標高51.7m付近にある。傾斜変換より下方の平坦面は、トレンチ東端までそのまま連続し、外方へとおよぶ。墳丘と墳丘外とを区画するような溝は認められない。

斜面とその下方の平坦面の地山には、その直上に流土が堆積する。確認した範囲内においては、いわゆる

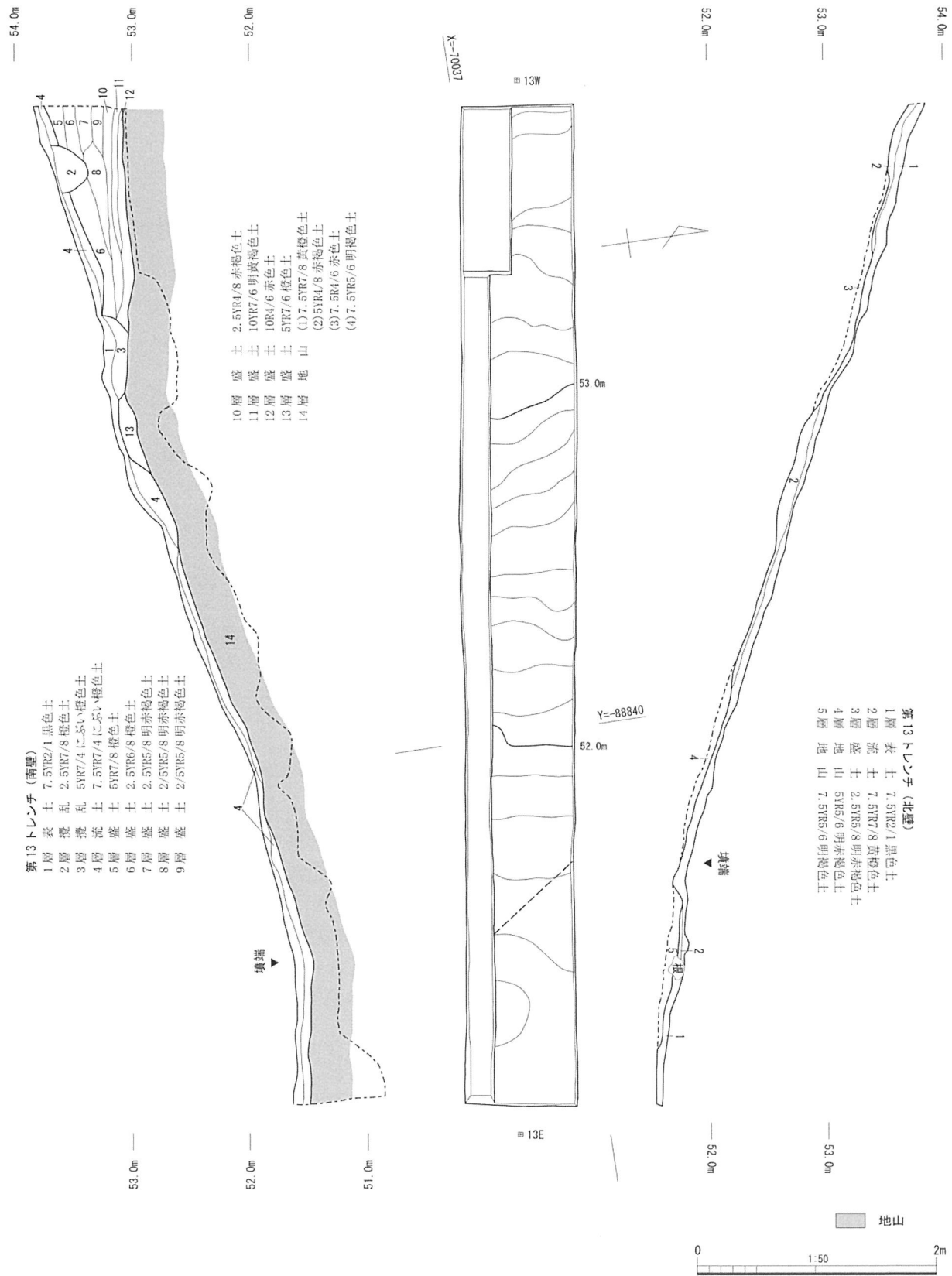


図20 第13トレンチ平面図・断面図

旧表土と判断できる土層が存在しないことから、地山削り出しによる整形が広範囲におよんだ可能性を想定しうる。そうであるならば、トレンチ下方に位置する、斜面と平坦面の境界をなす傾斜変換を、墳丘裾に相当するものとみてよいであろう。トレンチ内において葺石等の外表施設は確認できない。また、段築等の施設の存在も想定することはできない。

盛土は、トレンチの上方に位置する地山の平坦面上において、旧表土と考える土層を間にはさまずに直接施される。盛土を施すのに先立って、地山面を水平に近く削り出したのであろう。その地山面の上には、赤色系と黄色系の盛土（南壁5～13層）が互層に堆積する。盛土の多くは、4mm前後の白色花こう岩粒を均質に含むものである。盛土の中でも下層に施された南壁8～11層については、地山に由来する4～8mm程度の赤色系や黄色系のブロックが顕著に含まれる。土層の厚さは約5～20cmであり、より地山に近い下層ほど堆積が薄く、水平になる。南壁5、6層については斜面に沿って堆積しているようにみえるが、旧状をとどめていない可能性があり、確認できる範囲内において盛土は水平方向に施される傾向が強い。なお、北壁については3層が盛土である可能性を想定でき、その位置と堆積の形状さらには土質が共通することから、南壁6層と対応するものと考えられる。

このトレンチの調査によって後方部南東隅となる墳丘裾の位置を把握できたわけだが、他のトレンチでの調査結果と考え合わせると、墳丘形態が前方後方墳であることが確実視できるようになった。

3-5 墳頂部埋葬施設調査の概要

調査区の概要

墳頂部では、過去に三角縁神獣鏡等の副葬品や大型土器棺が出土したが、遺構としての埋葬施設の情報は限られていた。そこで、墳丘調査の進展に合わせて、墳頂部埋葬施設の実態を把握する作業を進めてきた。まず、第5次調査で墳頂部平坦面に十字形のトレンチを設定し、墓壙を把握しようと試みた。この地域において知られている前期古墳では、二段に掘り込む方形の墓壙が多いためにとった調査法であるが、後述するように結果として無墓壙であったことや、調査期間の制約のため、埋葬施設の痕跡を十分把握できなかった。第7次調査以降、墳頂平坦面に南北約6.3m、東西約6.0m、面積約39.0㎡のトレンチを設定し、埋葬施設についての正確な情報を取得する目的で面的に発掘調査を行なった。トレンチは全体を土層観察畦により4区画し、区画に沿ったサブトレンチによって断面でも遺構を把握することに努めた。各調査区は、方位によって北東のNE区、南東のSE区、北西のNW区、南西のSW区と呼称している（図21）。

NE区では、1956年に調査された大型土器棺墓が存在した場所を再調査した。詳細は後述するが、土器棺墓は墓壙掘形がすべて破壊されており、現状で平面的に検出できるのは土器棺を掘り上げた際の土坑である。土坑の長軸方向に1箇所、短軸方向に2箇所の土層観察用の畔を設け断面観察を行ないながら掘り下げて、土器棺の設置に関わる痕跡を探した。また、最終的に墳丘盛土における土器棺墓壙の位置を明らかにするため、土坑範囲内を東西方向に断ち割って地山まで掘り下げて土層観察を行なった（図22）。

一方、墳頂平坦面における攪乱は、SE区～SW区を中心にしてつつトレンチ全体に広がっていた。攪乱坑の掘形は平面的な掘削では把握しがたかったので、土層観察畦に沿ってSE-SW区北辺、NW-SW区東辺にサブトレンチを設定して掘削し、断面観察を行なったところ、少なくとも3回にわたって、地山まで掘り込まれた攪乱坑が存在することが判明した（図21）。これらの攪乱坑の埋土を除去しつつ、中心埋葬施設の痕跡を把握することを試みた。

調査手順としては、後出する土器棺墓の調査を経て中心埋葬の調査に及んだのであるが、ここでは構築順に記述する。なお、攪乱埋土は、すべて土のう袋で取り上げ、ふるいがけして遺物等の回収に努めた。第8、9次調査で取り上げた埋土は、土のう袋にして437袋に達した。攪乱埋土からは多数の土器片を回収したが、副葬品とみられる遺物は、鉄器が数片存在するのみであった。

中心埋葬施設の把握

墳頂部で把握した基本層序は、南北サブトレンチで見ると、最上層から表土（1層）、客土（2、3層）、盛土（12～43層）、地山（44、45層）である。客土は、盗掘の際の排出土等に由来すると考えられるもので、厚さは場所によって異なるものの墳頂部の全域に堆積している。盛土は、地山上に薄く細かな単位で、水平方向を基調として施される。盛土は色と質、さらには堆積状況の違いにより、上下に大別できる。上層盛土と下層盛土の差は、これに対応した盛土の違いを後方部斜面に設けたトレンチでも観察することができたから、墳丘築造や埋葬施設の構築等と関わる作業単位の違いを反映するものと考えられる。

このような盛土を掘り抜いて、平面規模が大きい攪乱坑が三つあり（SX01、SX02、SX06）、切り合い関係から SX06、SX02、SX01 の順に掘削されたことが判明した。SX06 は墳頂部の中央に広がる最も大きな攪乱坑であるが、これが三角縁神獣鏡等の発見につながった 1952 年の掘削痕であろうと考えられる。その埋土を切って、ほぼ垂直に掘り込まれた SX02 は、1956 年に盗掘坑の再調査を行なったという掘り込みの可能性、あるいは副葬品の残存物を求めて行なわれた盗掘行為が考えうる。SX01 も掘形の立ち上がり急角度であり、地山の硬い岩盤部分まで掘削している。1956 年以降も盗掘行為が続いていたことを示しているのであろう。

第 7 次調査において上記のような攪乱の数と範囲を把握し、第 8 次調査において、順次攪乱坑内の掘り下げを行なっていった。その結果、いずれの攪乱坑も地山面近くまで掘削がおよび、少なくとも SE 区、NE 区側で埋葬施設の残存部や墓壇と考える遺構の存在は確認できないことが判明した。その一方、SW 区における面的な検出作業の結果、SX02 の延長部分に幅約 60cm で東西方向に伸びる遺構が存在することが明らかとなった。

ところで、三角縁神獣鏡等の出土状況に関する聞き取りによると、「2 尺位の深さで鉄剣の破片も出てきた」らしく、掘削の際に「石ころがたくさん出た」との証言がある。第 8 次調査において確認したところでは、SX02 の底面に角礫が散乱しており、証言と一致する点が注目された。この位置は墳頂平坦面のほぼ中心で、埋葬施設が存在する場所としてふさわしい。その SX02 の西側に、埋葬施設と考えるにふさわしい大きさの遺構が存在することから、これが 1952 年に副葬品を出土した中心埋葬施設の残存部である可能性が考えられた。調査期間を十分に確保するため、第 9 次調査として年度を改めて発掘調査を行なった。

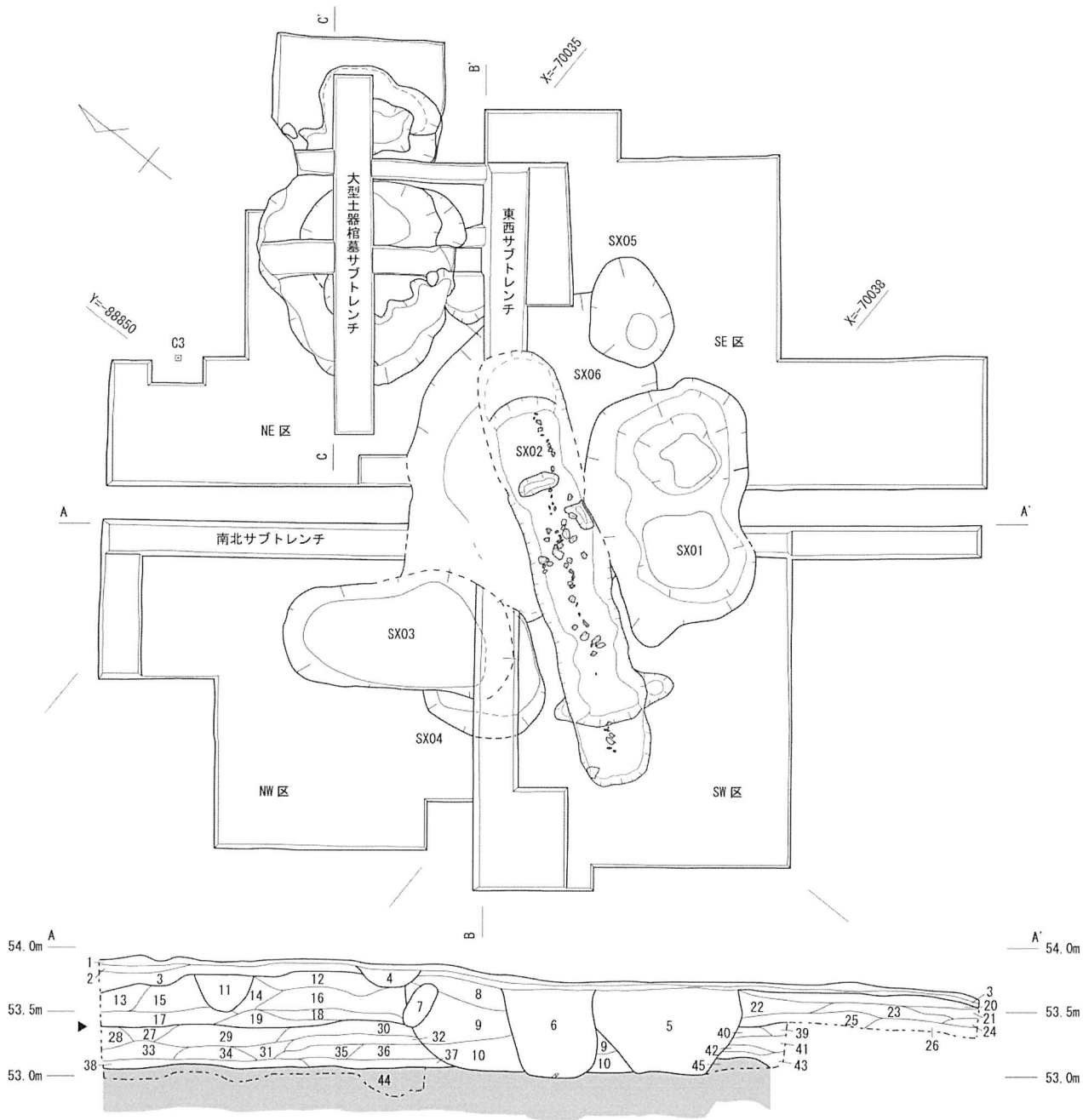
SX02 の調査

第 8 次調査において SX02 の西側に位置する中心埋葬施設の残存部と推測した、東西約 1.5m、南北約 60cm の範囲を調査対象として内部を掘り下げた。その結果、これは SX02 と一連の攪乱坑であることが判明した。

調査を実施した残存部の内部には、約 10～40cm の厚さで埋土が 1 層のみ堆積し、その下は地山である。埋土は、南北サブトレンチ東壁において 6 層とした SX02 の土層と色と質が共通する。堆積の連続性からも、今回調査した部分の埋土と第 8 次調査で確認した SX02 の埋土は一連をなすものと判断しうる。また、幅が各所で約 60cm とほぼ等しい点も同一のものであることを示唆する（図 23）。

調査の結果、SX02 の規模は東西長約 3.5m、南北幅約 0.6m、平面形が隅丸長方形をなすことが明らかとなった。主軸は、墳丘主軸に対して南西方向に約 75 度の角度で斜交し、直交しない。西端から東へ約 40cm の範囲には、平坦面と比較的緩やかな斜面がある。その斜面から東へ約 80cm の範囲は、地山が深く掘り込まれており、西端の平坦部より約 30cm 低く、凹凸が激しい不整形な床面を呈する。同様の平坦面や深い掘り込みは、東半にもある。すなわち、SX02 は幅という点では各所においてほぼ等しいが、深さという点では差が著しい。このように、床面が平坦ではないことから、SX02 は棺を設置した遺構の状況をそのままとどめたものとは考えにくく、後世の攪乱を受けた可能性がきわめて高いと判断できる。

床面からは約 5 cm 以下の多数の礫が出土した。この礫のなかには、地山と一体化したのがあり、礫群が東西方向に一直線に伸びることからも岩脈であると判断できる。一方、岩脈から浮いて地山上や埋土中から出土した礫もある。これらは、攪乱によって地山の岩脈部分が掘削された結果、上方に巻きあげられたものであろう。したがって、埋葬施設とは無関係であり、少なくともその構築に礫を用いたとは考えにくい。



南北サブトレンチ (東壁)

1層 表土 5YR4/1 褐灰色土	20層 盛土 7.5YR7/6 橙色土	39層 盛土 5YR6/8 橙色土
2層 客土 10YR6/4 黄橙色土	21層 盛土 5YR6/6 橙色土	40層 盛土 5YR6/8 橙色土
3層 客土 7.5YR7/6 橙色土	22層 盛土 5YR5/6 明赤褐色土	41層 盛土 2.5YR6/8 橙色土
4層 攪乱 (SX09) 7.5YR5/8 明褐色土	23層 盛土 7.5YR5/8 明褐色土	42層 盛土 2.5YR6/8 橙色土
5層 攪乱 (SX01) 7.5YR8/6 浅黄橙色土	24層 盛土 5YR5/8 明赤褐色土	43層 盛土 10R5/8 赤色土
6層 攪乱 (SX02) 7.5YR7/6 橙色土	25層 盛土 5YR5/8 明赤褐色土	44層 地山 10YR6/6 明黄褐色土
7層 攪乱 (SX08) 5YR6/8 橙色土	26層 盛土 5YR6/8 橙色土	45層 地山 7.5YR6/6 橙色土
8層 攪乱 (SX06) 5YR7/6 橙色土	27層 盛土 5YR6/6 橙色土	
9層 攪乱 (SX06) 5YR6/8 橙色土	28層 盛土 2.5YR5/6 明赤褐色土	
10層 攪乱 (SX06) 5YR5/8 赤褐色土	29層 盛土 5YR5/6 明赤褐色土	
11層 攪乱 (SX07) 7.5YR7/6 橙色土	30層 盛土 5YR6/6 橙色土	
12層 盛土 7.5YR8/4 浅黄橙色土	31層 盛土 5YR4/8 赤褐色土	
13層 盛土 5YR5/8 明赤褐色土	32層 盛土 5YR5/8 明赤褐色土	
14層 盛土 7.5YR6/8 橙色土	33層 盛土 7.5YR5/8 明褐色土	
15層 盛土 2.5YR5/8 明赤褐色土	34層 盛土 5YR6/6 橙色土	
16層 盛土 5YR6/8 橙色土	35層 盛土 5YR4/6 赤褐色土	
17層 盛土 5YR5/6 明赤褐色土	36層 盛土 5YR6/8 橙色土	
18層 盛土 5YR6/8 橙色土	37層 盛土 2.5YR5/6 明赤褐色土	
19層 盛土 5YR6/6 橙色土	38層 盛土 5YR5/6 明赤褐色土	

▶ 上層盛土と下層盛土の境界
 [Cross-hatched box] 礫、岩盤
 [Solid grey box] 地山

0 1.50 2m

図 21 墳頂トレンチ平面図・南北サブトレンチ東壁断面図

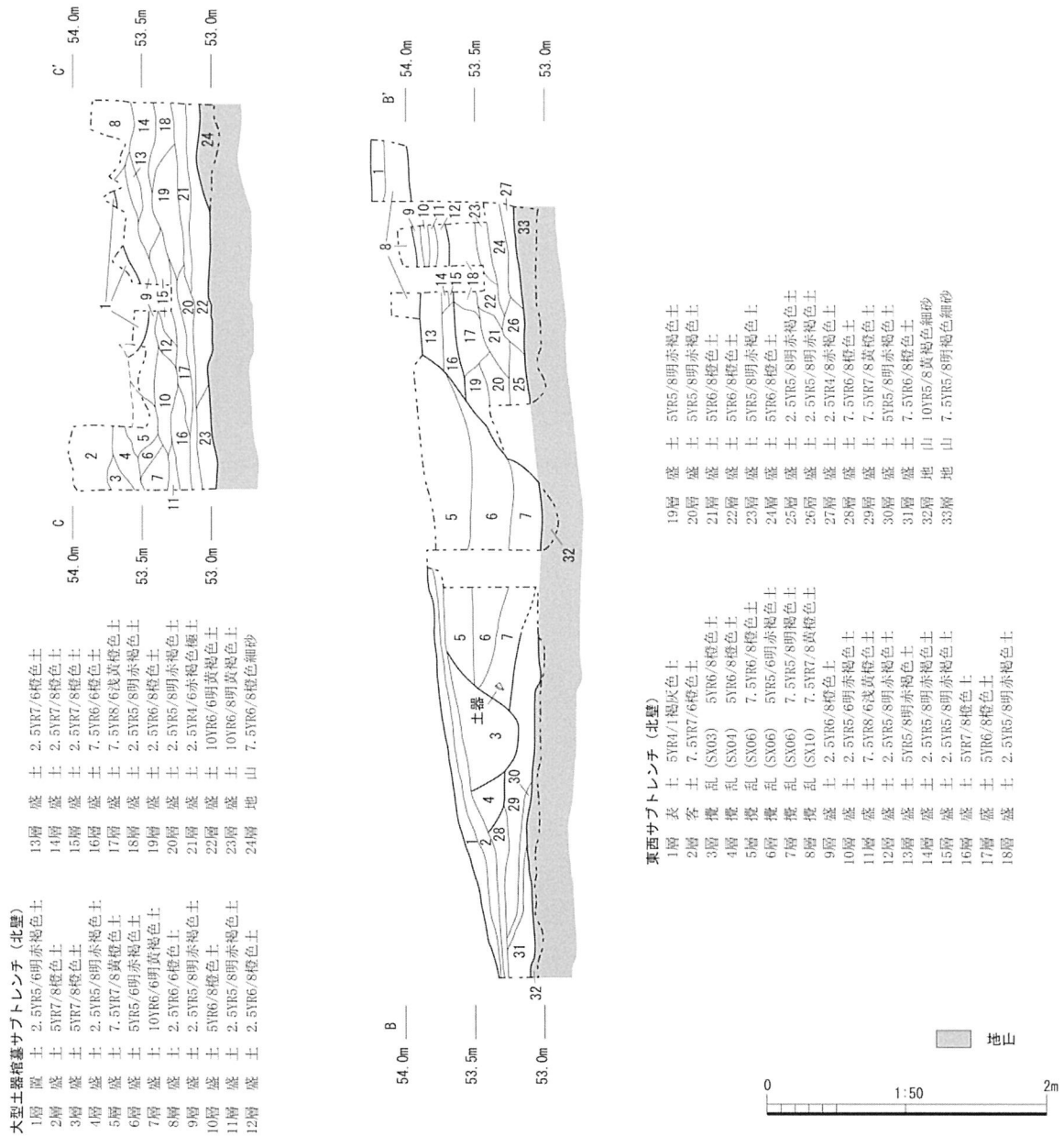


図 22 墳頂トレンチ・サブトレンチ北壁断面図

なお、出土遺物は、埋土中から土器がわずかに出土したのみで、いずれも細片であった。

以上のように、中心埋葬施設の残存部と推測した部分は、SX02 と一連の攪乱坑であると判断でき、埋葬施設がそのまま残存したものではない。墳頂部には、中心埋葬施設の痕跡をとどめる遺構が残存しない状況が明らかとなり、埋葬施設の痕跡が確認できたのは NE 区で検出した大型土器棺のみとなった。後世の攪乱によって、完全に破壊されたため、中心埋葬施設の痕跡をとどめる遺構を確認できなかったと考えられる。

ただし、中心埋葬施設の大まかな位置と規模は、墳頂部に残る攪乱から推測が可能である。計 6 基の攪乱は、後方部のほぼ中央にその痕跡を残し、東西方向に長いものが多い。とりわけ、副葬品の出土に関わったと考えられる SX06 と SX02 の平面形は、中心埋葬施設の位置や大きさを反映している可能性が高いと考えられよう。したがって、中心埋葬施設は後方部のほぼ中央に位置し、軸が東西方向を向いていたと想定される。規模については、東端を SX06、西端を SX02 の各上端から想定すると、長さが最大で約 3.7m となるが、埋葬施設の設置面を考えれば、さらに小規模なものになる可能性がある。副葬品とともに礫が出土したとの伝聞によれば、SX02 底面で確認した岩脈のライン上に埋葬施設が存在した可能性があり、副葬品は地山面に

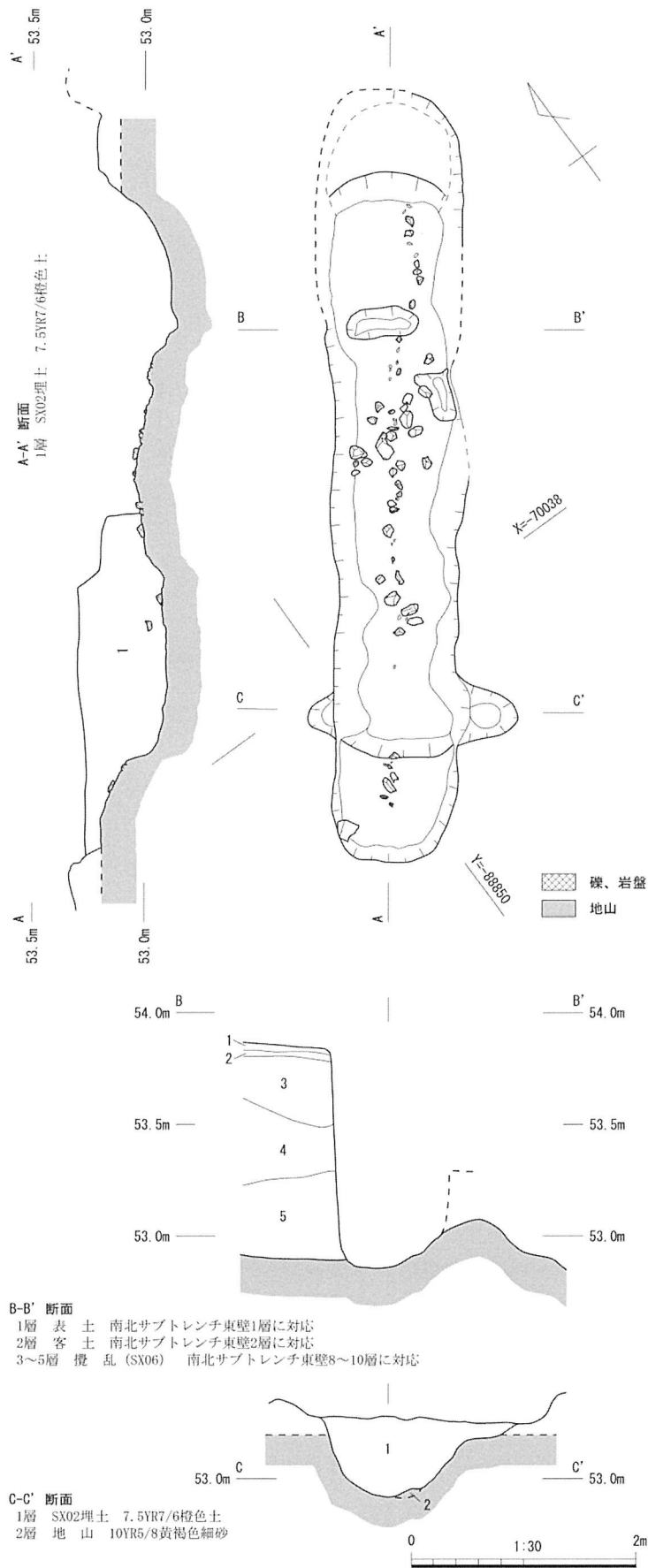


図23 SX02平面図・断面図

近いレベルに存在したと考えられるからである。実質的には、SX02の底面規模に収まるような、長軸が2.5m程度の埋葬施設であった可能性もある。

SX02は今回の調査によって攪乱であることが明らかとなったが、本来は中心埋葬施設であった可能性が最も濃厚な部分に位置する。平面形状は、東西に細長く、幅が一定であり、埋葬施設のあり方にきわめて近い。縦断面をみると、SX02の東端と西端には、ともに標高約53.2m付近で平坦面が観察できる。この平坦面を積極的に評価すると、中心埋葬施設の設置面に近い可能性があると言えよう。

一方、墳頂部の盛土は標高約53.4m付近で上下に大別でき、墳丘築造時の作業単位を反映すると考える。先の平坦面が埋葬施設の設置面に近いとすれば、下層盛土はその設置に伴う裏込めと関連する盛土、上層盛土は埋葬施設を覆う盛土であると想定できる。

なお、想定される中心埋葬施設には、平面と断面の双方において墓壙を確認できない点から、いわゆる掘込墓壙が伴わない形式が考えられる。

以上のことを総合すると、中心埋葬施設の形式は木棺直葬を想定するのが最も説明が容易であり、墳丘の完成に先立って地山面に近いレベルに設置され、墳丘の構築とともに埋葬された（無墓壙）と考えられる。木棺の形状や規模は想定の域を出ないが、幅0.6m程度、長さは2.5mないし、最大に見積もっても3.7mを超えないものであろう。

大型土器棺墓壙の調査

墳頂平坦面の北西部において、三角縁神獣鏡を出土した埋葬施設とは別に、大型の広口壺等を用いた土器棺が存在したことが明らかになっている。これは1956年に調査されたが、調査に関する図面や記述はほとんどなく、佐々木謙氏が残したメモや写真から推測するしかなかった。

第7次調査において、中心埋葬施設の調査に先立って、出土地点の再調査を行なった。まず、平面的に検出したのは土器棺を掘り上げた際の土坑である。平面形は不整な楕円形を呈する(図24)。この土坑の長軸方向に1箇所、短軸方向に2箇所の土層観察用の畔を設け、断面観察を行ないながら掘り下げていった。

その結果、1956年の調査時には墓壇を把握する配慮が払われておらず、掘形が破壊されているが、盛土上面から掘り込まれる墓壇が伴っていたことが明らかとなった。すなわち、上面検出した土坑とは別に、盛土を切り込む遺構とその埋土が認識できた(図24、B-B'断面4層)。埋土の上面は、土器棺の胴部形状に近い湾曲面をもつ部分が残されている部分があり、土器棺の圧痕と考えられた。したがって、この埋土は、土器棺墓壇内に設置された置土と考えられる。

墓壇の残存部分は土器が設置された下部に限られるようであるが、遺構の掘形を断面形で把握すると、西側で深く、東に向かってやや高く上がる。置土もそれに伴って存在するようであり、不連続ながら、墓壇全体に存在するようすが窺われた。上面での規模は不明であるが、墓壇の規模は南北約1.1m、東西約1.4m以上、残存する深さが約45cmであり、横断面形は楕形を呈すると考えられる。土器棺に使用された大型広口壺の胴部最大径は約1mであるが、それがちょうど収まるほどの墓壇と考えられる。

墓壇の形状や置土に残る土器の圧痕を手がかりに推測すると、土器棺の主軸は、墳丘主軸と直交する東西方向に置かれて

いたと考えられる。また、口縁部は東に向けていたと考えられる。なお、佐々木氏のメモによると土器棺は地表面に対して約30°の角度を付けて斜めに設置してあったように描かれているが、残存する墓壇の断面形からみると、それほど顕著な傾きは観察できない。ほぼ横位に近い角度で設置されたと考えられよう。

また、ここで検出した置土上面レベルと土器棺の最大径をもとに、土器棺全体が墓壇内に納まったと仮定して本来の墳頂面を推測すると、現状より0.5mほど高い標高54.5m付近まで墳丘があったと考えうる。後方部の墳丘高は、第7トレンチ墳裾からみて2.7mとなる。盛土の高さは1.5mほどであったろう。

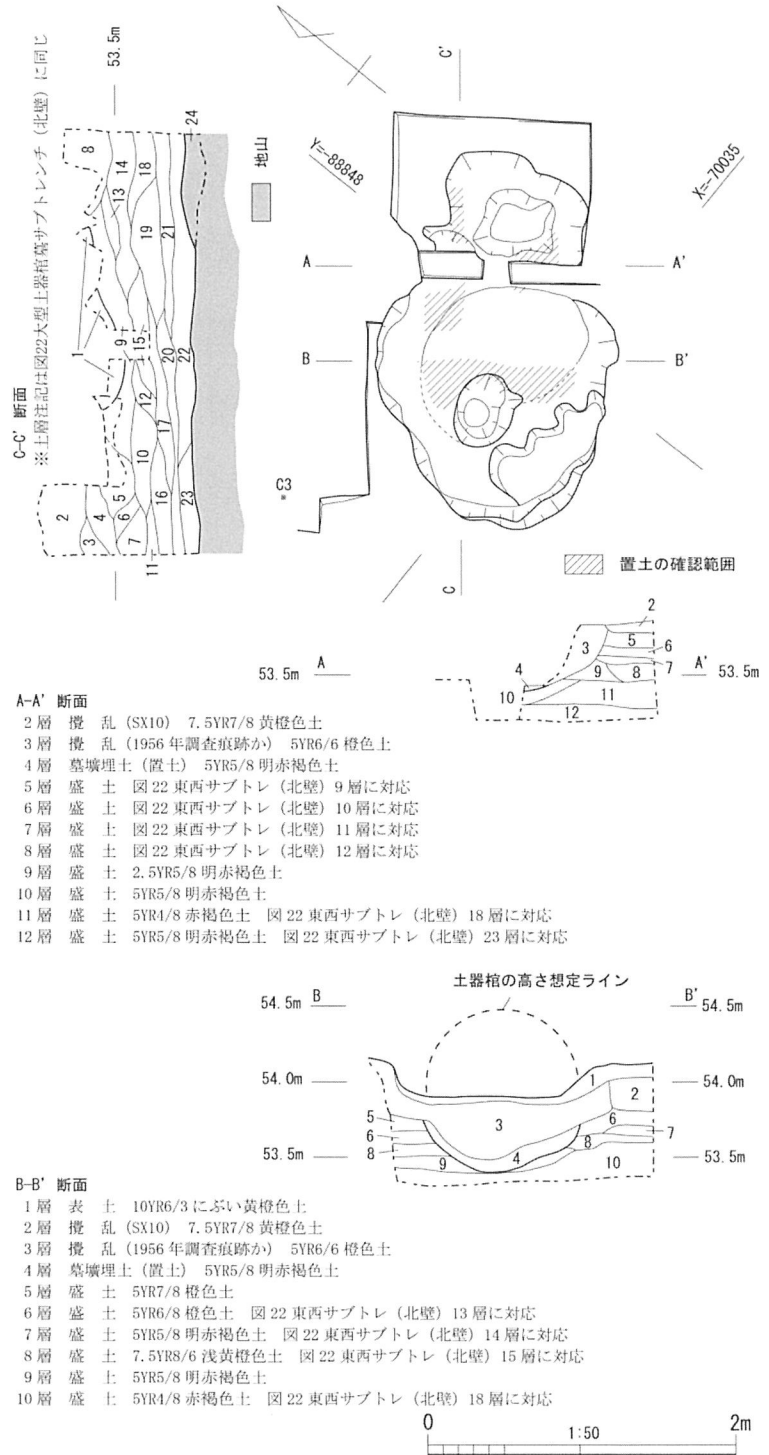


図24 大型土器棺墓の墓壇

3-6 墳丘形態と構築過程の復元

これまでの調査によって、1号墳の墳丘形態や構築方法に関する情報はある程度蓄積された。ただし、墳丘の削平は各所に及んでおり、復元に足る明確な情報は少ない。とくに前方部前端は削平が著しい上に調査可能な範囲が狭いことから、これ以上情報が増加することは期待できない。ここでは、墳丘形態、規模を復元する根拠となる情報を整理し、復元案を提示しておく（図25）。

墳丘形態と規模

墳丘形態は、第4、6、13トレンチの調査結果から、改めて前方後方墳と考えることが妥当である。第4トレンチの土器棺墓が墳丘外に構築されている点と墳丘全体の形状を考慮すると、墳丘は前方部のつく形態になることが確実である。また、わずかながら盛土が施されている点も、当該地点を前方部と考える想定と矛盾しない。

墳端は削平を受けており、くびれ部の形状は東西いずれも明確でない。基本的に後方部墳頂以外は盛土も認められず、葺石等の外表施設も存在しないから、墳端とする根拠は、地山の整形によってできた墳丘斜面部と墳丘裾平坦面部がなす傾斜変換点に求めざるを得ない。第6トレンチにおいては、後方部墳丘裾を標高51.4m付近の傾斜変換点に求めうる。前方部では、トレンチ西壁から0.8mほどの地点で標高51.5mの位置に平坦面が存在するが、これを墳端とみてよいかどうかは検討を要する。前方部は部分的に階段状に削平されつつ、急斜面をなしているが、そのようなすは前方部の東側面全体で共通しており、墓地造成による削平を考慮せざるを得ないからである。第12、10トレンチ等、前方部の東側面に関わるトレンチの調査結果全体と整合的になるように理解すると、51.4m付近の傾斜変換点に墳端を求めておくことが自然であろう。このように理解すると、くびれ部の位置はトレンチ南壁から1.1m、西壁から1.2mの付近に想定することになる。これは、これまでの概報で示してきた墳丘復元案とは若干異なる位置であり、前方部の幅を0.6~0.7mほど広げて復元することになる。

なお、残存墳丘の10cm等高線図をみると、前方部における等高線は、座標北から約30度振れて北西-南東方向にほぼ並行して走る。削平を受けつつも、基本的には前方部側面の形状を保っているとみなしうる。そして、トレンチの北壁から1.5m、西壁から0.6mの地点において、等高線は急角度に向きを変え、座標北から約35度偏した角度で南西-北東方向に伸びる。51.6m以上の等高線は、くびれ部以東では間隔が開くが、曲線を呈する部分はない。このような様相からみても、削平が著しいとはいえ、トレンチ内にくびれ部が存在することは疑えない。

西側くびれ部となる第4トレンチでは墳端を捉えることができないが、前述のように、51.6m付近に平坦部が存在し、その位置は、現状の墳丘主軸によって東側くびれ部を折り返した地点とさほど相違しない。したがって、この平坦部をくびれ部に近い位置と推測できる。この場合、くびれ部幅は7m程度になる。後方部裾は、トレンチの範囲内に存在していたと推測するが、攪乱によってその痕跡を見出すことはできなかった。なお、かつて土器棺が出土し、崖面に墓壙の落ち込みが見えていたと伝えられる地点は、トレンチ南西隅のあたりである。トレンチ内で検出した攪乱坑は、いずれも底面の形状が墓壙とは考えられないものである。その墓壙が現在でも残存しているとすれば、くびれ部というよりは、後方部の北西隅あたりに位置することになるか。

また、第13トレンチによって、第7、8トレンチの調査範囲を延長した部分にまで墳端部が伸びると判断できた点は墳形を確定する上で重要である。コーナーは厳密には不明であるが、トレンチ内にその一部が存在すると考えて矛盾はない。後円墳であった場合には、第7、8トレンチで検出した墳端の位置を結ぶ円周上に墳端が存在するはずであるが、実際に検出された墳丘裾部はその想定よりも外側に位置する。墳丘が南東部に張り出す形態であることは確実であり、トレンチの所見を総合すると、前方後方墳であると言える。なお、後方部の規模は、第6、7、8トレンチにおける墳端の位置を延長し、現状の墳丘主軸で反転復元す

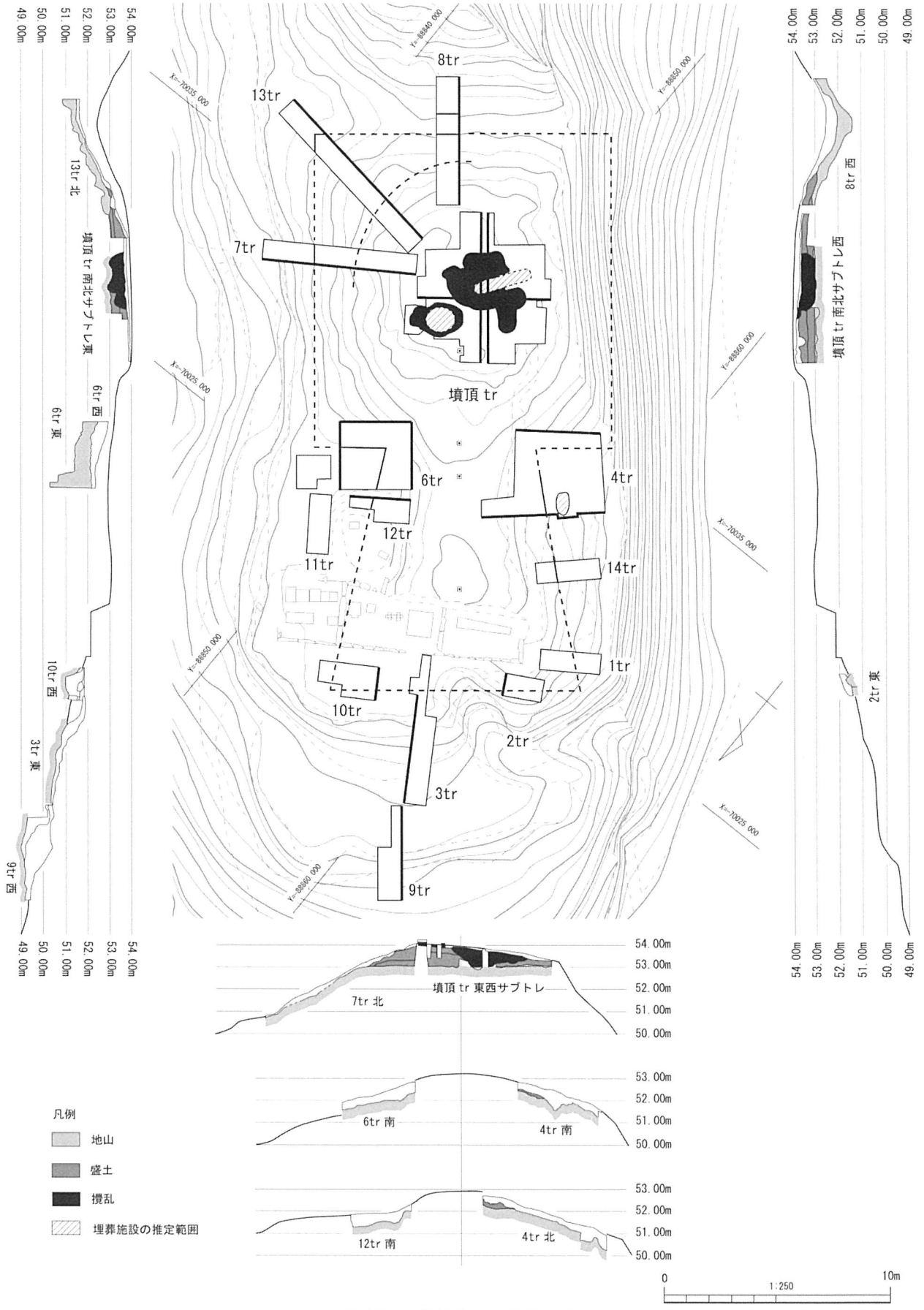


図 25 1号墳墳丘形態復元案

ると、東西約 13m×南北約 14mとなる。西側くびれ部が明確でないため、現状の墳丘主軸が真に中軸であるかどうかの保証はないから、単純な反転復元で正確な復元は期しがたい。中心埋葬施設の位置を参考にするのもかなわないので、現状ではこれを大きく逸脱しないとみる以外にないであろう。

前方部の形態はさらに不明な点が多い。東側面については、いくつかの点情報をつなげて、おおよその形態を推測しうる。第 6 トレンチで想定したくびれ部、第 12 トレンチ、第 10 トレンチにおける地山の傾斜変換点は、おおむね直線で結ぶことができ、前方部の広がり方を示していると考えられる。ただし、細部の形状は明らかにし難い。

前方部の西側面は、検討できる情報がさらに少ないが、第 4、14 トレンチにおいて推測する墳端が一定の目安になろう。東側の形態を現状の墳丘主軸で折り返して復元すると、その位置がややずれるが、広がりの方角性は一致する。

前方部前端に関しても確かな情報はないので、長さや前端幅は不明と言わざるを得ない。ただし、すでに各トレンチの報告で記述したとおり、古墳の主軸に並行した南北方向に、墓地造成以前の段差が存在したと考えられる地点が二か所ある。一つは、第 10 トレンチで推測する段差である。これも点情報にすぎないが、これと第 3 トレンチ拡張部で検出した加工段を結ぶ直線上には、第 2 トレンチにおける岩脈の北端がある。これらの点は、標高 51.1m～51.5m にあって、前方部の東側墳端のレベルと大きく矛盾しない。さらに、このように想定した直線は、古墳主軸におおむね直交する。これを前方部前端と積極的に評価すれば、長さ約 11m、前端幅約 12m の前方部を推測することになる。

いま一つの候補は、第 9 トレンチで推測する段差である。前方部の広がりを上記のとおりとすると、前方部の長さ約 16m、前端幅約 15m の規模を推測しうる。この場合、前方部前端の墳端レベルが他の部分よりも 1m 近く下がる側面観となる。前方部前面は、急角度に立ち上がって、高さ 4m 以上の壁状になるが、丘陵先端部でこのような墳丘を築くためには、大規模な盛土が必要になろう。そのような復元は発掘調査の所見とも矛盾するため、採用しがたい。現状では、前方部前端の位置は前者のように想定することが妥当であろう。

これまでの調査成果を総合すると、普段寺 1 号墳は、全長約 25m の前方後方墳であり、後方部の平面規模が東西約 13m×南北約 14m、前方部長が約 11m、くびれ部幅約 7m となる。後方部の墳丘高は現存で 2.2m を測るが、本来の高さから削平されていることは確実である。墳頂部大型土器棺墓の墓壙底の標高は 53.5m 付近にあり、胴部最大径が約 1m の大型広口壺が完全に埋没するとすれば、本来の墳丘面は標高 54.5m 以上の地点にあったはずである。これは現状の墳頂平坦面よりも 0.5m 高い位置であり、墳丘高は少なくとも 2.7m あったとみておくことが妥当であろう。

墳丘の内部構造

墳丘構造の特徴として、本来の丘陵を巧みに利用して、下半部を削りだし、上半部に盛土を施すものと総括できる。注目すべきは、調査範囲では旧表土となる土層が確認できず、墳端のレベルが各所でおおむねそろうことで、墳丘造成の初期段階において、墳丘範囲外がほぼ平坦に加工されていたことを物語ると考えられよう。

また、後方部および、墳頂トレンチにおける調査成果を総合すると、墳丘構築過程をかなり具体的に復元できる点が重要である。まず、標高 53.1m 付近において削出された平坦面が特徴的である。この直上に盛土が行なわれるわけであるが、後方部に設定した各トレンチにおける墳頂部地山平坦面の検出位置をみると、その平坦面の平面形は墳丘の外形とは異なって、方形を呈しないと考えられる(図 25 中後方部内側の破線)。ただし、各トレンチの断ち割り断面でしか確認できていないから、それが多角形であるのか、楕円形であるのか、あるいは方形をなさない理由が南西隅部だけが変形していることによるのか、不明とせざるを得ない。

そのような平坦面に盛土が施されていくのであるが、下層では水平に薄く盛土を施し、上層ではやや大きな単位を盛るという 2 段階の施工方法が想定できた。墳頂トレンチの標高 53.4～53.8m 付近で確認した盛土の様相の差異は、後方部墳丘トレンチにおいて観察された盛土の様相の差異ともほぼ対応する。このような

盛土の違いは墳丘上半部の構築方法全般に関わっており、とりわけ、埋葬施設の構築と関わっていると考えられる。中心埋葬施設はたび重なる攪乱によって完全に破壊されていたため、その構築方法不明と言わざるを得ないが、墳丘の中心部から斜面部まで盛土の方法に一体的な関連があるとすれば、埋葬施設は攪乱範囲内に収まることが確実視できるであろう。攪乱坑の範囲外側に伸びるような墓壇ライン等は観察できなかったのであり、逆に SX02 のような細長い攪乱坑内にちょうど収まるような墓壇は想定しにくい。

したがって、埋葬施設は、いわゆる掘込墓壇を伴わない可能性が高い。墳丘上半部のほぼ全体に同じ盛土方法が及んでいることからすると、構築墓壇であるとも考えにくい。墳丘と一体的に埋葬される無墓壇の埋葬施設を想定するのが最も自然であろう。その際、すでに述べたように、下層盛土は埋葬施設の設置に伴う裏込めに関わる盛土、上層盛土は埋葬施設を覆う盛土と推測でき、木棺直葬を想定することが自然である。現状で盛土は 0.7～0.8m ほどの高さしか残存していないが、大型土器棺墓の墓壇の高さや使用された土器の大きさから推測すると、その倍近い高さ 1.5m 以上の盛土を想定することが適当である。その場合、下層盛土の厚さ 0.3m に対して、上層盛土 1.2m 以上という比率になると考えられる。下層盛土は埋葬容器である木棺の高さに相当する可能性がある。

ところで、このように復元すると、上述の墳頂部地山平坦面は、単に盛土の開始面であるというだけではなく、埋葬施設の設置面でもありうるという観点から重要であろう。この平坦面や下層盛土の上面は、墳丘構築の停止面と考えられ、葬送儀礼執行の場であった可能性も考えられよう。

また、墳丘に葺石等の外部施設や溝等の区画をもたない点も無視できない特徴といえよう。このような墳丘の特徴は、これまでのところ山陰における前期段階の古墳に特徴的であり、しかもより古い様相と位置付けることができる。

4. 出土遺物

4-1 既知の出土遺物

1952年の発掘によって出土した遺物は、三角縁神獸鏡1面、鉄剣片一括、ヤリガンナ1点、管玉1点がある。このうち、三角縁神獸鏡のみは土地所有者である大安寺の所蔵となったが、残りは佐々木古代文化研究室に引き取られたようだ。鏡は、のちに重要文化財に指定され、現在2号墳出土鏡（個人像）と同様に鳥取県立博物館に寄託の上、常設展示されている。

佐々木古代文化研究室が所蔵していた鉄製品、管玉、土器等は、代表である佐々木謙氏の没後、遺族の意向によって米子市に寄贈され、佐々木謙コレクションとして米子市教育委員会によって管理されている。1956年に調査された土器棺墓に使用された大型広口壺等とともに米子市史資料編の中で実測図が公開されたが、土器以外の実測図は調査当時のままであり、再整理が必要である。

三角縁神獸鏡

三角縁唐草文帯二神二獸鏡である（図26）。面径24.1cmを測る。もともと完形で出土したらしいが、出土後に事故で破損していたものを修復している。遺存状況はきわめて良く、外区や鏡縁部を中心に緑青が発生して文様が剥離した箇所も存在するが、全体的に白銅質の地金が残る。

図示した左下の獸像から縁部にかけての位置に、破片の接合時に生じたずれが認められるものの、鋳上がりも非常に良好で、鋳肌の荒れや湯まわりの不良等はほとんど認められない。鈕、乳の斜面部、三角縁部、外区鋸歯文の上面等で入念な研磨痕が観察できる。鈕孔の縁部は、図示した下側ではやや丸みを帯びるが、上側ではやや鋭い鋳バリを残す。想定できる鋳型の構造上、鈕孔の向きは湯口の位置を示すと考えられる。岩本崇氏が指摘するように、湯口に近い位置における湯冷えによって鈕孔縁部が丸みを帯びた可能性があり、図の下側に湯口があったと推測する。また、岩本氏は他の同型鏡群も同じ方向に鈕孔があり、湯口と考える位置で文様の表出が弱い部分等が観察できると指摘している（岩本2009）。

外区は、縁部から鋸歯文-複波紋-鋸歯文の文様構成をとる。外側の鋸歯文の外周部にはいわゆる外周突線（福永1991）が存在し、三角縁の突出は弱い。外区内側の鋸歯文と内区は段差をもって区画されるが、段差の斜面は無文である。内区外周には櫛歯文を巡らせ、その内側に一段高く唐草文帯があり、五朱銭文で13分割した間に唐草文を1単位ずつ配する。唐草文は、S字状文の両端部に二つの渦文が二重に展開する装飾性の高いタイプで、樋口隆康氏が古相に考えるものである（樋口1952）。一方、新納泉氏は、三角縁神獸鏡においてはこれと異なる変遷を考え、唐草文の形状が簡素なものから曲線を付加した華やかな形に変化するとみている（新納1991）。渦文の先端部の形状に着目すると、単純に伸びて終わるものが多いが、部分的に剣先状に三角形を描くものがあり、一つの唐草文に両方が共存しているものもある。唐草文が蔓性植物をモチーフとした文様であることを考えると、葉の表現である渦文から単純に伸びて終わる表現が本来の文様要素と思われる。剣先状の表現は、それが蔓性植物の部位では説明できず、本来の唐草文が変化する中で現れた表現技法と理解した方が説明しやすい。このように考えてよければ、本鏡の唐草文は、剣先状の表現をもつ新納氏の唐草文1式、福永氏の唐草文①（福永1996）が出現する過程にあると捉えることができよう。

唐草文帯の内側は銘帯で、「惟念此竟有文章賣者老壽為候王上有申鳥在中央」の銘文を時計回りに配する。銘文の始まりにあたる「惟」の横の五朱銭文は、「五」字を記入している。また、それと180°対向する位置にある五朱銭文は、方形図文の中に「五」字を記入しているようである。銘文の開始位置の目印とも考えるが、前者は西王母、後者は東王父の図像の位置と符合しており、文様帯の分割とも関わるものであろう。なお、「者老壽為」の4文字は左右逆字になっている。また、「竟」の字は破片の欠損部にあたっているため、部分的に消えている。

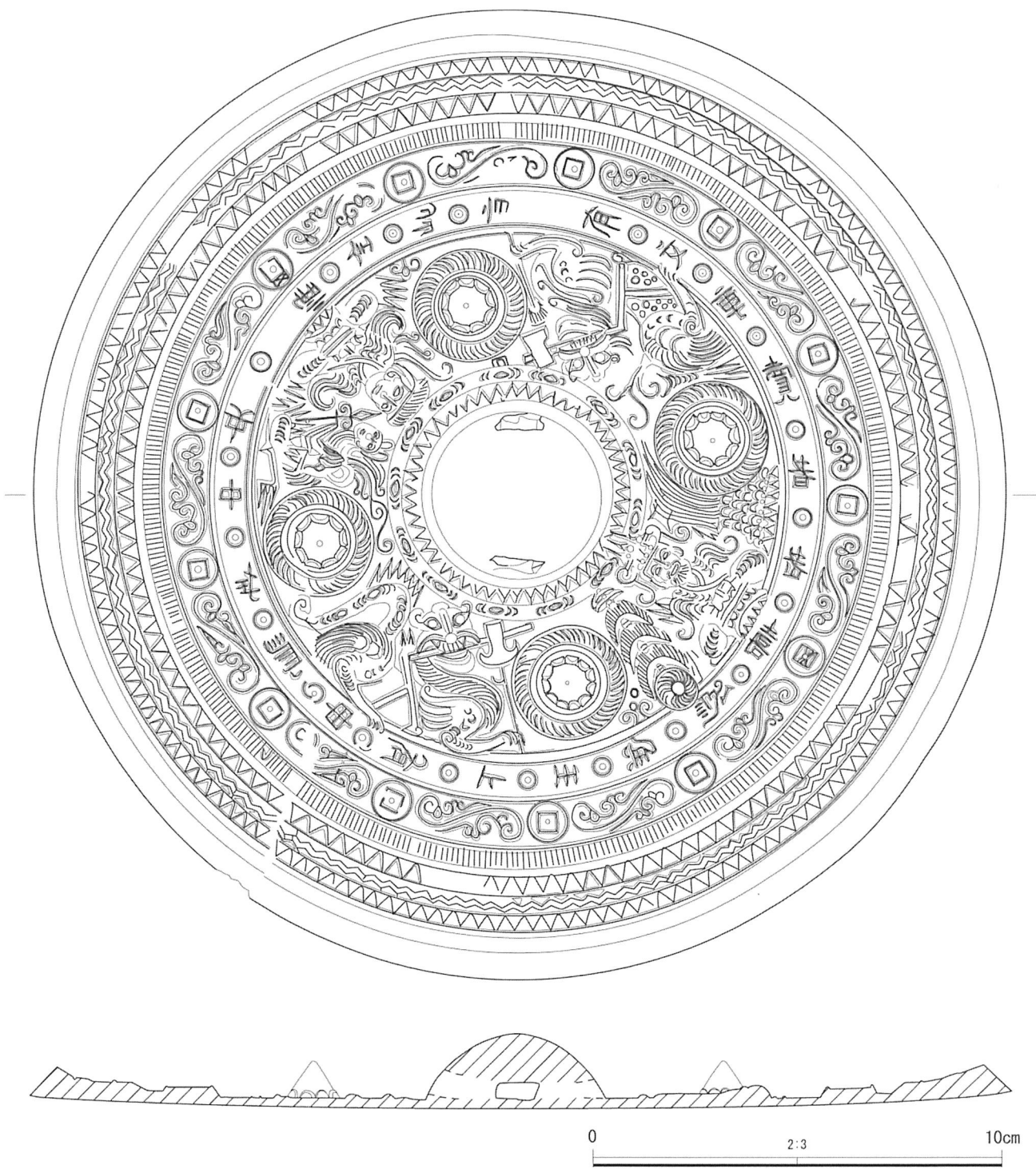


図26 普段寺1号墳出土三角縁神獸鏡

内区中央を4乳で分割し、対向する位置に西王母、東王父、斧鉞を嚙む2獣を配置している。図像の表現は二神二獣鏡群に多い表現④とされるものである（岸本 1987）。神像の着衣は、衿を右前に合わせ、裾が翻って巻き上がる表現をとる。西王母は、神座に坐して体の右側に蕨手状の翼あるいは雲気の表現がある。通例の双卷冠を付けていない。左側には、槍状の武器を手にした侍仙が描かれている。東王父は、やはり神座に坐しており、通例の三山冠を被っている。西王母とは異なって、三角形の翼が体の両側に表現されている。鼻筋がよく通り、口髭、顎鬚の表現も明瞭である。図像の右側には傘松文（旄節文）があり、底部に振文状の表現をもつ、新納氏が傘松形3式とするものである。左側には鋸歯文と鱗状文が多段に重ねられ、さらに

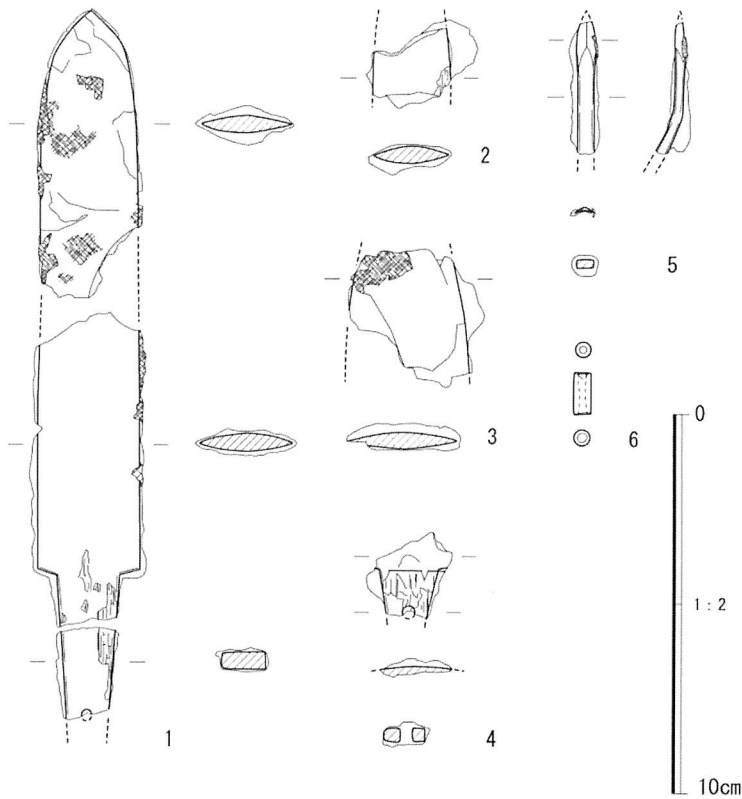


図27 普段寺1号墳出土鉄器・管玉

上方に数本の直線文が表現された文様がある。蓬莱山の表現と考えられる。

獣像は体部の羽の表現が立体的かつ写実的なものである。2体とも斧鉞を嚙んでいるが、その形状は相互に異なり、図示した上の獣像は肩部のあまり張らないタイプの斧を、下の獣像は幅広で肩部が反り返る鉞を嚙む。いずれも斧の柄から伸びた棒状の表現が二又に分かれたものが体に取り付く。獣像は体部の文様や尾の形が異なり、それぞれ違うものを表現しているようだ。

内区を分割する乳は、その周囲に振座を配する。乳の基部には先端が丸みを帯びた鋸歯文が9～11個浮き彫り表現されており、装飾的である。

鈕の外周には有節弧文帯があり、部分的に東王父の冠によって切られているが、全周する。外向きの鋸歯文を施した鈕座をもつ半球形の鈕が中央にある。鈕孔は

長方形を呈し、鈕孔の下辺は文様施文面からやや浮いた位置にある。

なお、鏡面側には水銀朱と考えられる鮮やかな赤色顔料が付着しており、一部には布が付着している。布は2重以上に重なっているが、本来鏡を包んでいたものか、付近に存在していた布製品が付着したものか分からない。鏡背側では布の存在を確認できないから、全体を包んでいたものではない可能性が高い。また、鈕の周囲の凹んだ部分等には、うっすらと赤みを帯びた付着物が認められる。鏡背側にも赤色顔料が付着した可能性も考えられるが、埋葬施設の設置面に近い地山直上には、赤色を呈する地山の風化粘土が盛られている部分がある（図21の37層、43層）。これらとも類似した色調であることからすると、鏡背側を下に向けて副葬されていた可能性を考えうる。

鉄剣・ヤリ

鉄製品の破片は20片存在するが、その多くは細片となっていて器種を特定しがたいものが多い。ただし、寸法や断面形等から、剣またはヤリの一部と考える破片が7片存在し、少なくとも3個体分の剣またはヤリが存在したと考えられる。

一つは、切先から茎までの全形を窺いうるもので、現存長は、各破片の残存長を合計すると18.2cmあり、身部残存長は14.5cm、茎部残存長は3.7cmとなる。刃部の最大幅2.8cm、茎部幅1.5cmを測る（図27-1）。破片は大きく、切先片、関部を含む身部片、茎片の3片からなり、破断面の厚さや破片の形状等を観察する限り、互いに接合しないものの、近い位置に配置できると考えられる。これと同一個体の身部と考える細片がさらに存在するが、図化していない。本来はさらに身部が長くなると思われるが、残存する破片数から判断すると、図示した状態よりもはるかに長いということは考えられない。

関部の破片に注目すると、茎部から連続する柄と考えられる木質が関を超えて身部にまで及んでいる。この木質は図示した側の裏面でも同様に存在しており、柄縁の木質と考えることができる。一部は刃部を回り込んで木質が残っていることから、関部を木質が覆うような柄の形状を復元することができる。柄縁の平面形や側面形は不明であり、柄を構成する木材の枚数も不明であるが、このような柄の付き方からするとヤリ

の可能性が高い。ただし、漆塗りがあったかどうか現状では検討できないし、剣でないと断定もできない。

一方、切先から身部にかけての破片は、布が少なくとも3重以上に巻かれた状態で、鞆等の装具は伴っていない。また、身に錆はなく、断面形はレンズ状を呈する。茎片には目釘孔が一つ観察できる。

これより細身で、断面形が剣形をなすものがある(図27-2)。切先に近い部分の破片で、幅2.0cm、厚さは4.5mmを測る。鉄剣とすれば、切先に近い部位の幅とは言え、かなり細身の部類に入る。また、他の剣形鉄製品の身部片は、いずれも布巻きであるのに対して、これのみ木質が直接付着する。鞆を伴った鉄剣である可能性も考えられるが、サイズからすると、大型の柳葉鉄鏃である可能性も考える。類似した例としては、奈良県天理市中山大塚古墳(河上他1996)や滋賀県八日市市雪野山古墳(福永他1996)等から出土した事例が挙げられる。鉄鏃とすれば、付着する木質は棺材であろうか。

3はやや幅広の刃部片である。切先に近い平面形を示すので、1、2とは別個体となる剣形品である。残存部での刃部幅は3cm程度になると考えられる。

4は関部から茎にかけての破片である。茎部は本来の厚みを有するが、剣身部は層状に剥離して表面の一部しか残存していない。付着する木質から、一木造りであること、関下端部に合わせて柄縁が存在することが判明し、鉄剣と考えられる。剣身部は抜き身であるのか、布巻きなのか不明であるが、少なくとも鞆は伴っていないようである。したがって、2とは別個体の可能性を考えるが、3の茎部となる可能性はある。3とも別個体であるとするれば、4点の剣またはヤリが存在することになる。茎部が1.2cmしか残存しないにも関わらず、目釘孔が一つ観察できるから、本来の茎も短いタイプであろう。

残存する鉄器片の数量は、復元できる武器の本数に比べて非常に少ない。発掘調査では、盗掘坑の埋土をすべてふるいにかけて、可能な限り回収に努めたが、実際に回収できた鉄器片もわずかであったため、かなりの量の破片が失われていると考えられる。ただし、残存する部位を見る限り、大型品の存在は考えにくく、バリエーションも豊富ではない。小型品を中心に数本程度の副葬量であった可能性が考えられよう。

ヤリガンナ

小型のヤリガンナが1点ある(図27-5)。古瀬氏の分類では、鰭形刃部をもち、刃部長の短いI a類に該当する(古瀬1991)。残存長3.5cmを測る。刃部先端を欠くが、推定の刃部長は1.3cm、刃部幅0.6cmである。茎部長は2.5cmが残存し、茎部幅0.5cmである。刃部の裏面に裏すきをもつ。刃部側面に布が付着するが、柄の木質は見られない。茎部は屈曲するが、さびによる変形と考えられる。

また、刃部先端近くに緑青が付着しており、布が付着することも考え合わせると、鏡に近い位置に副葬されていた可能性がある。山陰の前期古墳では、島根県松江市社日古墳(大庭他2000)の事例等からも指摘されているように、農工具の副葬位置は頭部付近であることが多い。このことは鏡の至近に存在したとの推測を補強するものである。

なお、細片化したものの中には、刀子等、別器種の工具が含まれていた可能性を考えるものの、現状では不明である。ただし、鉄斧等の大型鉄器の存在が窺えないことは武器と同様である。

管玉

長さ11mm、径4.4mmを測る管玉が1点ある(図27-6)。石材は淡緑色を呈する硬質の素材で、縞状に白色の石理が入る。両面穿孔で、内部には穿孔具の回転痕がよく残る。穿孔具の先端はやや丸みを帯びていると観察できる。おそらく石針によるのであろう。このような特徴からすると、緑色凝灰岩と推測される未定C群石材を用いた、朝鮮半島系の管玉である可能性がある(大賀2005)。

土師器

過去に墳丘から出土した土器の中には、土器棺に用いられた大型の広口壺がある。既に述べたように、西側くびれ部の削平された崖面にあったという土器棺は行方不明で、どのような土器であったのか定かではない。また、過去に墳丘や周辺から採集された土器片が存在し、鳥取県立博物館等に収蔵されているが、現在となっては1号墳に確実に伴うのかどうか分からない。

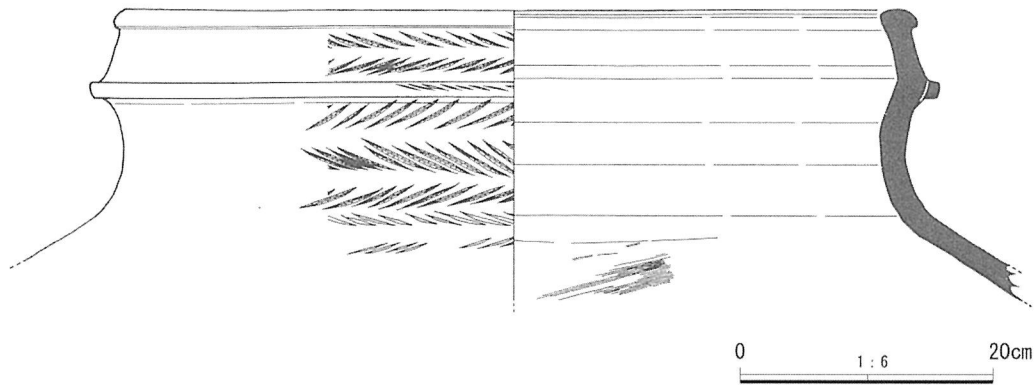


図28 第4トレンチ出土大型広口壺

現在、出土位置が明らかで、現物が存在するものとしては、1956年に調査された大型土器棺を構成する広口壺、合子形土器がそれぞれ1点ある。これらの土器は、かつて東森市良氏が紹介し（1967）、米子市史資料編で再実測された図が掲載された。この再実測図では、大型広口壺は上半部しか示されていないが、本来は底部まで存在し、完形に復元しうる。しかし、2000年の鳥取県西部地震で被災し、最近まで遺物の観察や実測が困難な状況にあった。現在も作図が完成していないため、新たな図を提示できない。

大型広口壺に関しては、第5、7次調査で第4トレンチから出土した口縁～胴部片がある（図28）。これまでの概報では、暫定的な遺物整理の結果を踏まえ、器壁の厚さ、文様構成、胎土等の諸要素が酷似するものの、口径の相違や残存部位の大きさによって別個体と判断していた。2012年度に改めて1956年出土品と第4トレンチ出土資料を突き合わせてみると、復元口径の違いは大型器種のために多少のゆがみを考慮すべき程度であって、同一個体の可能性を否定しうるほど異なることが判明した。したがって、同一個体と考えるのが自然なものである。しかし、両者の接合関係を検討したところ、同一個体であるかどうかの結論が出せなかった。というのも、1956年出土品は口縁部のほぼ3/4が残存するのであるが、第4トレンチ出土資料はその欠損部にちょうど収まるほどの大きさであるにもかかわらず、破片の接点がないのである。1956年出土品の破片の接合の仕方次第では、第4トレンチ出土資料が欠損部に収まらないことも考えられ、そうだとすると、やはり酷似した別個体である可能性を考えなければならない。現状では同一個体とも、別個体とも断定できないため、遺物整理の進展をまって改めて判断したい。

一方、この大型広口壺とは別に、米子市史資料編には普段寺1号墳出土と伝わる広口壺が他に3個体掲載されている。これらの現物は佐々木コレクションとして米子市教育委員会が管理している。これらがくびれ部から出土した土器棺の一部である可能性も排除できないが、確かに普段寺1号墳から出土したものであるかどうか、客観的に証明できないため、現段階では参考資料にとどめるべきであろう。ただし、発掘調査によって出土した土器との接合関係までは検討できていないため、今後の遺物整理の課題として判断を保留しておきたい。

1956年出土の大型広口壺の底部には穿孔があったとされ、その孔を塞いでいた土器として楕円形の合子形土器がある（図29）。これまでは身の底部～脚部の破片（a）のみが知られていたが、これに接合すると考えられる胴部～口縁部片（d）が佐々木コレクション中にあることが判明した。底部側を広口壺に押し当てた状態で出土したとされ、佐々木氏のメモや東森氏の論考、さらに米子市史資料編では口縁部側を下向きに設定した状態で図示されているが、土器単体として図化する場合は反転して提示すべきものである。

佐々木コレクションとして保管されていたもの（a）と、第6トレンチから出土した底部片（b）が接合するとともに、同一個体と考える文様や胎土をもった口縁部片（e～g）も出土しているため、ある程度器形の復元が可能になった。また、測量調査時に東側くびれ部付近で表採していた器種不明の土器片（c）がこの合子形土器の底部片であったことも判明した。

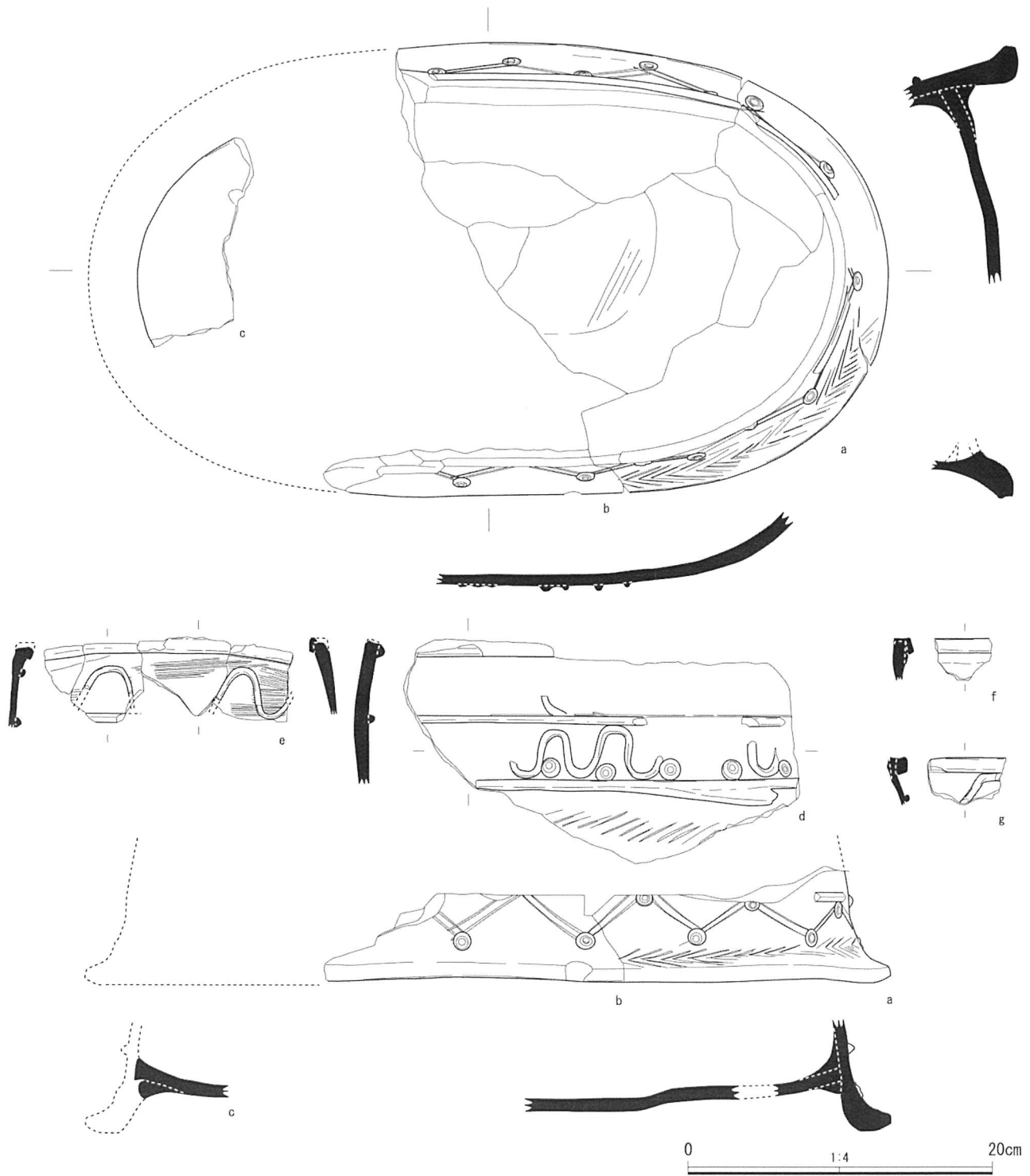


図29 楕円形合子形土器

底部は、長径 53cm、短径 30cm に復元でき、高さ 8 cm が残存する。脚部がやや側方に張り出す形態をなし、その内面に上げ底状の平たい底がとりつく。破片 a ~ c の粘土接合痕を観察すると、筒状の本体の内面をやや肥厚させ、そこに底板となる粘土板を載せたのち、表裏面から補充粘土を付加して本体に接着するようである。大きな面積の粘土板を浮かせているためであるのか、底部の中央付近は下方に垂れ下がって凹んでいる。ただし、凹んだ部分の外面はほぼ水平な面をもっているため、台等によって支持され、接地しないように工夫されていたものと考えられる。後述するように、このような底部をはめ込んだ痕跡をもつ土器片がこれ以外にも複数存在する。大きさや器壁の厚さ等から見て、明らかにこの土器とは別個体であり、楕円形で

はなく円形と推測できるものもある。

外面には2条の並行沈線で鋸歯状の文様が描かれ、その頂点部分に竹管文を押捺した円形浮文が貼り付けられている。鋸歯文の幅や円形浮文の間隔は一定ではなく、精密な割付に従ったものではないようである。上段の円形浮文に接して、幅6mmほどの粘土紐が水平方向に貼り付けられており、後述する身部片と同様に文様の区画をなすと考えられる。側方に張り出す脚部の上面には、貝殻腹縁を押し当てることによってできる羽状文が施されているが、全周せず、全体の1/6ほどの範囲に限られているようだ。施文間隔も密な部分と粗な部分があり、一定ではない。また、調整技法として、底部内面はやや粗いハケメが観察できるが、外面はかなり細かいハケメが施されている。

身の胴部～口縁部片(d)は底部片とともに一括で保管されており、同時に出土したものであろうが、出土状態は正確に分からない。現状では接合しないが、破片の湾曲から判断すると、図示したような位置に配置できると考える。口縁端部は断面方形の粘土紐を突帯状に張り付けて成形しており、現状では粘土接合部で剥離しているが、口縁端面に幅1cmほどの水平面をもつと考えられる。胴部には幅6mm前後の粘土紐が水平方向に貼り付けられて区画をなし、その上段、中段区画の中に1条の粘土紐を波状文風に貼り付けている。中段の区画には波状文風の粘土紐に加えて竹管文を押捺した円形浮文を配置している。また、下段には二枚貝の貝殻腹縁によると思われる羽状文が密に施されている。粘土紐の貼り付けにあたっては、器壁とのすき間を細いヘラ状工具で押し引きして密着性を高めているようであり、剥離した場合でも凹線状の工具痕が観察できる。また、平滑な面には残存していないが、粘土紐のすき間等には赤色顔料が付着しており、本来は赤色塗彩されていた可能性が高い。破片の高さは15cmほどであり、底部と合わせると土器の総高は23cm以上になると考えられる。器壁の厚さにあまり相違がないところからみると、接合しないまでも近い位置に配置できる破片と考えられる。復元高は25cm程度と考えられようか。

この他の口縁部片(e～g)は、接合関係の分からない破片であるが、大きさや製作技法から見て、この合子形土器の一部である可能性が高い。いずれも黒斑が顕著であり、佐々木コレクションの破片やそれに接合した破片に黒斑がみられないことからすると、それらとは近い位置にないと考えられる。現在底部を欠損する部分の口縁部にあたる可能性が考えられよう。そのように判断してよければ、この合子形土器は、本来は完形に近い状態で存在したことになる。ただし、1956年の調査時にどのような出土状態であったか不明であるため、完形であったのが土器棺の埋葬時までであったのか、埋葬後もそうであったのか判断できない。つまり、はじめから欠損した状態で大型広口壺の底部を覆っていたとすれば、土器棺の埋葬時に穿孔部を覆うものとして再利用された土器と考えられよう。一方、本来は完形で使用されていたものが破損し、乱掘等によって破片が散乱したとすれば、あらかじめ大型広口壺とセットになるべき容器として製作された可能性も考慮する必要がある。

なお、このような脚部を有し、底板を落とし込む形状の合子形土器のモデルとしては、木製の刳物容器が考えられよう。特異な文様構成もそうした木製容器の装飾や文様等に系譜を求めうる可能性がある。

4-2 発掘調査による出土遺物

副葬品と考えられる遺物

副葬品と考えられる遺物の内、古墳に伴うと考えられる鉄器は、墳頂部の攪乱埋土から3点、表土掘削中に1点、合計4点の鉄器片が出土している。このうち3片は互いに接合し、鉄剣ないしヤリの一部と考えられる。既知の鉄剣類と同一個体である可能性が高い。残りの1片は器種不明である。

墳頂部以外からも鉄製品が出土しているが、古墳に伴うものとは考えられない。また、玉類の残片が存在する可能性を意識して、注意深くふるい作業を行なったが、見つからなかった。

墳丘出土の土器

古墳に伴うと考えられる土師器の多くは、第4、6、墳頂トレンチから多く出土している。墳頂トレンチ

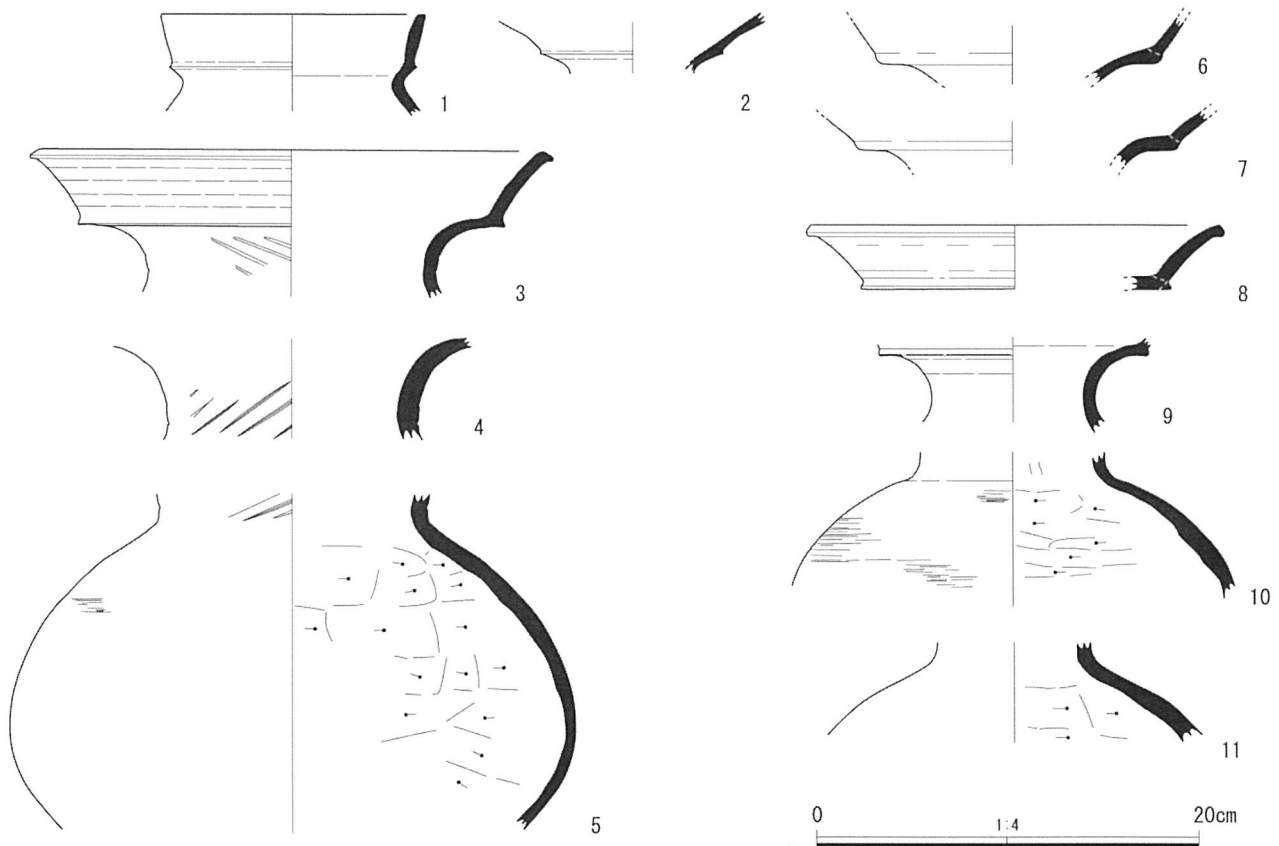


図30 墳丘出土土器（1）

からは高坏の脚部片や広口壺片が出土しているが、細片が多いため、正確に図化できないものも多い。第4トレンチからは複合口縁をもつ広口壺、甕、鼓形土器片が出土しており、その型式学的な特徴から古墳の存続時期の一端を窺い知れるものがある。また、第6トレンチからは類例に乏しい特異な加飾土器が多数出土した。その中には合子形土器と考えられるものがあり、すでに述べたように墳頂部土器棺を構成していた楕円形合子形土器と同一個体のものが含まれている。その他にも、合子形土器の身や蓋になりうる破片が多くあるが、通常複合口縁をもつ広口壺等も出土している。

すでに主要な土器片の実測図は概報に掲載してきたが、築造時期等を検討する際に手がかりとなりそうな土器の一部を改めて取り上げ、概観しておこう。なお、実測図を掲載したのは、第4トレンチ出土品（図30-1～5、11）と第6トレンチ出土品（図30-6～10）である。

甕は、複合口縁の小型甕が1点ある（図30-1）。復元口径14.0cmの口縁部～頸部にかけての破片である。第4トレンチの中央部で大型広口壺片等とともに流土から出土した。外面調整は器壁の風化によって明瞭でない部分もあるが、全面的にヨコナデ調整が施される。1次口縁と2次口縁の接合部は、後述するくびれ部土器棺墓の甕ほど突出度は高くないものの、シャープなつくりである。口縁端部はやや内傾する平坦面を持ち、端部を側方に引き出さない比較的シンプルな形態を呈する。平坦面幅は4～5mmある。小型品にしては器壁がやや厚手と考えられるものの、小谷1式に近いやや古い様相をもっていると言えよう。これ以外にもわずかながら甕の口縁部片が存在する。残存状況は良くないものの、ほぼ同様の特徴をもつと考えられる。胴部片と考えられる破片もあり、数個体程度は存在した可能性がある。

編年上重要な指標を提供する広口壺は、少なくとも5個体以上あると考えられる。いずれも複合口縁の2次口縁部がゆるく広がるタイプで、古墳以外に集落遺跡でも出土する最も一般的なものである（広口壺A）。基本的な形状が共通するものに頸部と胴部の境界に一条の突帯をもつものがあり（広口壺A2）、このような頸部突帯のないもの（広口壺A1）と区別しておこう。出雲平野における編年的研究では、頸部突帯のないA1

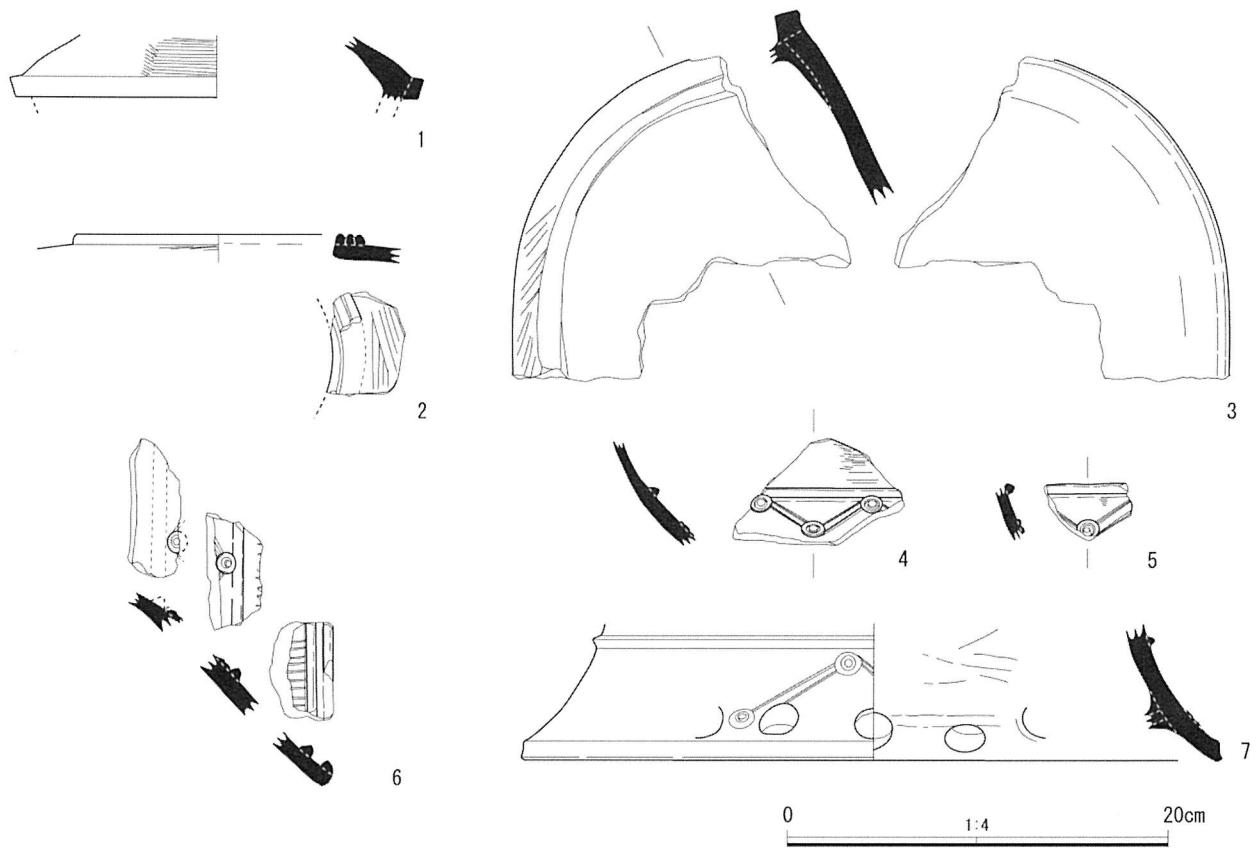


図31 墳丘出土土器（2）

類が先行し（小谷1式、土師器Ⅰ期）、頸部突帯をもつA2類は遅れて出現する（小谷2式、土師器Ⅱ期）と理解されている（松山2000、中川2006）。

西伯耆地域では、古墳時代初頭にはA2類が存在すると考えられるため⁵⁾、広口壺Aにおける頸部突帯の有無は必ずしも時期差を反映しない可能性もあるが、古墳における土器使用の観点からみると、A2類が含まれるかどうかで時期差を指摘できる場合がある。すなわち、古相のA1類は、胴部最大径が肩部付近にあり、倒卵形の胴部形態を示すものが多いが、それらが出土する鳥取市桂見2号墳、同美和32号墳等ではA2類が伴っていない。一方、胴部最大径が胴部中位にあり、球形胴を示すA1類をもつ鳥取市服部19号墳（谷口他2001）や箱形石棺をもつ米子市古市20号墳（中森他2002）等、前期でもやや新しい段階に位置付けうる古墳には、A2類が存在する。このような点に着目すれば、1号墳出土例は胴部最大径が胴部中位に移行した形態と考えられる点で新しい様相を呈しているものの、A1類だけで構成される点に古い要素をとどめている可能性がある。また、口縁部のつくりは端面が明瞭であり、1次口縁と2次口縁の接合部が水平に突出してシャープな形状を示すから、球形胴を呈するとしても口縁端部が鈍化したり、器壁が厚くなったりした段階のものとは考えにくい⁶⁾。鳥根県加茂町神原神社古墳（蓮岡他2002）、同安来市大成古墳（渡辺他1999）は、いずれも小谷2式に位置付けられる古墳であるが、出土する広口壺はA1類に限られるようであり、類似した様相にあると考えられよう。

壺、甕以外の器種としては、小型の鼓形器台と考えられる破片（図30-2）がある。口縁部片と思われるが、口縁端部と筒状部は欠損している。筒状部の径は6cmほどに復元でき、口縁部の径は現状で14cmほどである。このような小型品は、在地の系譜から出現するものではなく、小型丸底土器等を載せるために畿内地方で創出されたものが山陰にフィードバックされたと考えられている（中川1997、松山2000）。すでに概報で報告したように、墳頂トレンチで細片化した土器の中には、小型丸底土器と考えうる土器の胴部片や、口径8cm前後に復元できる小型複合口縁土器の口縁部片等がある。それらに対してはやや大きい可能性があるが

るものの、そのような小型器種に対応した鼓形器台をもっていると理解できる。ただし、鼓形器台と考える破片は非常に少なく、もともと少なかった可能性がある。これらの点は、在地的な大型の鼓形器台を比較的多く出土する神原神社古墳や大成古墳等の有力な方墳と異なる点である。

また、本書では図示していないが、高坏の脚部片が数点あり、脚部を坏底部に挿入するタイプの高坏と、筒状脚部の上部に円盤を充填して坏部を成形するタイプの高坏の2種が存在している。前者に対応すると考えられる脚端部片があり、低平に広がる脚部に小型の椀形坏部がつく形態が復元できる。後者は在地の製作技術系譜を引くものであるが（三好 2010）、脚部は径の小さなものが多く、大型品と考えられるものはないのが特徴である。このような様相が編年の位置付けをする際の手がかりとなろう。

特殊な土器

一般的な土器以外に、ほとんど類例のない特異な形態や文様をもつ土器が多い点も特徴である。これらの土器は第6トレンチから出土したものが多く、第4トレンチや墳頂トレンチ等でも出土しており、本来は供献土器の一部であったろう（図 31）。器種はおろか、天地が定かでない土器片もあるが、今後の見通しを得るために復元を試みよう。

2は径12cmほどの口縁部をもつ土器である。口縁の上面に径5mmほどの粘土紐を3条連結したものを貼り付け、わずかな立ち上がりを形成している。外面にやや粗いハケメが観察できる。これとよく似た胎土をもち、なおかつ同様な粗いハケメを施すものに1がある。突帯状の縁取りを貼り付けたもので、外径22cmを測る。いずれも第4トレンチから出土している。いずれも在地の土器の中から類例を探すことは難しく、全形はよく分からないが、2は肩部が強く張る形態をなす無頸壺と考える。胎土と調整がよく似る1は、2に対する被せ蓋とすれば、比較的大きさがよく合う。1は、鳥取市青谷上寺地遺跡出土の木製の円形合子蓋とも形態上の類縁性があり（野田他 2005）、古墳出土の合子形土器との類例としては、京都府向日市寺戸大塚古墳後円部石室出土例等（近藤他 2004）が参考になると考える。

3は第6トレンチから出土した平面形が楕円形を呈する、容器と考える土器である。縁部に施された羽状文のある面が上と考えれば、図示した左側が上面観となる土器である。底部から直接身が立ち上がる形態で、曲げ物容器をモデルとした合子形土器と考える。ただし、その場合底部裏面となる部分に非常に丁寧なナデが施されており、内面よりもむしろ平滑に仕上げられていることの評価が難しい。逆に、図示した右側が外面となる可能性を考えると、図29の楕円形合子形土器の蓋と考える。その場合、栓蓋状に組み合わせるのであるが、身の口縁端部は蓋の受部とちょうど同じ幅をもつ。大きさの点でも、組合せの点でもとくに矛盾はないので、可能性として考慮すべきと思われる。

4、5は第4トレンチから出土したもので、墳頂部の合子形土器の底部と同じ文様構成をとる。しかし、器壁の厚さや傾きは異なっており、別個体と考えられるものである。合子形土器であるかどうか不明であるが、同じような鋸歯文状の文様に竹管文押捺の円形浮文を配するモチーフであり、このような土器が複数存在することを示す。また、7は第6トレンチから出土したものであるが、やはり類似した文様をもつ。また、墳頂部の合子形土器の底部と同じ作りを示し、底板を貼り付けた痕跡を残す。円形に復元できるので、円形の合子をモデルとした土器もあると言えよう。脚部の側面には円形の透かしが施されており、この点でも木製の刳抜容器がモデルであった可能性を考える。この他にも無文ながら同様の底部構造をもつ円形合子と考えられる土器がある。

6は、いずれも墳頂トレンチから出土した破片資料である。部分的な小片しか存在しないが、文様構成や断面形の連続性から、図のような断面形をもつ土器を復元しよう。端部に2条の突帯がある破片を脚部とみて図示しているが、口縁部となる可能性も否定はできない。その場合は、容器の身部として復元することになる。しかし、図示した以外にも同一個体と考えられる破片があり、いずれも平面形では顕著な円弧をみせないため、平面形が楕円形を呈すると考えられる。したがって、墳頂部の楕円形合子形土器との関わりを考えるのであるが、その蓋になる可能性がある。楕円形合子の蓋は長径の中軸が稜線をなして山形に突出す

るものが多いから、3のような平たい蓋を想定するよりも妥当性があるかもしれない。

特殊な器形、文様をもつ土器の多くは、円形ないし楕円形合子をモデルにした土器と考える。それに付随する蓋と考える土器もあるので、今後の整理や復元においては、木製容器の器形等を参考にしていく必要がある。また合子形土器だけでも複数個体存在することが明らかとなったが、このような土器を用いることの意味や系譜はさらに追究していく必要がある。

西側くびれ部土器棺墓の土器

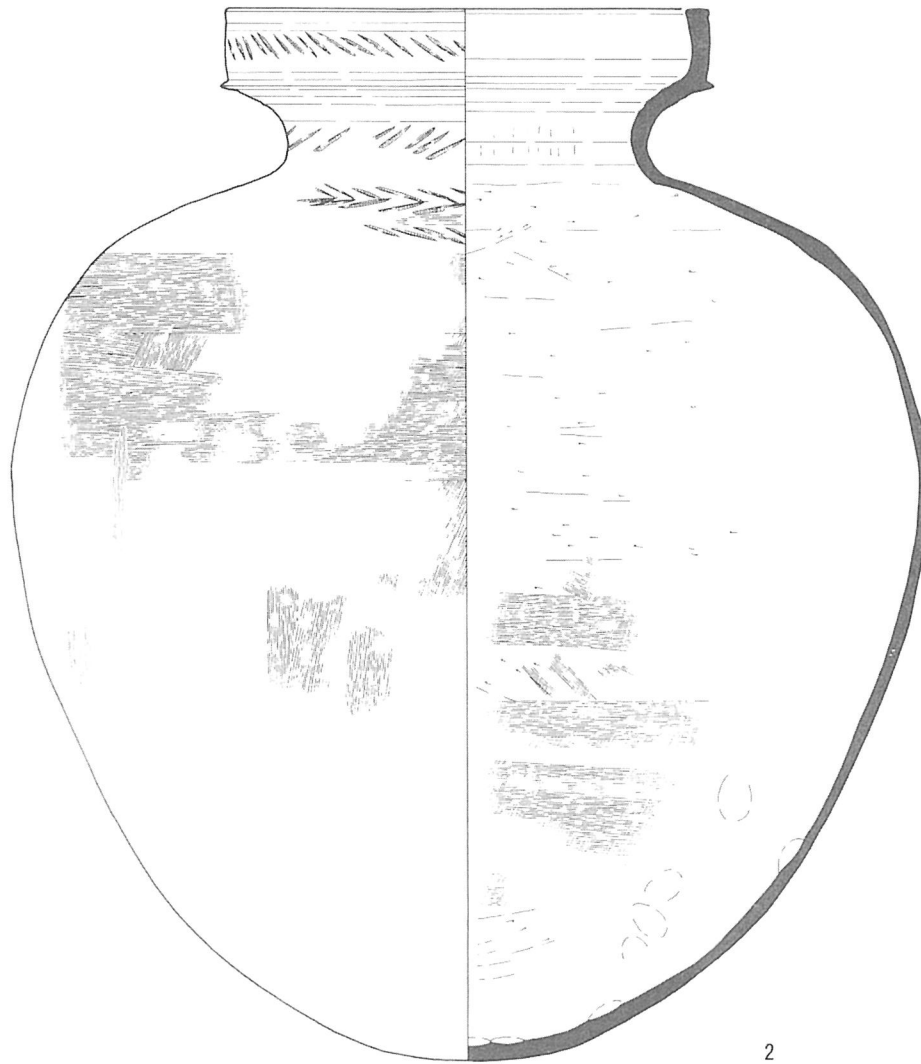
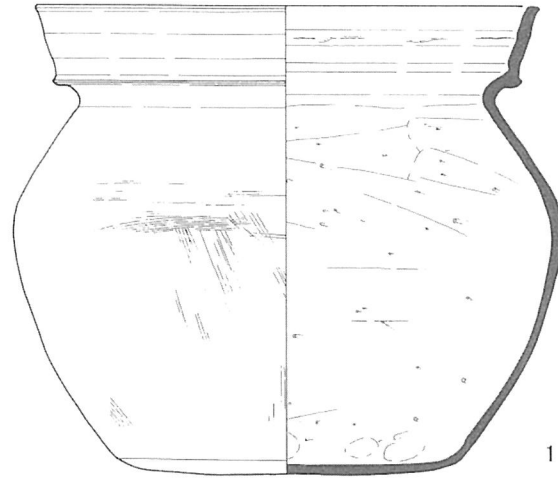
西側くびれ部の土器棺は複合口縁の平底甕と同じく複合口縁の広口壺の2点からなる(図32)。1は、口径26.8cm、高さ24.8cm、胴部最大径29.2cmの複合口縁甕である。二次口縁は外傾して直線的に立ち上がる。端部は、ヨコナデにより幅5mmの平坦面をなす。一次口縁と二次口縁の接合部外面には粘土紐を付加し、横方向に鋭く突出させる。口縁部の調整は内外面ともに複数回のヨコナデを施す。頸部は短く緩やかに屈曲し、外面には強いヨコナデが1条みられる。内面調整もヨコナデである。胴部は、最大径が中位よりやや上に位置し、肩部は丸みをあまり帯びることなく、やや直線的である。肩から膨らみをもったまま底部へと至る。頸部から肩部への外面調整は磨滅しており、不明瞭であるが、肩部から底部にかけては、タテハケの後、最大径付近にヨコハケを施す。内面調整は、胴部から肩部にかけては横方向のケズリを主体とする。底部は平底をなし、厚さは5mm前後である。外面には一部ハケメがみえる。内面には、横方向のケズリと指頭圧痕が顕著に観察できる。

2は、口径25.8cm、高さ55.8cm、胴部最大径48.2cmの複合口縁壺である。二次口縁はほぼ垂直に立ち上がる。端部は肥厚しており、1.2cmの平坦面をもつ。一次口縁と二次口縁の接合部外面には粘土紐を付加し、横方向に鋭く突出させる。口縁部の調整は、内外面ともに複数回のヨコナデである。頸部は短く緩やかに屈曲する。調整は内外面ともにヨコナデを施す。胴部は、最大径が中位より上にあり、肩から丸く膨らみ徐々にすぼまりつつ丸底の底部へと至る。底部の厚さは5～9mmを測る。外面には胴部下半にタテハケを施した後、最大径より上部にヨコハケをかける。タテハケは底部までおよぶと思われるが、磨滅のため不明瞭である。内面には横方向のケズリを施し、胴部下半においては、その後ヨコないしナメハケをかける。底部内面には、一部ナデ調整と指頭圧痕が残る。

なお、口縁部から肩部外面には5段の羽状文を施す。口縁帯と頸部に各1段、肩部に3段あり、段ごとに施文方向を変えている。3段目と4段目は接するように施文し、逆「く」の字状を呈する。

土器棺に使用された土器の編年的な位置付けを考えてみよう。有力な手がかりとなるのは、平底甕である。このタイプの甕は、弥生時代終末期から出現し始めるが、古墳時代前期後半までには消滅すると考えられ、短期間しか存在しない器種である。妻木晩田遺跡妻木山地区SI-95号住居(松本他2000)、倉吉市二タ子塚遺跡3号墳土器棺(加藤他1995)等、弥生時代終末期新相～古墳時代初頭に位置付けうる段階では、両肩部に把手が付く。甕本体は不明ながら、把手は大山町徳楽古墳でも出土しており、線刻が施された装飾性の高いものなので、やはり土器棺として使用されていた可能性がある。類例は少ないものの、古相の段階では口径と器高の比率がほぼ1:1となると考えられる。桂見1号墳や日原6号墳の中心埋葬への供献土器も同様のプロポーシオンを復元しうる。一方、やや下る段階の土器を伴うものでは、口径と器高の比率が1:0.8程度となり、扁平なプロポーシオンを示す。美和43号墳の第5主体土器棺に使用されたものは、器壁が厚く、口縁端面もやや丸みを帯びており、型式学的に新相に位置付けうるが、口径に対して器高が低い形態をなす。このようにみると、この平底甕は扁平化が進む以前の段階の古いプロポーシオンを保っていると言えよう。

複合口縁広口壺は、土器棺に使用されることが多い複合口縁が直立するタイプのものである。集落域でも多く出土する広口壺Aと区別し、広口壺Bとしよう。土器棺に使用されることが多いため、広口壺Aよりも大型であり、胴部のプロポーシオンは球胴化しない。山陰地域の類例を概観すると、肩部が張り、胴部が倒卵形を示すものが古相を示す、という点は広口壺Aと軌を同じくするが、やがて胴部最大径の位置が下がるとともに、器壁内面のケズリが省略されて厚くなる。また、底部がつぶれて平底状を呈するものや長胴化し



0 1:4 20cm

図32 西側くびれ部土器棺に使用された土器

てプロポーシオンが間延びしたもの等が現れると考えられる。新相の段階では、口縁端部の仕上げにシャープさが失われ、1次口縁と2次口縁の接合部の突出がなくなる方向で変化する。さらに、頸部や肩部に施文されていた羽状文がなくなり、単にヨコハケを施すだけになる。

このような変遷観をもとに資料をみると、肩部が張る倒卵形のプロポーシオンからやや逸脱しつつあるものの、器壁の厚さはおおむね一定で内面のケズリの入念さは失われていない。口縁端部の明瞭な面は丁寧なナデ調整によって仕上げられており、1次口縁と2次口縁の接合部の突出も明瞭で鋭いことが特徴である。したがって、組合せになる甕と同様に古相を示す土器群と考えてよいであろう。墳丘出土土器とも照らし合わせてその編年的位置を探ると、小谷2式の範囲内で理解できると考える。

従来、墳頂部の土器棺墓に使用された大型広口壺が編年根拠となって、1号墳の時期は松本1号墳、安来市造山3号墳（山本他 1967）、倉吉市国分寺古墳（梅原 1924、岩本 2006）等に並ぶ小谷3式併行の古墳と考えられてきた（池淵 2006）。しかし、墳頂部の土器棺は墳丘盛土を掘り込む墓壙内にあるから、確実に中心埋葬施設に後出することが明らかである。少なくとも墳丘出土土器の古相を示す部分は、中心埋葬への供献土器と考えうるが、それらは小谷2式の範囲内で理解しうるものである。西側くびれ部の土器棺墓は、その構築が中心埋葬施設に後続すると考えられるが、それもやはり小谷2式で理解できることから、1号墳の構築は小谷2式の時間幅の中で考えることが妥当と言えよう。出土した遺物の整理を継続しつつ、さらに検討を重ねていきたい。

5. まとめと展望

過去5年間の発掘調査の成果をまとめると、普段寺1号墳は全長約25m、後方部の規模が13m×14m、前方部の長さが11mの前方後方墳であると考えられる。墳丘は、ほぼ全体を地山である風化花こう岩を前方後方に削り出すことによって整形している。地山の土質は、粘土に近い部分から岩盤まで多様である。しばしば脈状に貫入する岩盤が存在し、前方部やくびれ部の墳端に近い場所でも検出されたが、それらが葺石やその代替物として取り扱われた痕跡は認められなかった。発掘調査では、流土がそれらを直接覆っていることを確認したが、墳丘の削平や流出が顕著であったことを勘案すると、墳丘外面にそのような岩盤が露出し、葺石状の外観を呈することもなかったであろうと推測する。

前方部の一部でも盛土と考えうる土層を検出したが、基本的に大規模な盛土は後方部墳頂部に限られる。各トレンチにおける所見を総合すると、おそらく前方部上面とほぼ同じレベル（標高53.0m付近）の後方部に水平面を削出し、その面から盛土を開始する構築技法と考えられる。地山整形ののちに部分的に盛土を行なって墳丘を構築する技法は、山陰における前期古墳として珍しくない方法であるが、普段寺1号墳においてはその盛土がかなり厚い部類に入り、埋葬施設の構築とも関わっている点が特徴的であろう。おもな山陰の前期古墳のうち、発掘調査によって墳丘構造が把握された古墳と比較すると、墳頂部の盛土と埋葬施設の構築方法に系譜の違いにもとづくと思われる様相の違いが指摘できる（表1）。

すなわち、社日古墳、大成古墳、塩津山1号墳（勝瀬1997）、造山3号墳（山本1967）、日原6号墳等はいずれも墳頂部の盛土が薄くしかないか、盛土を施さない一方、地山に深い墓壙が掘削されて埋葬施設が設置される。社日古墳の場合は0.8m以上の盛土が想定されており、他と区別すべきかもしれないが、掘込墓壙となる点では同じである。これは山陰東部の前方後円墳である本高14号墳でも同じで、初葬と考えられる埋葬施設1は地山面に埋葬施設が掘り込まれる（大川他2010）。これを切って後出する埋葬施設2も、墳頂部に40cmほどの盛土を足すものの、墳頂部を土壇状に高くするだけであり、盛土量としては多くない。

ところが、同じ方墳でも神原神社古墳は例外的に大規模な盛土をもつ上に、盛土の中間部分に竪穴式石槨の基底面が設置されている。石槨下層の盛土に対しては掘込墓壙と呼べるが、竪穴式石槨の構築、裏込めと並行しながら墳丘盛土が行なわれたと考えられ、上半部は一種の構築墓壙と言えよう。いずれにせよ、地山に水平面を削り出したのちに盛土を開始し、墳丘と埋葬施設の構築が一体的に進行するという点で普段寺1号墳と共通する構築技法と言えよう。

同様な構築方法が前方後方墳の松本1号墳でも窺われる点は重要である。また、出土遺物によって前期に

表1 墳丘盛土と埋葬施設構築方法の関係

古墳名	墳形	墳頂部盛土	墓壙	埋葬施設	備考
普段寺1号墳	前方後方	0.8m(～1.5m)	無墓壙	木棺直葬?	地山水平面削出
社日1号墳	方	0.3m	掘込(地山)	木槨・木棺	
塩津山1号墳	方	なし	掘込(地山)	竪穴式石槨?	
神原神社古墳	方	2.6m～	掘込+構築	竪穴式石槨	地山水平面削出
大成古墳	方	0.1m	掘込(地山)	竪穴式石槨	
造山3号墳	方	なし	掘込(地山)	竪穴式石槨	
松本1号墳	前方後方	1.2m～?	不明	粘土槨	地山水平面削出
日原6号墳	方	なし	掘込(地山)	木棺	
晩田山3号墳	前方後円	2.2m	構築	竪穴式石槨	地山水平面削出
桂見2号墳	方	1.0m	掘込	木棺	
美和32号墳	方	1.2m	掘込	木棺	旧表土上に盛土
本高14号墳	前方後円	なし	掘込(地山)	不明(未調査)	第2埋葬は0.4m盛土

位置付けうるわけではないが、可能性として前期古墳と考えられる⁷⁾前方後円墳の米子市晩田山3号墳にも同様の墳丘構築技法が観察できる(岩田他 2000)。すなわち、ここでは、地山水平面上に2m以上の盛土が行なわれるが、その途中から後円部埋葬施設の構築が墳丘と並行して行なわれていることが観察されている。やはり時期は不明であるが、同じ丘陵状に位置する方墳の11号墳も同様な墳丘構築技法を示す点は興味深い。

このような墳丘構築技法の違いは、単に土木工法の相違にとどまらず、葬送儀礼を墳丘の完成に先行して行なうか、あるいはそれに後出するかの違いとも関連し、古墳の性格を考える際の重要な視点になる(岩本 2010)。地山水平面の削出後に大規模な盛土を行なうという墳丘構築技法は、当該地域の弥生時代には見られない技法であり、古墳時代においても点的にしか確認できない技法である。したがって、外来の技術系譜の採用を想定できる。三角縁神獣鏡を副葬し、なおかつ前方部をもった墳丘形態を初めて採用したと考えられる普段寺1号墳において、在地の墳丘構築法とは異なる技法が採用されているという点に大きな意義を見出すことができよう。また、それが孤立した事例ではなく、やはり前方部をもつ類型の古墳に同様な墳丘構築技法が採用されている点を重視すべきであろう。

なお、因幡における出現期古墳の場合はやや様相が異なり、桂見2号墳、美和32号墳等では、比較的厚い盛土に対して掘り込み墓壇が構築される。これは弥生時代の墳丘墓に遡る墳丘構築技法であり、西伯耆に比べて腰高な墳丘をもつことに反映している。その意味では、本高14号墳の墳丘構築技法は、在地において異質な技術系譜の採用と言えるかもしれない。

確実な出土資料によって編年的位置付けを検討できるようになった点は、発掘調査の最大の成果である。すなわち、これまでに知られていた副葬品や初葬に後出する大型土器棺ではなく、初葬に伴う可能性がある供献土器と考えられる土師器の資料が得られた。また、棺専用に作られた大型広口壺を用いた土器棺とは別に、一般的に集落域でも用いられうる土器を転用した小児用土器棺が検出され、墳丘構築の下限の時期を知りうることになったのである。

これらの編年的位置を検討した結果、神原神社古墳や大成古墳等、出雲地方において出現期の大型方墳と同時期に位置付けうるということが考えられた。すなわち、従来は後方部墳頂の土器棺に用いられていた大型広口壺によって時期を下げて理解されてきたわけであるが、西側くびれ部の土器棺、墳丘出土の土師器のいずれにおいても、小谷2式の範囲内で理解しうる土器の存在が明らかになった。土器の位置付けについては、さらに遺物整理の進展を待つべき部分もあるが、少なくとも前期中葉以前という時間的位置付けを大きく変更する必要はないと思われる。

この点は三角縁神獣鏡の年代観とも大きな矛盾はないであろう。1号墳出土の三角縁二神二獣鏡は、舶載三角縁神獣鏡を4段階区分したうちの第3段階に位置付けられ、2号墳の三角縁四神四獣鏡は第2段階に位置付けられている(福永 2005、岩本 2008)。いずれも1面のみであるから、製作時期と副葬時期がずれる可能性をまったく検証できないのであるが、複数面もつ古墳の組み合わせを見ると、製作の同一段階ないしは隣接段階でまとまる傾向が指摘されている(福永 1994、岸本 1995、岩本 2010)。長期保有が生じて製作時期と副葬時期が大幅にずれる可能性は皆無ではないものの、三角縁神獣鏡の製作から副葬に至る過程がおおむねスムーズであったと考えられるのである。普段寺古墳群の場合、1号墳と2号墳の築造順を明らかにできなかったものの、同一の地山面を墳丘裾として共有する関係から、比較的近い時期に築造されたことが窺われたが、三角縁神獣鏡の年代的な位置も近い関係にあると考えられる。このことから、やはり、入手から副葬までの時間差をそれほど過大に見なくてもよいと考えられよう。つまり、三角縁神獣鏡の組合せによって時間軸上の参考となる古墳と比較を行なっても、著しい齟齬はきたさないであろうと思われる。

このような前提のもとに第3段階までの三角縁神獣鏡をもつ代表的な古墳をみると、椿井大塚山古墳、寺戸大塚古墳(後円部)、桜井茶臼山古墳等の前方後円墳が存在する。これらの編年的位置には種々議論がありうるが、前期を4段階区分した場合の前半2段階の内に納まるという点では異論が少ないであろう。

編年の基準となるような副葬品をもつ古墳と対比できる遺物が少ないので、間接的な検討にならざるを得

ないが、おおむね前期前半に位置付けうるという見通しが得られた。今後は、出土した土器の編年的な位置付けをより確実にする一方、他の副葬品等でも検討を深めていきたい。また、地域史の中に位置付けて普段寺古墳群の歴史的意義や性格を描き出す作業も今後の課題とせざるを得ない。本研究で解決した課題よりも、積み残した課題の方がはるかに多いが、継続して検討を重ねることで責を果たしていきたい。

註

- 1) 遺跡地図の公式な遺跡名は寺内古墳群であり、1号墳のみ普段寺古墳という別称が付されている。すでに別称が古墳群全体の名称としても定着していること、小字名によって遺跡名を付す原則に照らしても、現状の「普段寺古墳群」の方が適当であること（より厳密には「下普段寺山古墳群」とすべきだが）等を勘案し、本書では、同一尾根上の7基を普段寺古墳群と呼ぶ。遺跡地図との対応関係は、普段寺1号墳～6号墳までが寺内001号墳～006号墳、7号墳は寺内048号墳である。6号墳は、5号墳からさらに数10m南に位置する径約16mの円墳である。7号墳は現地踏査によって確認できておらず、規模、墳形ともに不明である。
- 2) 佐々木謙氏のメモによると、1号墳西側くびれ部の崖面に土坑状の落ち込みが観察されており、そこに土器棺が露出しているのが知られていたようである。いつの時点かは不明だが、その土器棺が採集され、地元の小学校に寄贈されたらしい。その後、町の中央公民館に遺物の所管が移ったようであるが、筆者らがその伝聞によって所在を追跡調査した2009年の時点では、既に現物の行方が分からなくなっていた。なお、このことが記されたメモは、「手間古墳群」と題されたB5判大学ノートであるが（作製年不明）、他の会見町内の遺跡に関するメモや資料等とともに簡易製本され、『会見町巡歴抄』というタイトルが付けられている（佐々木謙文庫第1326号、平成14年9月、米子市立山陰歴史館）。
- 3) 佐々木謙「手間古墳群」『会見町巡歴抄』佐々木謙文庫第1326号（2002）による
- 4) 山陰考古学研究所作成の墳丘測量図は、米子市史資料編に掲載されるまでは未刊だった。岡田龍平氏らによる測量図は、弥生時代中期の木棺墓群である宮前遺跡の発掘調査報告書（岡田他1979）に掲載されたが、解説や墳丘に関する記述はない。また、東森市良・松本哲氏による測量図は1990年代後半の作業であるが、未報告である。墳形の認識は、おそらく最初の墳丘測量の結果改訂されたと考えられ、1970年代末までには、それ以前とは異なって前方後方墳との認識が示されている（大村他1978）。
- 5) 頸部突帯をもつ広口壺の祖形としては、米子市・大山町妻木晩田遺跡の松尾頭地区SI-36号住居出土例がある（松本他2000）。また、大山町徳楽古墳出土土器の中にも存在する（花谷他1992）。これらは、端面に刻み目が施されたりするものがあり、また、突出度が高く突帯の各面が凹んで断面がM字状を呈するものが含まれ、型式学的に古相を呈すると考えられる。
- 6) ただし、口縁部のつくりの丁寧さには2相あり、風化による磨滅等を考慮する必要があるものの図29-6、7のようにやや端部が丸みを帯びたものも含まれる。これは初葬に伴う供献土器と後出する土器棺に伴う供献土器の2相が考えられるという事情を反映しているのかもしれない。今後の整理事業の中で追究すべき課題である。
- 7) 晩田山3号墳は、妻木晩田遺跡洞ノ原地区における弥生時代環濠内の調査（濱田2003b）の進展によって間接的に古墳時代前期に位置付けうることとなった。すなわち、3号墳に隣接して築造された円墳の晩田山10号墳の周溝埋土から、普段寺1号墳後方部土器棺よりもやや古相に位置付けうる大型広口壺の口縁部片が出土し、10号墳に伴う土器棺墓の可能性が考えられた。また、10号墳周辺の包含層から鑿頭式鉄鏃が出土しているが、最も高い可能性として10号墳の副葬品が流出したものと考えられた。これらの事実から、10号墳が前期に位置付けうる円墳と報告されたのであるが、3号墳は、その10号墳よりも丘陵最高地点に近く、立地の面で先行すると考えられたのである。

参考文献

- 会見町教育委員会 1981『浅井宇土居敷遺跡発掘調査現地説明会』
赤井 進（編）1975『諸木遺跡発掘調査概報』会見町教育委員会

- 新井宏則（編）1993『天王原遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会
- 池淵俊一 2006「山陰における前期古墳の様相と課題―出雲を中心に―」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会 2006 年度愛媛大会実行委員会
- 池淵俊一 2007「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
- 岩本 崇 2006「伯耆国分寺古墳の再検討」『大手前大学史学研究所紀要』第 6 号
- 岩本 崇 2008「三角縁神獣鏡の生産とその展開」『考古学雑誌』第 92 巻第 3 号
- 岩本 崇 2009「山陰の鏡と古墳―三角縁神獣鏡を中心に―」『山陰の古墳出土鏡』第 37 回山陰考古学研究集会
- 岩本 崇 2010「古墳時代前期における地域間関係の展開とその特質」『龍子三ツ塚古墳群の研究』大手前大学史学研究所・龍子三ツ塚古墳調査団
- 岩田文章他 2000『妻木晩田遺跡―洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書一』淀江町教育委員会
- 梅原末治 1924『因伯二国における古墳の調査』鳥取県史蹟勝地調査報告第 2 冊、鳥取県
- 大谷晃二 2012「山陰」『講座日本の考古学 7 古墳時代・上』青木書店
- 大橋泰夫他（編）2008『普段寺古墳群 I 一第 1～3 次調査概要報告書一』普段寺古墳群調査団
- 大庭俊次他（編）2000『社日古墳』建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- 大賀克彦 2005「弥生時代における山陰系玉類の流通」『玉文化』第 2 号
- 大村俊夫他（編）1969『福市遺跡の研究』山陰考古学研究所
- 大村俊夫他（編）1978『山陰の前期古墳文化の研究 I 一東伯耆 I・東郷池周辺一』山陰考古学研究所
- 大川泰広他（編）2010『本高古墳群』鳥取県教育委員会
- 岡田龍平他（編）1979『宮前遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会
- 岡田龍平他（編）1982『宮尾 天万遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会
- 岡田龍平他（編）1995a『田住松尾平遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会
- 岡田龍平他（編）1995b『朝金小チャ遺跡報告書』会見町教育委員会
- 岡村秀典 2005「画文帯神獣鏡」『綾部山 39 号墓発掘調査報告書』御津町教育委員会
- 角田徳幸 2009「山陰における九州系横穴式石室の様相」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店
- 加藤誠司他（編）1995『二タ子塚遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
- 勝瀬利栄（編）1997『塩津古墳群』建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- 河上邦彦他（編）1996『中山大塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所
- 菊地芳朗 2010『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会
- 岸本直文 1989「三角縁神獣鏡製作の工人群」『史林』第 72 巻第 5 号
- 岸本直文 1995「三角縁神獣鏡の編年と前期古墳の新古」『展望考古学』考古学研究会 40 周年記念論文集
- 北浦弘人他（編）1997『小町石橋ノ上遺跡・朝金第 2 遺跡・田住桶川遺跡・田住第 8 遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 久保穰二郎 2010「浅井 11 号墳出土銅鏡について」『調査研究紀要』3、鳥取県埋蔵文化財センター
- 小原貴樹（編）1978『日原 6 号墳発掘調査報告書』米子市教育委員会
- 近藤喬一他 2004『開館 20 周年記念特別展示図録 向日丘陵の前期古墳』向日市文化資料館
- 坂本嘉和他（編）2009『坂長第 6 遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 下垣仁志 2005「阿為神社所蔵三角縁唐草文帯二神二獣鏡」『將軍山古墳群 I』新修茨木市史史料集 8
- 下高瑞哉（編）1991『大袋丸山遺跡』米子市教育委員会
- 高田健一 2005「鳥取県西部における弥生時代後期の集落像」『待兼山考古学論集―都出比呂志先生退任記念―』大阪大学文学部考古学研究室
- 高田健一 2006『妻木晩田遺跡―甍る山陰弥生集落の大景観―』日本の遺跡 16、同成社

- 高田健一 2010「山陰東部における弥生時代前半期の集団墓」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学文学部考古学研究室
- 高田健一他（編）2010『普段寺古墳群Ⅱ—第4～7次調査概要報告書—』普段寺古墳群調査団
- 高田健一他（編）2011『普段寺古墳群Ⅲ—第8次調査概要報告書—』普段寺古墳群調査団
- 高田健一他（編）2012『普段寺古墳群Ⅳ—第9次調査概要報告書—』普段寺古墳群調査団
- 高田健一 2013a「山陰地方の弥生社会像」『シンポジウム記録9 吉備弥生社会の新実像・弥生墓が語る吉備』考古学研究会
- 高田健一（編）2013b『古郡家1号墳・六部山3号墳の研究—出土品再整理報告書—』鳥取県
- 高橋浩樹（編）2006『諏訪南山崎遺跡』財団法人米子市教育文化事業団
- 富長源十郎他（編）1986『寺内八号墳発掘調査報告書』会見町教育委員会
- 豊島直博 2008『古墳時代の鉄製刀剣』2005（平成17）年度～2007（平成19）年度科学研究費補助金（若手B）研究成果報告書、奈良文化財研究所
- 長岡充展他（編）1985『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』財団法人鳥取県教育文化財団
- 中川 寧 1997「いわゆる「山陰系土器」についての若干の考察」『立命館大学考古学論集』Ⅰ
- 中川 寧 2006「山陰地域—出雲—」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- 中原 齊他（編）1985『東宗像遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 中原 齊 1988「特集 会見町普段寺1号墳出土の三角縁神獣鏡」『鳥取県埋蔵文化財センターニュース』No.19、鳥取県埋蔵文化財センター
- 中原 齊他（編）1992,1994『越敷山遺跡群』会見町教育委員会・岸本町教育委員会
- 中森 祥他（編）2002『古市遺跡群3 古市宮ノ谷山遺跡・古市古墳群』財団法人鳥取県教育文化財団
- 名越 勉 1996「東伯耆地域の弥生墳墓・墳丘墓」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』鳥根大学法文学部考古学研究室
- 新納 泉 1991「権現山鏡群の型式学的位置」『権現山51号墳』権現山51号墳刊行会
- 西川 徹（編）1995『鶴田東山遺跡・鶴田合清水遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 野田真弓他（編）2005『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告1 木製容器・かご』鳥取県埋蔵文化財センター
- 蓮岡法暲他（編）2002『神原神社古墳』加茂町教育委員会
- 花谷めぐむ他 1992「徳楽方墳出土の土器について」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』鳥根大学法文学部考古学研究室
- 濱田竜彦他（編）『古市遺跡群1 古市カワラケ田遺跡・古市河原田遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 濱田竜彦 2003a「伯耆地域における弥生時代中期～古墳時代前期の集落構造」『日本考古学協会 2003年滋賀大会資料集』日本考古学協会 2003年滋賀大会実行委員会
- 濱田竜彦（編）2003b『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書—洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査—』鳥取県教育委員会
- 濱田竜彦他（編）2005『日本海をのぞむ弥生の国々—環濠から見える弥生社会とは—』編集工房遊
- 東方仁史 2005「米子市宗像1号墳出土遺物について」『鳥取県立博物館研究報告』第42号
- 東方仁史（編）2008『企画展 因幡・伯耆の王者たち』鳥取県立博物館
- 東森市良 1967「山陰地方発見の壺棺とその特色」『考古学研究』第14巻第2号
- 樋口隆康 1952「同型鏡の二三について—鳥取県普段寺山古墳新出鏡を中心として—」『古文化』第1巻第2号、日本古文化研究会
- 樋口隆康 1979『古鏡』新潮社
- 福永伸哉 1991「三角縁神獣鏡の系譜と性格」『考古学研究』第38巻第1号
- 福永伸哉 1994「三角縁神獣鏡の歴史的意義」『倭人と鏡 その2—3・4世紀の鏡と墳墓—』第36回埋蔵文化財研究会
- 福永伸哉 1996「舶載三角縁神獣鏡の製作年代」『待兼山論叢』史学篇第30号
- 福永伸哉 2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
- 福永伸哉他（編）1996『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会

- 藤田憲司 2006「神原神社古墳と山陰の前方後円墳時代初期墳丘墓」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- 藤丸詔八郎 2000「三角縁神獣鏡の製作技術について（予察）—製作工程に「踏み返し」が介在する同範（型）鏡群の場合—」『研究紀要』第7号、北九州市立考古博物館
- 船井武彦他（編）1984『桂見墳墓群』鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団
- 船井武彦他（編）1987『面影山古墳群・吉岡遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会
- 船越元四郎他（編）1976～1978『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅲ、鳥取県教育委員会
- 船越元四郎他（編）1982『米子市諏訪遺跡群発掘調査報告Ⅱ』米子市教育委員会
- 古瀬清秀 1991「農工具」『古墳時代の研究』第8巻古墳Ⅱ副葬品、雄山閣
- 松井 潔 1997「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第19集
- 松本岩雄 1986「墳丘出土の大形土器」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 松本 哲他（編）1992『清水谷遺跡』西伯町教育委員会
- 松本 哲他（編）2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告』Ⅰ～Ⅳ、大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会
- 松山智弘 2000「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学会誌』第17集
- 三好 玄 2010「布留式土器様式構造の再検討」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学
- 山田真宏他（編）1994『美和古墳群発掘調査報告書—美和31・32・33・34・37・43・44号墳の調査—』財団法人鳥取市教育福祉振興会
- 山田康弘 2000「山陰地方における列状配置墓域の展開」『島根考古学会誌』第17集
- 山本 清他 1963『松本古墳調査報告』島根県教育委員会
- 山本 清他 1967『造山第三号墳調査報告』島根県教育委員会
- 湯村 功他（編）1997『天萬土井前遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 米子市教育委員会 1998『尾高浅山遺跡』米子市文化財ガイド2
- 米子市史編さん協議会（編）1999『新修米子市史』第7巻資料編考古・原始・古代・中世、米子市
- 渡辺貞幸・金山尚志（編）1999『大成古墳第4・5次発掘調査報告書』島根大学考古学研究室・安来市教育委員会

山陰における前方後円墳の出現過程
2010年度～2012年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書

発行年月日：2013年3月29日

編集：高田健一

発行：鳥取大学地域学部

〒680-8551 鳥取市湖山町南 4-101

印刷：中央印刷株式会社